

LIXIL *eye*

建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌[リクシル・アイ]

no. 9

October 2015

- 特集
- | | | |
|---|------------|---------------|
| 1 | 新・生き続ける建築 | アントニン・レーモンド |
| 2 | 建築ソリューション | 霞が関ビルディング |
| 3 | まちづくりの今を見る | 道空間を活用したまちづくり |



風景をデザインする 国内編

敷地境界を越えたボーダレスな風景づくり | 東京都中野区 |

JR中野駅北口に広がる広大な再開発地区「中野四季の都市^{まち}」は、約1.5haの「中野四季の森公園」をオフィス、住宅、大学などが取り囲むような構成となっており、「中野セントラルパークサウス」は、この地区の南に位置する区域である。この区域の特徴は、道路を介さずに公園、大学の敷地とじかに接していることである。設計に際しては、隣接する公園、大学の関係者と協議を重ね、「中野四季の都市」全体で境界を感じさせないボーダレスな空間形成とし、そこでの賑わいの創出を目指した。その仕掛けのひとつとして、公園との境界沿いにウッドデッキをランダムに配置し、そこに複数のタイプのファニチャーを設けた。ファニチャーはコミュニケーションやアクティビティを促す装置であると同時に、風景にアクセントを与える重要な要素でもある。オープンスペース全体での多様なアクティビティと風景との調和を重ね合わせて検討し、アウトドア・ミーティングに適したテーブルベンチや恋人同士などが語らえるスタイリッシュなベンチ、大小さまざまなグループに対応できる可動式のテーブルベンチ、一人で読書などを楽しめるスツールなど、利用者が状況に応じて使い方を選択できる設えを施した。竣工後3年ほど経過するが、訪れるたびに驚くほどの賑わいを見せている。新たに生まれたこの笑顔あふれる風景が、地域の人々に愛されて継承されていくことを期待する。

永石貴之

Takayuki Nagaiishi

プロジェクト概要

名称：中野セントラルパークサウス
所在地：東京都中野区中野4-10-2
主要用途：事務所・店舗
発注者：中野駅前開発特定目的会社
設計：ランドスケープ；ランドスケープデザイン、エキープ・エスパス、建築：KAJIMA DESIGN
敷地面積：24,773.54m²
工期：2010.6-2012.5

ながいし・たかゆき——ランドスケープアーキテクト・樹木医・ランドスケープデザインプロジェクトリーダー／1976年生まれ。1999年、九州芸術工科大学環境設計学科卒業。2002年、同大学大学院修士課程修了。景観設計研究所を経て、2008年よりランドスケープデザイナー。主なランドスケープ作品：センチュリーフォレスト[2011]、高坂カントリークラブ[2013]、ホテルモンテレ沖繩[2013]など。



左上一公園と一体化したボーダレスなオープンスペース | 左下一公園へ続く歩道とウッドデッキ | 右一既存樹の懐に抱かれたウッドデッキ [写真3点とも：解良信介/URBAN ARTS]



表紙写真：
霞が関ビルディング
[撮影：フォワードストローク]

次号[LIXIL eye]no.10は、
2016年2月発行予定です。

[LIXIL eye]はバックナンバーを
インターネットでご覧いただけます。
http://archiscape.lixil.co.jp/lixil_eye

02 [風景をデザインする 国内編]
敷地境界を越えたボーダレスな風景づくり —— 永石貴之

04 **特集1 | 新・生き続ける建築 —9**
アントニン・レーモンド

04 [本論] アントニン・レーモンドの建築作品の示すもの —— 三沢 浩

08 [作品] 東京女子大学
イタリア大使館日光別邸(現・イタリア大使館別荘記念公園)
群馬音楽センター

14 [年譜] 略歴 | 主な作品

15 **特集2 | 建築ソリューション | 保存・再生・継承へ | — 9**
霞が関ビルディング

22 [序論] 名建築に新たな荣誉をもたらすリニューアル —— 松葉一清

24 [鼎談] 新時代に挑戦した先駆者
都市広場“霞テラス”を再生し、
次代につないだ日本初の超高層・霞が関ビルディング。
—— 池田武邦 | 上口泰位 | 古谷誠章

37 [鼎談後記] 建築が都市につながる組織の一部となり、人々の生活空間を都市の上空に生み出した —— 古谷誠章

38 [ARTIST at HOME] — 9
ガラス・アーティスト、マッシモ・ノルディオさんの巻 —— 中村好文

42 **特集3 | まちづくりの今を見る — 9**
道空間を活用したまちづくり

44 [論考1] 道空間の有効活用とまちの活性化 —— 戦後の公物管理法からの大転換 —— 中野恒明

46 [論考2] ニューヨーク市における公共空間再編の取り組み
—— 都市戦略としての先進的な賑わい空間づくり —— 中島直人

48 [事例1] オープンカフェと路上マルシェが連携して賑わいをつくる
—— 池袋・グリーン大通りの2ヵ月限定の社会実験

50 [事例2] まちをカフェにする「高崎まちなかオープンカフェ」
—— コミュニティサイクルと連動して賑わいと回遊性を高める

52 [事例3] 東京のシンボルストリートを目指す —— 新虎通りのエリアマネジメントが始動

54 [事例4] 3つの通りを活かし、国際的空間を創出する —— 国家戦略道路占用事業に取り組む大丸有の道空間

58 [素材を語る]
制約のある材料の可能性を最大限に引き出す —— 坂 茂

60 [TOPICS]
歴史に学び、未来へのあゆみに活かす「LIXIL資料館」の取り組み —— 後藤泰男

64 [INFORMATION]
「LIXILビジネス情報サイト」のご案内
LIXILからのご案内 | ギャラリー+イベント | LIXIL出版 新刊案内

68 [新・建築家の往復書簡] — 9
「人のいる建築風景」は公共建築にとって大きな課題のひとつですが… —— 長谷川逸子 | 西沢立衛

LIXIL eye no.9
2015年10月20日発行

発行：株式会社 LIXIL
編集発行人：久保雅義
LIXIL ジャパンカンパニー
セールス&マーケティング部
〒100-6007
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング7階
Tel: 03-6273-3635
Fax: 03-6273-3743
制作：株式会社森戸アソシエイツ
協力：フォンテルノ(02.42-57頁)
デザイン：松田洋一
印刷：竹田印刷株式会社

*本誌記事の無断転載を禁じます
*本文中の敬称は省略させていただきます

アントニン・レーモンド

Antonin Raymond

1919年12月31日、アントニン・レーモンドは帝国ホテルの設計助手として、フランク・ロイド・ライトに伴われて横浜港に降り立った。「横浜から東京までの道すがら見た、封建時代の名残りをとどめた狭い村の情景を忘れることができない。楽しそうな季節の遊びにふけり、車はほとんど進めないほどだった。15マイルに2時間半を要した旅行の間に、私は日本の建築の最初の研究を始めた」と、後にレーモンドは日本との最初の出会いを語っている。
ライトのもとを離れ、1921年、設計事務所を設立。日本の魅力に取りつかれたレーモンドは、木造建築に当時流行し始めた“国際・近代建築”の可能性を示し、日本の建築界に多くの影響を与えた。彼のもとには若き建築家が集まり、吉村順三や前川國男もここで学んだ。第二次世界大戦によってアメリカに帰国するが、戦後、再び来日。精力的に活動し、日本の建築界の発展に尽力した。
レーモンドが日本に残したものは何だったのか。今号は、その足跡を辿る。



【所蔵：レーモンド設計事務所】

アントニン・レーモンドの建築作品の示すもの

三沢 浩
Hiroshi Misawa

来日して発見した日本の民家の近代性

大正8年[1919]の大晦日の夕刻、フランク・ロイド・ライトに同行し、アントニン・レーモンドは東京の帝国ホテルの設計助手として来日した。横浜から東京に至る昔の狭い京浜国道には翌日に新年を迎える商店や民家が軒を連ね、松竹梅を飾り店先を開けて、祝いの宴を競っていた。レーモンドはそれに目をみはり、日本のまちなみと開放感とそれらの建築に存在する一定の規格に気付いていたのではないかと思われる。

1年余をライトのために働き、自立して東京で事務所を開き、設計の仕事をした。後に『アントニン・レーモンド作品集 1920-1935』[1]の冒頭で、日本にいる外人建築家の特権は、開発途上の日本で建築文明が具体化するのを眼前に見られることだと言っている。これを裏返すと、日本にいて近代的な建築をつくれれば日本建築界のトップを走れると考えたようだ。そして日本の伝統的な建築や民家には、当時のヨーロッパが模索していた“国際・近代建築”と同じ原理が存在した。単純な構造、同一材の仕様、規格に基づく構法などである。

レーモンドはチェコに生まれ、大学卒業後にアメリカに密入国し、以前、建築家のカス・ギルバートとパリで面識があったことから、彼のニューヨーク事務所で働いた。機を得て画家を目指しイ

タリアへ渡ったが、サラエボ事件でアメリカに戻る。同じ船に乗ったノエミ・ペルネッサンとその年に結婚し、彼女の友人がライトの愛人のミリアム・ノエルと親しかったことからタリアセンで働き、プレイリー・スタイル[2]を修得した。1年後、徴兵されるが、試験に通りスイスで情報将校に昇格。終戦後、アメリカに戻ると、ニューヨークのアパートにライトが現われ、東京行きに誘われる。

タリアセンでは、住まいと周辺の建物群の俯瞰図や「アメリカン・システム・ビルド」というプレファブ住宅の宣伝用透視図を数多く描き、高く評価された。帝国ホテルでも全体の俯瞰図を描いていることから、ライトがレーモンドを誘ったのは透視図の手腕を求めたからであると考えられる。当時32歳のレーモンドに才能があったのは当然だが、運の良さもあったろう。さらに続く彼の強運から、第二次世界大戦前の18年間、戦時中の10年を挟んで再来日してから24年間、日本だけでも300余を建てた。こうして日本の建築家のひとりに数えられるばかりか、世界的にもユニークな存在とされるようになる。

帝国ホテルに始まる戦前の建築

帝国ホテルの現場で1年間働いたアントニン・レーモンドは、フランク・ロイド・ライトのマンネリズムに次第に飽きがかかる。折しも親しくなった、ヴォーリス建築事務所のアメリカ人、レオン・スラックの提案で彼の友人の資金提供を受け、“米国建築合資会社”を共同で設立した。出資者がレーモンドを東京倶楽部や東京ローンテニスクラブの会員に推し、その付き合いから名士たちの住宅、建築が次々に生まれた。

当初の作品には、今も品川区に建つ星商業学校(現・星薬科大学本館)[1924]があり、当時東京市長の後藤新平邸増築[1923]、そしてライトの影響が残る幾つかの住宅があった。

同じ頃、東洋の3か所にキリスト教女子大学の建設を考えていたのがアメリカのロックフェラー財団である。その依頼を受けたカール・ライシャワー博士がレーモンドに持ち込んだのが東京女子大学であり、敷地選定に始まる全体計画であった。当初建設された東寮[1924、解体：2007]、西寮[1924、解体：1984]、体育館[1924、解体：2009]、西校舎(現・7号館)[1924]、自然科学棟(現・6号館)[1927]、職員住宅2戸(外国人教師住宅(現・外国人教師館(16号館)))[1924]、学長住宅(現・安井記念館(14号館)))[1925]はライトの影響を示しているが、関東大震災に耐えて建ち続けた。続いて理事住宅(現・ライシャワー館(17号館)) [1927]と図書館棟(現・本館)[1931]、そしてオーギュスト・ベレの影響が見られるチャペル・講堂[1938]が建設され、レーモンドの第二次世界大戦前の代表作となった。

関東大震災に耐えた帝国ホテルの建設に携わったことと、前記した建築の耐震的効果を示したことがレーモンドの名を高めた。その上、1926年にチェコスロバキア共和国名誉領事になったことも仕事の拡大につながった。イタリア大使館日光別邸(現・イタリア大使館別荘記念公園)[1928]、チェコスロバキア大使館計画[1929]に続き、ベルギー大使館[1929]、フランス大使館増改築、ソビエト大使館[いずれも1930]、アメリカ大使館及び官邸(現・アメリカ大使公邸)[1931]、カナダ大使館[1933]を設計した。この多くが本国からの要請で様式建築を踏襲したが、イタリア大使館日光別邸だけは別格で、日光の中禅寺湖畔に建つということもあり、レーモンドは意図して地元産の材料でデザインし、ユニークな存在として現存する。

様式建築として特記できるのは、アメリカ企業のスタンダード石油、ライジングサン石油各社の本社(紐育スタンダード石油会社ビル[1928]、紐育ライジングサン石油会社ビル[1929])と、加えて2社の近代建築的な社宅であるが、現在はライジングサン石油会社社宅フラット(現・フェリス女学院山手10号館)[1929]の1つだけ残っている。また東京、大阪、兵庫、岡山に、ミッション・スクールの教室群と礼拝堂が今も残っている。

1930年代の鉄筋コンクリート造の4住宅(赤星喜介邸[1932]、川崎守之助邸、赤星鉄馬邸(現・ナミュールノートルダム修道女会東京修道院)[いずれも1934]、福井菊三郎邸[1936])は、いずれも“国際・近代建築”と呼ぶにふさわしい建築として評価された。ピロティ、横長の窓、屋上庭園を付け、開口部の材料や細部に工夫があった。

木造住宅では、当初、日本独自の直線構成である軸組構法の再現を考えた。しかし耐震性がな



プレファブ住宅「アメリカン・システム・ビルド」の宣伝用透視図

レーモンドがタリアセンで描いた透視図で、この作業を通して、ライトの初期の建築スタイルであるプレイリー・スタイルを体得した[出典：「自伝アントニン・レーモンド」アントニン・レーモンド著、三沢浩訳[鹿島出版会/1970]]



帝国ホテル全景俯瞰図
基本設計の際にレーモンドが描いたもの。ライトの片腕として透視図の他、詳細図なども描いた[出典：「自伝アントニン・レーモンド」]



星商業学校(現・星薬科大学本館)[1924]
レーモンドが設計した東京における最初のRC造。ファサードはライト調、窓面にはチェコ・キュビズムの表現を取り入れ、講堂上部にドームを持つ。左右対称の平面、入り口の庇の大谷石など、ライトの影響が色濃く残っている[出典：「自伝アントニン・レーモンド」]



アメリカ大使館及び官邸(現・アメリカ大使公邸)[1931]
敷地が霊南坂の自邸の目の前だったこともあり、自ら設計者に申し出たという。かつてニューヨークで事務所の一部を借りていたヴァン・ビューレン・マゴニクルに協力を求め、共同で設計した。現在、大使館は建て替えられ、官邸のみ現存。アメリカ国務省の重要文化財に登録されている[出典：「自伝アントニン・レーモンド」]

[1] 『アントニン・レーモンド作品集 1920-1935』アントニン・レーモンド著[城南書院/1935]

[2] プレイリー・スタイル
19世紀後半から20世紀初頭にかけて、F.L.ライトが提唱した建築スタイル。周囲の環境と調和し、溶け込んでいるような建築をプレイリー・スタイルと呼んだ。深い軒、緩勾配の屋根、煉瓦の外壁と直線窓など、水平性を強調した住宅デザインが特長

*特記のない写真は、フォワードストローク



ライジングサン石油会社社宅フラット(現・フェリス女学院山手10号館) [1929]

RC造2階建て、内部は4戸の住居に分かれている。白い箱型の外観、フラットルーフなど、モダニズムのデザインがうかがえる。1977年、フェリス女学院の所有となり、研究棟として使用。2009年、外装修復工事が行われ、復元された【横浜市認定歴史的建造物】【提供：学校法人フェリス女学院】



夏の家(現・ペイネ美術館) [1933]

軽井沢に建てられたレーモンドの別荘兼スタジオ。主室は、ル・コルビュジエのエラスリス邸計画案に着想を得ている。日本の高度な技術と材料によって木造を可能とし、クリの柱とスギの梁を組み合わせた丸太の現しとするなど、天然の素材を使うことで経済的で簡素な表現とした。現在は移築され、ペイネ美術館として一般公開されている【出典：「自伝アントニン・レーモンド」】



聖ポール教会(現・軽井沢聖パウロカトリック教会) [1935]

外観はスロバキア地方の教会の伝統を取り入れ、屋根は柿葺き、正面は縦板張り、躯体の一部は火山岩によるラバコンクリート打放し。内部の鉄状トラスの丸太材は、クリ材の手斧仕上げ。レーモンドが現場で指導しながら作業を進めたという【出典：「アントニン・レーモンドの建築」(SD選書246)三沢浩著【鹿島出版会／2007】】



リーダーズ・ダイジェスト東京支社 [1951]

戦後、初めての大型プロジェクトで、皇居北側の平川門正面に建てられた。東西長さ約60m、高さ8mのRC造2階建て。プラスチックタイルや蛍光灯などが初めて輸入された。また、トイレや物置き、ダクトなどを納める機能上のコア・スタイルを持った平面計画は日本初で、建築界に大きな影響を与えた。やがて名建築と称されたが、1966年、パレスサイドビルに建て替わった【出典：「アントニン・レーモンドの建築」】

いことから、変形^{たるき}檜木構造、合板壁による補強、8寸角の通し柱など工夫を重ねた。やがてル・コルビュジエの発表した、石造で木造屋根のエラスリス邸計画案に示されたドミノ構法にヒントを得て、夏の家(現・ペイネ美術館) [1933]を木造で実現させ発表した。

ボルト締め^{はきみじょう}の木造架構は、鉄状トラスとして軽井沢の聖ポール教会(現・軽井沢聖パウロカトリック教会) [1935]に応用したばかりか、第二次世界大戦後の、東京にある聖アルバン教会 [1956]、札幌の聖ミカエル教会(現・札幌聖ミカエル教会) [1961]にも及んだ。特に鉄状トラスは、麻布のレーモンド自邸及び事務所 [1951]の足場丸太の利用につながり、“レーモンド・スタイル” [3]と呼ばれ、戦後木造住宅の基本にもなった。

戦後日本における新しい構造の展開

日支事変が1937年7月に勃発すると、日米関係の悪化を心配した日本のある友人は、アントニン・レーモンドに離日を勧めた。一家は自邸、別邸、事務所をそのままにして同年12月に離日。インドの聖者、オーロピンド・ゴージュの僧院宿舎の現場に向かった。8ヵ月後、日本に戻ることを諦め、チェコ訪問を含むヨーロッパ旅行を経て、1938年10月、アメリカに戻った。

一家はペンシルベニア州ニューホープに広大な農場と、そこに残されていたクエーカー教徒による家屋や納屋などを求め、募集した若い建築家と共に晴耕雨読と設計の生活を始めた。

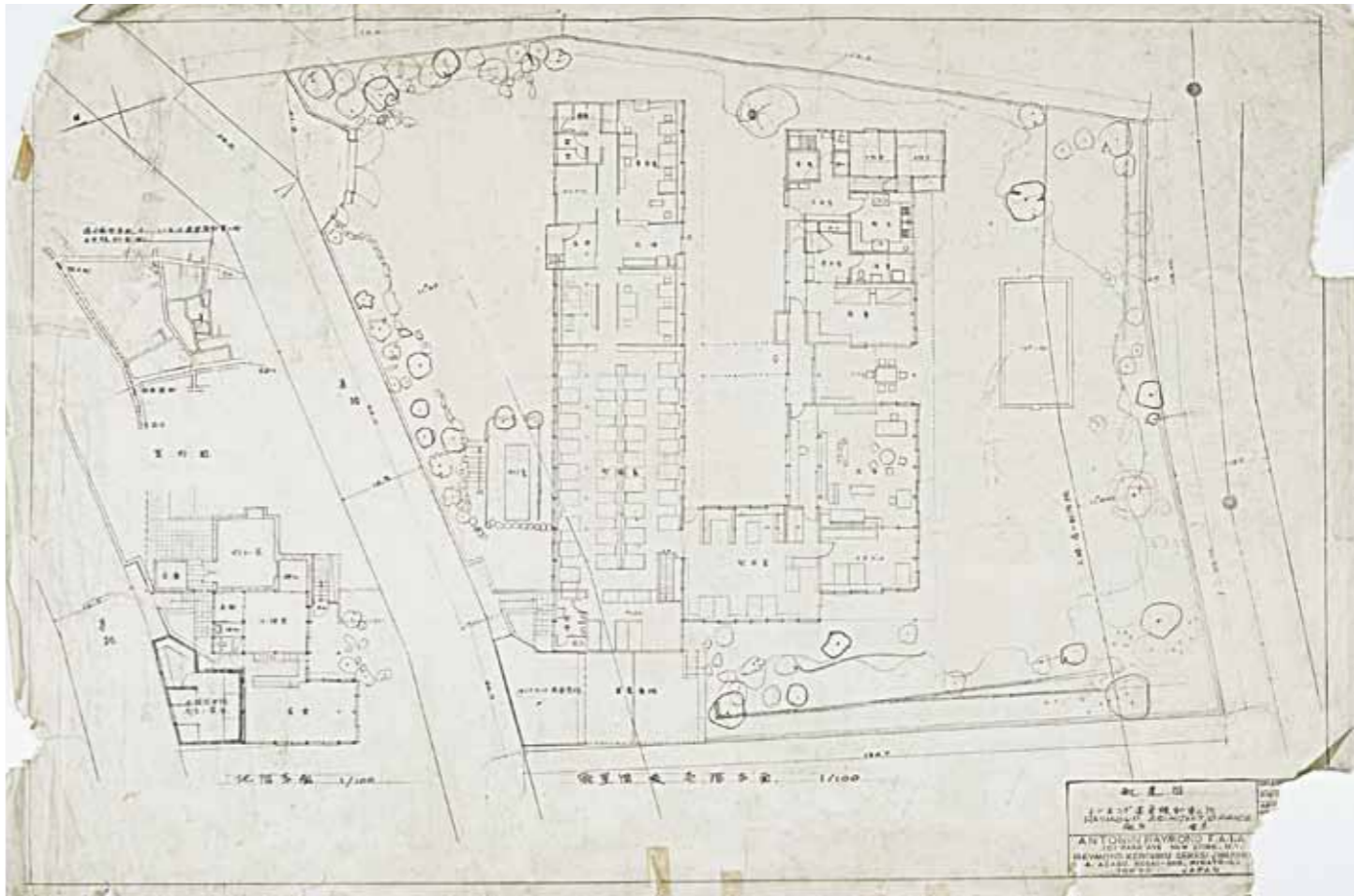
そして10年後、戦争を経て敗戦国日本との日米間郵便が再開されると、離日を勧めた友人からダム調査の打診があった。レーモンドは連合国軍最高司令官のダグラス・マッカーサーに手紙を書き、許可されて1948年に再来日した。調査依頼を受けて翌年11月、専門技師と共に、福島と新潟の県境にある奥只見渓谷の視察を実施し、後年の発電用ダムの建設につながった。東京では旧社員たちと共に事務所を再建し、1950年4月、株式会社を発足させた。

第二次世界大戦後、初の大仕事はリーダーズ・ダイジェスト東京支社 [1951]である。この斬新な長さ約60mの鉄筋コンクリート造2階建ては、その軽快さ故に批判され、“リーダイ論争”を引き起こした。「揺すってみたい」 [4]、カラフルなところから「露悪的だ」 [5]というのである。現在のパレスサイドビルの位置に建ち、皇居の景観を取り入れるために柱を細くしたことは伝わらなかった。昭和26年度日本建築学会賞(作品)を得たが、12年後に解体された。

アメリカ大使館アパートのペリーハウス [1952]とハリスハウス [1953]は、治外法権の敷地であるため、日本の法規では許可されない柱なしの壁構造で、日本人建築家の羨望と妬みを買った。そのあとがJR山手線目黒駅近くに現在も残る聖アンセルム教会(現・カトリック目黒教会) [1955]で、柱・梁が三角形の本格的な折板構造として、幅と高さが約14m、奥行き30mの祈りの大空間となった。日本国内の反応は少なかったが、アメリカ建築家協会から賞が贈られた。折板とは、屏風状にした鉄筋コンクリート造の版を柱・梁の代わりにした構造である。

聖アンセルム教会を超える折板案が群馬音楽センター第1案の36辺の折板円形アリーナになり、続いて第2案もつくられた。しかし、それら第1、2案は見送られ、第3案が現存の群馬音楽センター [1961]になった。五辺形の巨大な11組の折板が正面間口約60m、最後部で20m幅に変化し、地上から立ち上がって扇形ホールを覆う、約2,000人収容の音楽堂である。この設計には3つの大きな特徴があった。第1は、バルコニー席なしで観客席と舞台とを一体化したこと。第2に、建設費の多くが市民の寄付によることに感激したレーモンドが、それに応えるために打放しの経済的な建築で、しかも長持ちするように考えたこと。第3には、城址の景観を損なわないように、全体を低くしたことである。最高の傑作だと言えるのは、第二次世界大戦後の日本や外国に出現した幾つかの折板構造の中でも、特に建築家の執念の集中が見られるからである。

また次に出てくる貝殻のように見えるシェル構造は、鉄筋コンクリート造の薄い版による半円や曲線の連続する特殊な構造である。その特殊構造で設計した、鉄筋コンクリート造の教会はいずれも現存する。例えば、折板が鞍型シェル^{はな}の連続に変わる立教高校聖ポール教会(現・立教学院聖パウロ礼拝堂) [1963]、あるいは5つの立体半円シェルが覆う神言神学院及び教会 [1966]へと表現が変化していく。



組織の一貫体制こそ個性ある建築の基本

アントニン・レーモンドが第二次世界大戦前から戦後にかけてこだわっていたのは、個性ある建築表現であり、構造や空間の変化についてであった。ひとつとして同じ型のもを設計しなかったばかりか、宗派の同じ教会であっても表現が異なり、はっきりした建築デザインの進歩を示そうとしていた。その達成のために常に努力していたが、事務所の組織力によることも大きかった。第二次世界大戦前からドラフトマンだけではなく、構造、設備、積算、設計監理の技術者を同一事務所内に置き、一貫した設計と監理の作業を進め、レーモンド自身がまとめてきた。彼は基本図から実施図を見るだけでなく、施工図、現寸図にまで目を通すのが常であった。加えてノエミ夫人が所員として加わり、インテリア、内装、家具、特に什器までもデザインしたことが大きかった。

このような所内における一貫作業は、組織事務所や建設会社を除くと、多くの建築家が下請けに頼っている日本では珍しい存在であった。この徹底した慣習があったからこそデザイン^{デザイン}の方向が維持され、レーモンドがそれを掌握し、表現と新しい方向への道筋がつくられていったのである。

この稿の冒頭近くで述べたレーモンドの強運とは、おそらく彼自身が機会をつくり、また次々にデザインの転換を図った結果ではないかとも思える。建築作品として至上のものにするために組織づくりを図り、第二次世界大戦前に働いた吉村順三、前川國男、ジョージ・ナカシマ、また戦後の増沢尙らの近代建築家を育て、後に師弟関係を例えた“レーモンド・スクール”が存在したことも、ひとりの建築家の並々ならぬ努力から生まれたことが分かってくるのである。

みさわ・ひろし——建築家／1955年、東京藝術大学建築科卒業。同年、レーモンド建築設計事務所勤務。1963年、カリフォルニア大学バークレー校講師。1966年、三沢浩研究室主宰。1991年、三沢建築研究所代表。横浜国立大学・東京理科大学講師を経て、現在、明日館公開講座・朝日カルチャーセンター講師など。
主な作品：平塚聖マリア教会 [1967]、吉祥寺レンガ館モール [1979]、深大寺仲見世及び水車館 [1992]、松代大本堂平和祈念館(基本設計) [1996]、葛飾柴又寅さん記念館 [1997]、東京大空襲・戦災資料センター [2002]など。
主な著書：「私と日本建築」(SD選書17)アントニン・レーモンド著、三沢浩訳【鹿島出版会／1967】、「自伝アントニン・レーモンド」アントニン・レーモンド著、三沢浩訳【鹿島出版会／1970】、「A・レーモンドの住宅物語」(建築ライブラリー7)【建築資料研究社／1999】、「アントニン・レーモンドの建築」(SD選書246)【鹿島出版会／2007】など。

麻布のレーモンド自邸及び事務所 配置・平面図

北側に事務所、南側に自邸、その間に中庭を配している。外装はスギ板縦張り、鉄板屋根、深い軒で統一され、内装は土間コンクリートに床仕上げ材、ラワン合板の無地に真鍮釘打ちの壁、屋根下地を支える木構造の一切を丸太の現しとした【所蔵：レーモンド設計事務所】

[3] レーモンド・スタイル
戦後、資材が不足していた時代に、安価な足場用の丸太を構造材として使用し、木造住宅に取り入れた。柱や登り梁を2つ割りの丸太で挟み込み、ボルトで締める鉄状トラスや、柱から敷居をずらした芯外しなどの特長がある。簡素ながらも直裁的な構成美を表現した
[4] 竹山謙三郎「揺って見たい建物」【建築雑誌】1951.11.p3
[5] 森田茂介「一つの批評試案」【建築雑誌】1951.11.p9

東京女子大学

竣工年：外国人教師住宅(現・外国人教師館(16号館))：1924年 | 学長住宅(現・安井記念館(14号館))：1925年 | 理事住宅(現・ライシャワー館(17号館))：1927年 | 図書館棟(現・本館)：1931年 | チャペル・講堂：1938年
 所在地：東京都杉並区善福寺2-6-1
 構造・規模：外国人教師住宅；鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造、2階建 | 学長住宅；鉄筋コンクリート造2階建 | 理事住宅；鉄筋コンクリート造、一部木造、2階建 | 図書館棟；鉄筋コンクリート造地下1階、4階建 | チャペル・講堂；鉄筋コンクリート造2階建、塔屋
 【国登録有形文化財】



1 チャペル外観

オーギュスト・ペレのランシーの教会とモンマニーの教会を参考にした礼拝堂で、塔と内装を前者から、屋根と柱は後者から引用。ペレの建築哲学を尊重していたレーモンドはRC造の新しい方向性を取り入れ、自らのものにしたかったと考えられる

2 ハイオルガン方向を見る

チャペルと講堂を背中合わせに配置。ハイオルガンの背後の巨大な引込み扉を開けると、1,000人を収容する講堂の最上部客席に出る

3 正門から見る

正面に本館、左右に校舎を配置し、正門を入ってすぐ右手にチャペル・講堂がある。レーモンドの高弟・杉山雅則が担当した。本館の方形屋根は瓦葺き、頂には棟飾り。隅落としによって、大屋根を軽く見せる効果を高めている

4 本館1階ホール

照明やステンドグラスはノエミ夫人によるもので、武蔵野を象徴するマツカサとススキをモチーフにデザインされている。1996年まで図書館だったが、現在は教室などとして使用。東京女子大学を象徴する建物となっている

5 外国人教師館

派遣された外国人教師たちがここで生活していた。今でも2階は短期滞在者のゲストハウスとして使用されている。1階は、女性学研究所

6 安井記念館

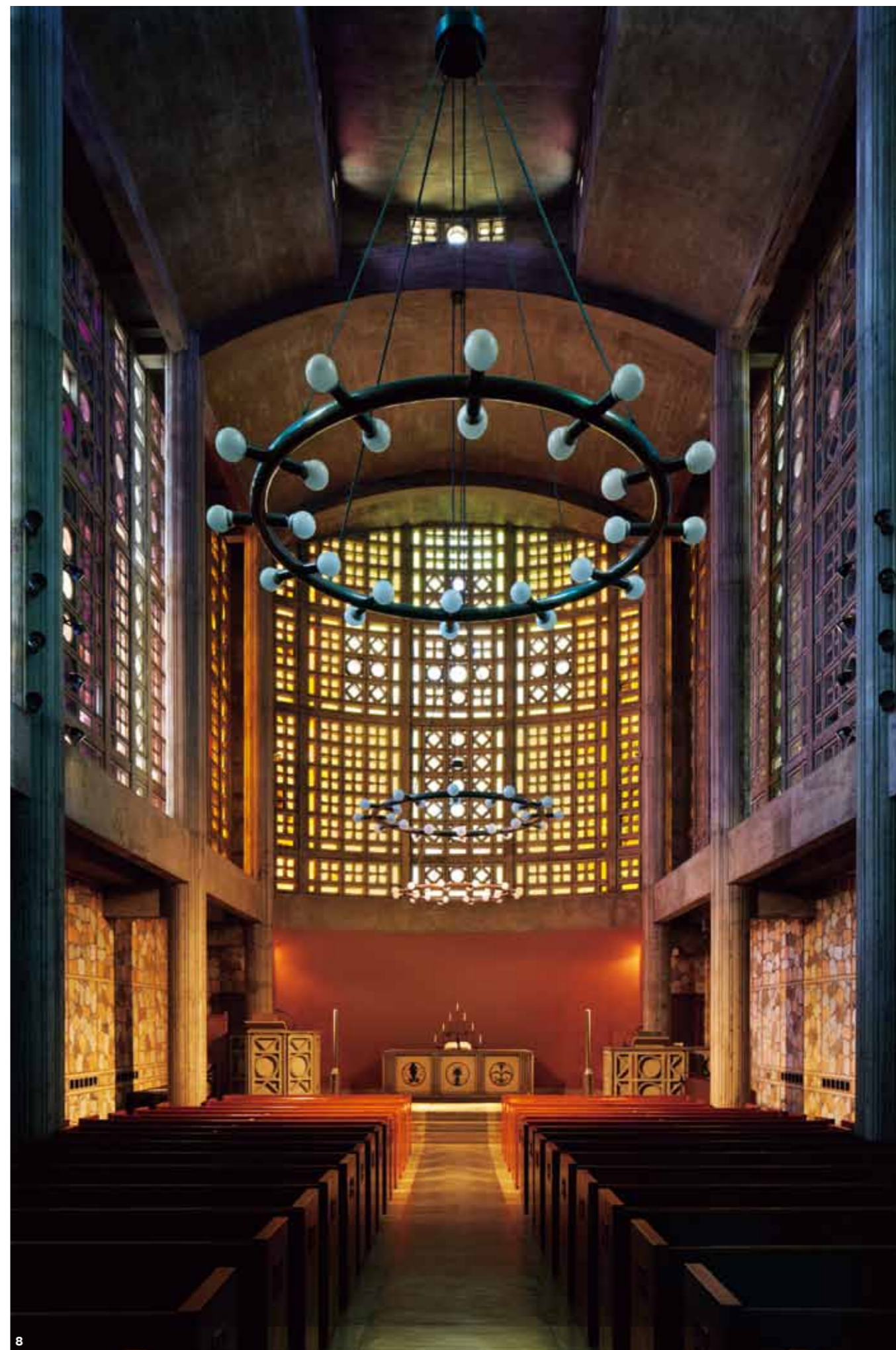
第2代学長・安井てつ子の住居として建てられた。現在は、キリスト教センターとして使用されている

7 ライシャワー館

創立当時、常務理事を務めたA.K.ライシャワー博士のために建てられた住宅。1927年から41年まで過ごした。現在、外国人留学生と日本人学生との交流の場として活用されている

8 聖壇方向を見る

プレキャスト・コンクリート・ブロックに色ガラスをはめ込んでいる。色ガラスは42色で、聖壇上部は十字架を象っている



イタリア大使館日光別邸 (現・イタリア大使館 別荘記念公園)

竣工年：1928年
所在地：栃木県日光市中宮祠2482
構造・規模：木造2階建



1 南面全景

中禅寺湖の東岸、男体山から白根山まで見渡せる湖岸に建つ。1997年まで、イタリア大使館の別荘として歴代の大使に使われていた。栃木県が土地と共に購入、復元・改修し、2000年から、イタリア大使館別荘記念公園として一般公開した

2 西面外観

担当に内山隈三を起用。図面に「注意、各部構造及造作共材料ハ指定セズ山材ヲ配スルコト妙味アリ」と記されている。英文もあり、「当仕事に適切な地方材料の申入れ可。請負人は許可見本提出のこと」と訳せる。外壁は、日光のスギ皮が市松に張られ、半割竹で留められた。レーモンドは、東京に幾つも大使館を設計し、各建物は本国の要請に従っていたが、この建物は別荘建築であることから、積極的に地方の特色を取り入れている

3 広縁

レーモンドは南面開放に徹してきたが、ここでは湖の景観を取り入れるため西向きとした。湖岸に向けて張り出した広縁は奥行き9尺、引違い戸の内法は7尺。建設当初の歪みのあるガラスも残されている

4 居間

内部の壁もスギ皮が張られ、天井もスギ皮の網代、暖炉は湖岸のゴロタ石積みで、全体がいわゆる“旅籠屋(はたごや)風”となっている。西面の長さは1、2階共に12間(約22m)ある



群馬音楽センター

竣工年：1961年
所在地：群馬県高崎市高松町28-2
構造・規模：鉄筋コンクリート造地下1階、2階建



- 1 ホール**
群馬交響楽団のために設計されたホールで、歌伎などの伝統芸能も上演可能。建設費の3分の1は、市民などの寄付によるものだった。約2,000人収容、プロセニウムは幅約28m、高さ9m
- 2 1階ロビーと2階ホワイエ**
ロビーとホワイエの壁面のフレスコ画はレーモンドのデザイン。そこに照明が入ると、前面ガラスを通して人々を招き入れる顔になる。竣工当時、北側には広場と道路を隔てて谷口吉郎設計の高崎市庁舎があり、そこから見ると市庁舎の床の間の絵のようだったという。景観に配慮したばかりか、庁舎の設計者にも敬意を払った、建築家としてのレーモンドの姿勢がうかがえる
- 3 東面外観**
11組の大から小への折板が壁となり、屋根の高さに至っている。その壁面は斜めに登り三つ折れの折板屋根構造をつくっている。1990年、建物の老朽化のため、レーモンド設計事務所によって補修され、厚さ120mmの折板屋根も部分補修し、防水処理が施された
- 4 北面外観**
折り紙のような折板構造とし、建物を覆う構造体を内外に現わす方法に徹底している。また、多くを市民の寄付によって建設されているため、無駄なく簡素であり、大らかで力強い空間であること、市民のためのホールにふさわしく舞台と客席が一体であること、城址公園に建つため、高さを極力抑えることを基本に設計された



略歴 Biography

明治21年[1888] 5月10日、オーストリア領ボヘミア地方(現・チェコ)クラドノに生まれる

明治42年[1909] プラハ工科大学卒業。パリへ旅行中、アメリカ人建築家のカス・ギルバートに会う

明治43年[1910] 夏、ニューヨークに渡り、カス・ギルバート事務所勤務

大正3年[1914] 画家を目指し、イタリアに行く。6月、アメリカ市民権取得。帰路船上でノエミ・ベルネッサンと知り合い、ニューヨークで結婚

大正5年[1916] F.L.ライトに師事、タリアセンで働く

大正6年[1917] 軍隊に入る

大正8年[1919] 12月31日、ライトと共に来日

大正9年[1920] 帝国ホテルの仕事に従事

大正10年[1921] 独立し、レオン・スラックと米国建築合資会社設立。丸の内21号館に事務所を持つ

大正12年[1923] レーモンド建築事務所を名乗る

大正15年[1926] チェコスロバキア共和国名誉領事となる(昭和12年)。丸の内八重洲ビルに事務所移転

昭和2年[1927] 東京海上ビルに事務所移転

昭和3年[1928] 吉村順三がアルバイトで働き始める

昭和5年[1930] 8月、前川國男が入所(昭和10年)

昭和6年[1931] 吉村順三が正式に入所(昭和16年)

昭和9年[1934] 銀座・教文館ビルに事務所移転

昭和10年[1935] 6月、『アントニン・レーモンド作品集

1920-1935』(城南書院)出版

昭和12年[1937] 12月、上海からボンディシエリへ

昭和13年[1938] 5月、『Antonin Raymond Architectural Details 1938 (アントニン・レーモンド建築詳細図集)』を自費出版。10月、ニューヨークに戻る

昭和14年[1939] ペンシルバニア州ニューホープに農場建設

昭和15年[1940] Tuttle, Seelye, Place & Raymond Architects Engineersを組織

昭和16年[1941] 東京事務所閉鎖

昭和20年[1945] Antonin Raymond & L. L. Rado Architectsを組織

昭和23年[1948] 10月、戦後、再来日。レーモンド建築設計事務所再建

昭和25年[1950] 4月、株式会社レーモンド建築設計事務所設立

昭和26年[1951] 麻布に自邸及び事務所を建設

昭和27年[1952] リーダーズ・ダイジェスト東京支社が日本建築学会賞(作品)受賞

昭和32年[1957] AIAより八幡製鉄健康保険組合記念体育館がアワード・オブ・メリットを受ける

昭和36年[1961] 10月、AIA大会(ホルル)で講演

昭和39年[1964] 勲三等旭日中綬章受章

昭和40年[1965] 南山大学が日本建築学会賞(作品)受賞

昭和41年[1966] 日本建築家協会終身会員となる

昭和45年[1970] 10月、銀座松坂屋で「アントニン・レーモンド展」。『自伝アントニン・レーモンド』(鹿島出版会)出版

昭和48年[1973] 6月13日、離日。ニューホープに戻る

昭和49年[1974] 7月、銀座・吉井画廊で「Hommage à Antonin Raymond」展

昭和51年[1976] 10月25日、逝去(88歳)。11月10日、聖アンセルム教会で追悼ミサ



レーモンド夫妻
ノエミ夫人は優れたデザイナーで、すべてのレーモンド作品の家具・内装を手掛け、生涯、二人三脚で歩んだ[写真：筆者]

主な作品 Works

●印は現存 ※日本における作品のみ

大正11年[1922] 東京ローンテニスクラブ(東京)

大正12年[1923] 後藤新平邸増築(東京)

大正13年[1924] ●星商業学校(現・星葉科大学本館)(東京)
●東京女子大学西校舎(現・7号館)・外国人教師住宅(現・外国人教師館(16号館))(東京)【国登録有形文化財】
雲南坂の自邸(東京)

大正14年[1925] ●東京女子大学学長住宅(現・安井記念館(14号館))(東京)【国登録有形文化財】
●東京聖心学院修道院及び教室(現・聖心女子学院聖堂・初等科校舎)(東京)

大正15年[1926] ●エーリスマン邸(神奈川)→平成2年移築保存(神奈川)【横浜市認定歴史的建造物】

昭和2年[1927] ●東京女子大学自然科学棟(現・6号館)・理事住宅(現・ライシャワー館(17号館))(東京)【国登録有形文化財】
●小林聖心女子学院(兵庫)【国登録有形文化財】

昭和3年[1928] 紐育スタンダード石油会社ビル(神奈川)
●イタリア大使館日光別邸(現・イタリア大使館別荘記念公園)(栃木)

昭和4年[1929] 紐育ライジングサン石油会社ビル(神奈川)
●ライジングサン石油会社社宅フラット(現・フェリス女学院山手10号館)(神奈川)【横浜市認定歴史的建造物】
ベルギー大使館(東京)
●岡山清心高等女学校(現・ノートルダム清心女子大学)(岡山)【国登録有形文化財】

昭和5年[1930] フランス大使館増改築(東京)
ソビエト大使館(東京)

昭和6年[1931] ●東京女子大学図書館棟(現・本館)(東京)【国登録有形文化財】

●アメリカ大使館及び官邸(現・アメリカ大使公邸)(東京)

●聖母女学院(現・大阪聖母女学院中学校・高等学校)(大阪)【国登録有形文化財】

●トレッドドン別邸(栃木)

昭和7年[1932] 東京ゴルフクラブ(埼玉・朝霞)
赤星喜介邸(東京)
カナダ大使館(東京)

昭和8年[1933] ●夏の家(長野)→ペイネ美術館として昭和61年移築保存(長野)
●教文館ビル(東京)

昭和9年[1934] 川崎守之助邸(東京)
●赤星鉄馬邸(現・ナムユールノートルダム修道女会東京修道院)(東京)

昭和10年[1935] ●聖ポール教会(現・軽井沢聖パウロカトリック教会)(長野)
福井篤三郎別邸(静岡)

昭和11年[1936] ●東京女子大学チャペル・講堂(東京)【国登録有形文化財】

昭和13年[1938] ●スタンダード石油社宅群(ソコニーハウス)(神奈川・本牧)
スタンダード石油社宅(ソコニーハウス)(神奈川・山手)
スタンダード石油社宅群(ソコニーハウス)(東京)

昭和26年[1951] リーダーズ・ダイジェスト東京支社(東京)
レーモンド自邸及び事務所(東京)
日本楽器ビル・山葉ホール(東京)

昭和27年[1952] アメリカ大使館アパート(ベリールハウス)(東京)

昭和28年[1953] アメリカ大使館アパート(ハリスハウス)(東京)
●キャンプ座間米軍総司令部(神奈川)

昭和29年[1954] ●安川電機本社ビル(福岡)

昭和30年[1955] ●聖アンセルム教会(現・カトリック目黒教会)(東京)
●聖アルバン教会(東京)
八幡製鉄健康保険組合記念体育館(福岡)
●聖パトリック教会(現・カトリック豊島教会)(東京)

昭和33年[1958] ●富士カントリークラブ(静岡)【国登録有形文化財】
イラン大使館及び事務棟(東京)
●群馬音楽センター(群馬)
●聖十教会(現・東京聖十教会)(東京)
●聖ミカエル教会(現・札幌聖ミカエル教会)(北海道)

昭和35年[1960] ●立教高校聖ポール教会(現・立教学院聖パウロ礼拝堂)(埼玉)

昭和36年[1961] ●東京ゴルフクラブ(埼玉・狭山)

昭和38年[1963] ●南山大学研究室棟(現・第1研究室棟)・教室中央棟(現・G棟)・教室南棟(現・H棟)・教室北棟(現・F棟)・教室600人棟(現・G30教室棟)・図書館・食堂・管理棟(愛知)

昭和39年[1964] ●新発田カソリック教会及び司祭館(現・カトリック新発田教会)(新潟)
●神言神学院及び教会(愛知)
●南山大学体育館(愛知)

昭和40年[1965]

昭和41年[1966]

昭和43年[1968]

※この写真は、『アントニン・レーモンドの建築』(SD選書246)【鹿島出版会/2007】をもとに、筆者と編集室が制作したものです。

取材協力：群馬音楽センター/東京女子大学/日光自然博物館/レーモンド設計事務所

霞が関 ビルディング

1968年4月、日本初の超高層・霞が関ビルディングは日本中の期待を担って勇姿を現した。それは技術革新への挑戦であり、高さへの挑戦でもあった。建築基準法における高さ制限の解除を始めもろもろの条件が整い、霞が関ビルディングの着工をみたのは1965年春。建築構造学者・武藤清の「柔構造理論」を要に、総合的なマネジメントは三井不動産・鹿島建設・山下寿郎設計事務所、実務は建設委員会を設置し、各分野のエキスパートが合議で推進した。そしてオーナーから現場作業員までが日本初の超高層ビルを建てることに自信と誇りを持ち、計画から約6年の歳月を経て完成した。

約40年を経た2006年、そこに再開発事業が加わった。1964年に霞が関地区で指定された特定街区を外し、隣接する文部省他を含む街区と共に地区計画を掛けた官民一体の事業だった。首都の歴史を継承する仕掛けをつくって、国際都市・東京にふさわしいデザイン“霞テラス”を提示し、高い評価を得た。2011年、日本建築学会賞(業績)も受賞した。

日本初の超高層ビルはストックとして次の世代に継承された。

竣工時の概要

所在地	東京都千代田区霞が関3-4
敷地面積	16,319.97m ²
建築面積	3,561.60m ²
延床面積	153,223.69m ²
構造	基礎および低層部分：鉄筋コンクリート造 地下1階より地上2階：鉄骨鉄筋コンクリート造 3階より上層部：純鉄骨造
規模	地下3階、地上36階
工期	1965.3-1968.4
設計	霞が関ビル建設委員会 三井不動産・山下寿郎設計事務所
施工	鹿島建設・三井建設

増改築時の概要

敷地面積	16,301.14m ²
建築面積	4,600m ²
工期	2006.9-2009.4
設計	基本設計・実施設計監修：日本設計 実施設計：鹿島建設 ランドスケープデザイン：Thomas Balsley Associates
施工	鹿島建設





15頁一層テラス俯瞰：写真下部には敷地に沿って外堀通りが通っているが、そこに架かる横断歩道橋を渡ると人工地盤上の広場、霞テラスに至る。広大なスペースには幾つかのアクセスの軸線が通り、それを強調するように照明ボール(ライトワンド)、幾何学的なパターンを持った花壇(ジオメトリックガーデン)、噴水、モニュメントなどを配し、ヒューマンスケールで気持ちの良い空間をつくっている | 16-17頁一層テラスを中心とした街区全体：霞が関ビルディングを挟んで左が東京倶楽部ビルディング、右が霞が関コモンゲート、中央合同庁舎7号館、中央右の低層棟は店舗・アネックス | 18頁上一層テラス：建設当初は日本一の高さを誇る建物だったが、約40年後の2006年、リニューアル工事を経た現在は、都市に開かれた広場として親しまれている [撮影：2009年] | 18頁下一層外堀外堀石垣遺構と外堀通りのプロムナード、史跡江戸城外堀に残されていた遺構を修復し、公開した [撮影：2009年] | 19頁一超高層ビルの印象を決定付けた西面全景：工業製品による窓の美しい繰り返しのリズムが、日本初の超高層ビルの印象となって人々の記憶に焼き付いている | 20頁上一外堀通りにある縁側空間：東京倶楽部ビルディングに接続している | 20頁下一けやき広場：ケヤキの大きさを保存し、再整備した。グランドライン上のけやき広場は霞が関ビルディング1階店舗につながっている | 21頁上一ロビーフロア：建設当初、建設委員会で検討され採用が見送られたアルキヤストは、1階ロビーのアンバー照明器具などに採用され、現在も使われている | 21頁下一商業エントランス棟：広場の新しい顔として設計された。周辺への視覚的な圧迫感を選り抜いてアーチ状の形態とし、ガラスを通して内部の賑わいがあるアトリウムになっている [撮影：2009年]



名建築に新たな榮譽をもたらすリニューアル

この数年、霞が関ビルディング界隈の文部科学省などを訪ねるとき、虎ノ門側から横断歩道橋を渡って、アプローチするのが習慣になった。地下鉄を虎ノ門駅で降りて地上にあがる。外堀通り沿いの歩道を進むと、商船三井ビルディング前の歩道橋に至る。そこからわざわざ階段を昇り、橋上を歩いていく。今や無用の長物であり、バリアフリーの敵のような歩道橋だが、ここだけは、どうしても歩道橋の階段があがってでも、その経路をとりたいのである。

霞が関ビルディングの2階レベルに広がる屋外広場「霞テラス」(設計:日本設計・鹿島建設、完成:2009年)が魅力的で、ゆっくりと歩を進め、足を踏み入れたいからだ。外堀通りを空中で渡ると、左手の地上階レベルには、テラスとともに改修された「けやき広場」が視界に入る。繁茂した樹木の緑が目を楽しませ、正面には保全の行き届いた霞が関ビルディングの外壁が迫ってくる。「霞テラス」の足元は人工地盤という呼称そのままの強固さでしっかりと歩行を支え、目の前に広がるテラスに配された数々の装置を心ゆくまで堪能させてくれる。

意外なことに、日本最初の超高層ビルという榮譽を担いながら、以前の歩行者アプローチは、お世辞にもすっきりしてはいなかった。テラスと同じ位置に人工地盤はあったが、新橋・汐留側というと国立教育会館などが通せんぼしていて、人工地盤から細い通路を伝って、表通りにあたる桜田通りとの間を階段で行き来した。霞が関ビルディングの格からすると、似つかわしくないさざやかすぎる動線だった。それが文科省を中核とする超高層ビル「霞が関コモンゲート」の再開発・新築に伴い、新たな2本の超高層ビルと霞が関ビルディングの囲う広場が一体として再配置された。そして、「霞テラス」の人工地盤が成立し、桜田通り、外堀通りの二方向の歩行者動線が明確になった。後者をわたしが愛用しているわけである。

「霞テラス」は、霞が関ビルディングの2階レベルに広がる屋外の人工テラスと、その直下の商業施設、さらに地上レベルの広場から成る。広大な人工地盤に配された数々の装置は、控えめでありながら、都市広場のスケール感に埋没しないよう的確にデザインされている。そのなかには地盤直下の商業施設に自然光を送り込むガラスの構造体もある。樹木の列も幾何学的な反復を巧妙に仕立てるなど、テラスの広さを歩行者のヒューマンスケールに見合うように分節している。新

旧の超高層ビルを結ぶテラスが、広さの開放感を保ちながら、スケールアウトにならないよう、綿密に計算された外構デザインが見事だ。

さらに「霞テラス」が、霞が関ビルディングを巡る都市の視線を意識した、巨大な展望デッキになっていることも忘れてはなるまい。日本の超高層ビルの里程標である霞が関ビルディングが、最も美しく見えるのは、間違いなく外堀通りの上下車線をわかつ中央の位置だろう。そこから眺めると設計者が意図した通りのヴォリュームと工業材の窓が生み出す「繰り返しのリズム」が実に心地よく伝わってくる。初の超高層という歴史的遺産を、わたしたちはその構図で認識してきた。それは霞が関ビルディングからすれば「見られる側」の視線であって、逆にビルを背にして下層階から新橋・汐留側を眺めるとなると、かつては視界さえ十分に確保されていなかった。それが再開発に伴い、視線の遮断は文科省関係の施設が「霞が関コモンゲート」の超高層ビルにまとめられたことで解消し、「霞テラス」は外堀通りという都市軸線を介した都市への視線を独り占めするに至ったのである。

夕刻、霞が関ビルディングの中高層階から「霞テラス」の人工地盤を眺めると、一日の勤務を終えたひとたちが、桜田通りと外堀通りへの2つの動線に従って、足早にテラスを横断していく。その、ひとの動きは都市の生命を感じさせる。そして、彼らが共有する視線の先には、新橋へとつながる外堀通りが見事な都市軸線となって貫通し、そこからは暮れなずむ夕空のもと、シルエットと化していく汐留の超高層街区のスカイラインが屹立している。

それはなんと都市的な光景だろう。都市のダイナミズムが直感できる、恐らくは世界のオフィス街でもそうはない、劇的な都市のパノラマが、霞が関ビルディングの足元で現実のものとなったのである。人工地盤の適度な高さがさまざまな問題を抱えているはずの「都市東京」を美しく見せている。高くはないが、視界が貫通する位置での俯瞰効果が、本当は面白みのないはずの虎ノ門から新橋の風景さえショーアップしてくれるのである。

日本の超高層ビルの道を開いた霞が関ビルディングの新たなオープンテラスが、東京の景観を眺める最高の場所のひとつになったことに、わたしは感慨を覚える。それは半世紀近い昔に、郭茂林らが心血を注いで日本



外堀通りに架かる横断歩道橋から見る

の超高層ビル時代の扉を開いた過去の栄光に対して、今日のひとつひとつ目を向けさせる大きな機縁となりつつある。単なる保存、保全を超えて、「リニューアルが担うべき社会的な役割」が、輝かしい存在の霞が関ビルディングを舞台にして全うされたことを、建築界に所属する者として高く評価したい。建築の保存・再生は建築個体の保存にとどまらず、名建築が果たした建築史上の営為に、さらに榮譽を加える可能性をもっていることが示されているのである。

1970年代に建築教育を受けたわたしは、「海外の超高層ビルは、高層化によって、足元に緑地を確保しているが、日本のそれはただ効率だけを考えて計画されている」という話を教壇から聞かされた。確かに、霞が関ビルディングにしても、足元の広場の設営は高層化の恩恵を享受しているとは言い難かった。いや、霞が関ビルディングだけではなく、マンハッタン1960-70年代の高層ビルも、足元にとってつけたような金属彫刻を配して、それで「都市の芸術化」は事足りりとし、ヒューマンイズされた広場は実現しなかった。そうした都市街区における超高層ビルがやり残した課題と、玄人好みの手堅い外観ゆえに、霞が関ビルディングは、東京タワーを超える「都市東京のアイコン」になり得なかった。

しかし、意欲的な街区全体を視野に入れた再生は、霞が関ビルディングの一般のひとつひとつの認知をこれまで

以上に高める可能性を秘めている。「図=フィギュア」としての新旧3本の超高層ビルを、40年の歳月を超越して結びつける有機的な「地=グラウンド」が出現したことは、霞が関ビルディングの歴史に新たな1ページを加えるものである。

ドバイの地に、828メートルの世界最高層「ブルジュ・カリファ」が登場するなど、超高層ビルの主舞台は、経済的成熟期の国々を離れ、アジアからさらに中東へと移った。高度経済成長を成し遂げ、地震国とはいえ130本を超える「100メートル超」を抱える東京は、今後、世界一を目指す高さ競争ではなく、超高層ビルを都市の資産、つまり、蓄積的な文明として維持していく道を模索することになる。まさに100メートル超の超高層ビル事始めである霞が関ビルディングが、「霞テラス」という新たな広場で再生されたのは、東京のストックとしての超高層ビルの明日を考える大きなよすがを提供し、未来を想像していく有力な糧にもなるだろう。スクラップ・アンド・ビルドを克服した設計者(日本設計の上口泰位、山下博満、黒木正郎、山本篤子ら)の世代が主役となり、先人たちの歴史資産を次代へと継承する試みに挑んだことは、東京という経済都市の「次」を考えるにあたって、大きな一歩だったと評価したい。

まつば・かずきよ——建築評論家/1953年生まれ。1976年、京都大学建築学科卒業。同年、朝日新聞社入社。特別編集委員などを経て、2008年より武蔵野美術大学教授。
主な著書:『近代主義を超えて』(鹿島出版会/1983)、『パリの奇跡』(朝日新聞社(朝日文庫)/1998)、『新建築ウォッチング2003-2004 TOKYO EDGE』(朝日新聞社/2004)、『帝都復興史』(新潮社(新潮選書)/2012)、『ドバイ(超)超高層都市』(共著、鹿島出版会/2015)など。

特集 [鼎談]

新時代に挑戦した 先駆者



●聞き手●
古谷誠章
Nobuaki Furuya
建築家



●ゲスト●
池田武邦
Takekuni Ikeda
建築家(左)

上口泰位
Yasunori Kamiguchi
日本設計建築設計群専任部長(右)



都市広場“霞テラス”を再生し、 次代につないだ日本初の 超高層・霞が関ビルディング

初めは
超高層ではなかった

古谷 | この特集は近代日本のエポックメイキングであった建物を取り上げて、その建築が生まれた背景やお考え、ご様子を、当時をよくご存じの方にお伺いする企画ですが、今回のテーマは霞が関ビルディングです。設計者である池田(武邦)先生、そしてすでに長命長寿の超高層ビルになりましたので、当然、年月を経てリニューアルされて、その時に担当された上口(泰位)さんにも来ていただきました。よろしくお願いします。

池田 | あの頃は若かったですから、とにかくチャレンジすることにごく気持ちが高ぶって、一生懸命やったという感じですね。

古谷 | 不安はなかったんですか？

池田 | 不安なんか全くなかった。というよりも、僕は海軍だったのですが、戦場から帰ってきたら東京は焼け野原でひどかった。敗戦の翌年、1946年に僕は東京大学に通うことになって、御茶ノ水駅に降りたんです。そうしたら駅から東大医学部の鉄筋コンクリート造の建物だけがポツンと建っているのが見えて、他は一面焼け野原でした。その時に、何て言いますかね、僕は国を守るべき海軍にいたのに、守れなかったことに非常に責任を感じましてね、余生はどうしても日本の再建のために…と思いました。まだ21歳でしたけど、余生という感じだったんです。

古谷 | 九死に一生を得るような経験をなさったからですね。

池田 | ですら今まで「余生はこれだ」と思って頑張ってきたんですが、余生が長過ぎちゃってね(笑)。

古谷 | いえいえそんな…。戦後、焼け野原を見て、東京や国土を再建しなくちゃいけないという意識をお持ちになって、次第にいろんなものが形になってきますね。霞が関ビルの仕事を始められたのは1960年頃だったと思いますが、その時はすでに東京オリンピックの開催が決まっていたので、オリンピックに向けていろいろな建物が建設されたり道路をやり変えたり、東京中が工事現場みたいな感じだったんでしょうか。

池田 | そうですね。ただね、実は霞が関ビルは初めは超高層じゃなかったんです。あの当時、高い建物はたしかホテルニューオータニで、10何階建てだったかな…。

上口 | ホテルニューオータニは17階建てで、1964年に竣工しています。

古谷 | それが次第に超高層に変わっていったのは、どういう経緯だったんですか？

池田 | 当初、旧東京倶楽部ビルの建て替えとして9階建てのビルを建設する計画が進んでいました。ところが着工しようとした矢先に建設がストップになって、法律的にできなくなった時期があるんです。

上口 | 1961年10月に政府から着工延期の勧告が出たんです。というのは国際収支の悪化による金融引き締め対策によって、設備投資を抑制する話になったそうです。

池田 | そのストップが超高層への道を開いたんです。それまでは当時の高さ制限の中でどうやろうかと考えていたんですが、ストップしている間に国際的にいろいろ変化が出てきたんです。当時、超高層はニューヨークとかアメリカの東海岸だけにしなくて、ロサンゼルスとか西海岸は地震がありますから日本と一緒にだつたんですね。ところが、西海岸辺りが超高層化を考え始めたらしい。それに連動するように日本もそういう風潮になってきた。ですから超高層の建築としては、ロサンゼルス、サンフランシスコ辺りと日本はほぼ同時なんですよ。

古谷 | なるほど。記憶が定かではないですが、武藤(清)先生が「アメリカでは岩盤の良いところだけに超高層があつたけれど、地震のある西海岸でも超高層の計画が出来始めた。それなら日本でもやってやれないことはないだろう。だんだんそういう考えになってきた」と…。

池田 | そうなんです、日本では武藤先生が構造学の権威者でした。先生は東大を定年退職されると同時に鹿島建設の副社長に呼ばれて、鹿島と一緒に超高層をやり始めるんです。霞が関ビルの土地は三井不動産が持っていて、山下寿郎設計事務所と仕事をしていたんですが、山下事務所の担当が僕だったんです。で、三井不動産の担当の方といういろいろ検討していた。ちょうどその頃に、郭茂林さんが三井不動産の専任顧問になられたんです。

上口 | そうですね、正確には建築顧問でした。

池田 | 郭茂林さんは、僕が学生の時に東大の吉武(泰水)研究室にいらっちゃって、先輩にあたりますがとても人柄が良くて、みんなをうまくまとめる方でした。

古谷 | 郭さんは1920年生まれですから、先生より4つくらい歳上ですね。その郭さんが、言ってみれば発注者というか建築主の側にいらっちゃったわけですね。

池田 | そうそう、三井不動産の顧問として。

古谷 | そうでしたか。続きは後ほど伺いますね。次は上口さん、霞が関ビルとのかかわりはどんなところから始まりますか？

上口 | 私は2003年に担当していた汐留の松下電工東京本社を終え、建築界ではちょうど汐留、丸の内、六本木などで大規模オフィスビルの竣工ラッシュによる、オフィスの大量供給が起こった。いわゆる2003年問題が話題になっていた頃です。同じ年の11月に三井不動産に呼ばれて、「改修をしたい」というお話を、営業部隊を始め関係者一同が集まったところで伺いました。とにかくテナント候補はいろいろ来られるん

だけど、霞が関ビルはスルーされてしまう…と。

古谷 | 少し古くなってきたということですか。

上口 | そうです。競争激化がこんなに早く進むと思わなかった。とにかく外構アプローチ、商業エリアから暗い、古いというイメージがあって、これを払拭したい。プライムビルとしてのプライドがありましたから、今までは新しいビルに負けないような機能面でのリニューアルを中心に行ってきたのですが、それだけではこれから竣工する最新のオフィスビルに太刀打ちできないことに危機感を持っていらっしゃいました。それに、霞が関ビルを候補にするテナントは虎ノ門に限定しているわけじゃなくて、都内でベストなところを選びますから、立地の優位性が効かなくなってきたんですね。ということで、まずはエントランスとなるけやき広場を改修してほしいと…。その時に、全体の広場を中心にした霞が関ビルの街区再編計画がだいたい見えていました。

古谷 | 中央合同庁舎7号館の計画が、PFI事業による再開発で始まっていましたから、それと歩調を合わせて…。

上口 | 霞が関ビルの街区再編計画が始まったのは2000年なので、PFI事業の公募より前なのですが、将来は総合的に計画するけれども、それを待ってはいられないから、とにかく早く応急的に改修をしたい。けやき広場と共用部、いわゆる基準階の廊下、エレベータホール、トイレ、湯沸かし室などを見直して当面の危機から脱出したい。そういうことでリニューアルに着手しました。それがきっかけです。

古谷 | なるほど。ところで1968年に霞が関ビルの超高層が出現した時の上口さんのご記憶は…？

上口 | あります。高校1年になる時でした。東京に叔父が住んでいまして、「霞が関ビルを見てこい」と言われて見に行きました。3月でしたから竣工直前だったんですね。

古谷 | 「超高層のあけぼの」^[1]が、あの雰囲気です。

上口 | そうです。その時、その場にいました。

池田 | ああ、そうだったの。

古谷 | 僕は1955年生まれですから、まだ中学の2年生だったと思いますが、それまで高いものは東京タワーだけでしたから、超高層ビルが初めて姿を現した時はワクワクした記憶があります。あの頃、アポロは宇宙船で月へ行くし、テレビでは「37階の男」という番組が出来て、霞が関ビルは36階だったからそれよりも1階上の…というような、本当に未来を予感させる感じであふれていました。とにかく霞が関ビルが出来た時のことは非常に印象が強いですね。

超高層を可能にした 耐震技術の進歩

古谷 | それまで31mの高さ制限があって、最初は9階建てを検討していた世界だったのが、超高層が可能

になりました。それは超高層にまとめることによってオープンスペースをつくって、都市に失われつつある自然を何とか回復しなきゃ…という話だったんですか？

池田 | それもありましたけど、何と言っても“地震国でも超高層の可能性が出てきた”という耐震技術の進歩の方がインパクトがあったと思います。それは武藤先生がやっておられたんですが、それまではこうすればいいはずだという構造の原理は出来ていましたけど、計算するととなると…。

古谷 | 柔構造という考え方でですね。

池田 | そうそう。計算尺でやっていたら何年もかかるような膨大な計算が、コンピュータが出来たことで可能になったんです。実は僕は海軍時代は測的長という敵艦の位置を測定する責任者だったんですが、要するに東に撃つ弾と西に撃つ弾は、地球の回転によって弾の距離が違ってくる。遠距離を撃つ時は、だいたい成層圏まで弾が飛びますから、富士山の3倍くらい上の方の気象と関係があるんです。そういうことを計算に入れて、敵がいるところに弾を命中させるためには…。

古谷 | その軌道を計算するんですか？

池田 | そうそう、そういう計算をする。当時はいわばコンピュータをウォームギアでやっていたわけですよ。兵隊さんが10数名、測的盤という計算の機械に、もろもろのデータを入れて計算していました。それが電気的になったのがコンピュータなんです。

古谷 | 電子計算機ですね。

池田 | そうそう。それが出来たので超高層が可能になった。

古谷 | 池田先生はその大変さが身に染みて分かっていただけですね(笑)。

池田 | 非常にピンとききましたね。

古谷 | 武藤先生の柔構造ですけど、簡単に言うと層と層の間を分離して、そこで地震動の変位を吸収できるような構造であれば超高層化が可能だという理論で、そのものは古くからあって、それが実践できるようになったのは今の計算機のおかげだろう。それまでは、建物の柱は下にいくに従って太くなってしまいうけど、それを全部同じ寸法ですっきり積み重ねられる…、そういうことですよ。

池田 | 寸法は同じだけど、厚みは変わってくる。

上口 | フランジ間の寸法を同じにして、フランジの厚みを変えています。

古谷 | 荷重だけはかかってきますからね。ちょっと横道にそれますが、実は早稲田大学の理工学部の51号館は18階建ての校舎なんですが、あれは霞が関ビルが出来た少し前に竣工して、たしか1年間だけ東洋一だったんです。設計は安東勝男先生、構造は松井源吾先生。あれも柔構造で、層間分離した初めての建物だと思います。3階建て、4階建ての教室はコンクリートの柱が目に見えて各階で太さが変わっていく。層間を分離した18階建てだけは、下から上まで同じ柱型で積み重なっている。鉄筋量は当然違うんですが…。だから理工学部には目の前に教材があるようなも

ので、こういう原理である超高層の霞が関ビルは出来ているということを教わりました。

池田 | ああ、そうでしたか。

古谷 | ところで、霞が関ビルは工事中からすでに社会的に注目されていて、資料を見ますと、『SD』の1967年6月号の「特集：建設すすむ超高層」^[2]は、工事中の写真だけで構成されているんです。こういう扱いは日本の建築雑誌では珍しいと思います。写真はスケルトンが綺麗に写されていて、「きれいに組みあがった36層の骨組。現場は予想以上にきれいで安全感がある」という解説が付いているんです。いったいどんなものが出るのかと、みんなが固唾をのんで見ていた感じが伝わってきますね。

池田 | その当時の現場はね、本当にチェックが厳しかったんですよ。工事現場に入ってくる職人さんは前の晩にお酒なんか飲んでいて危ないですから帰されますし、服装までチェックされて、まるで軍隊みたいに厳しくやっていました。だから非常に緊張感がありましたね。

古谷 | そうでしたか。『SD』の工事中の写真でも、最上階に上がるとものすごい眺望が開けていて、まだ竣工していないんだけど、「集約された科学と技術の飛躍的な発展は、また同時にわれわれの環境空間への認識をあらためさせる機会を創り出した」という説明が付いているんです。つまりこれらを眺める機会が生まれたと書いてあって、隅には東京タワーが写っているんです。すでに公害のスモッグが覆っている様子も分かるんですよ。

上口 | そうですか。その記事は全体としてはどういう構成なんですか？

古谷 | 前半はグラビア構成で、後ろ半分は座談会で「高さへ挑戦するバイオニアの体験」^[3]がテーマです。池田先生は、山下寿郎設計事務所として出席されています。

池田 | 他には誰が出ているの？

古谷 | もちろん郭茂林さんがいて、鹿島建設の池田太郎さん、三井不動産の石田繁之介さん、鹿島の構造の伊東豪夫さん、山下寿郎設計事務所の設備の鈴木二郎さんという方々で、バイオニアの体験として座談会をされているんです。余談ですが、この座談会で池田先生の一番最初の発言は「五重の塔の周期というのはどのくらいなんですか」なんです。それ以外はほとんどが技術的な議論になっていて、時の関心がいかにテクノロジーに対する期待と課題として捉えられていたかがよく分かるんです。ちなみにここに出てきた話題は、構造計画、耐力壁について、層間変位の問題、H型鋼の使用、多軸ボール盤、タワークレーン、デッキプレート採用、耐火被覆、カーテンウォール…と、ずっとテクノロジーの話しかしてなくて、最後に防災避難のところでやっと計画的な話になって、池田先生が発言を求められているんです。他は圧倒的に技術なんです。

池田 | 鹿島(出版)が出している雑誌だからでしょう。

古谷 | それもあるかもしれませんが、竣工した時期の記事は、他の雑誌もみんな“技術に関する革新”という部分を熱く語っているんです。

池田 | そうですか、なるほどね。

古谷 | でも池田先生は防災避難の話の時に「高層になるから当然だけど、全員が地上に逃げることは現実的ではない。上下階、近くの階に避難する考え方に変えた」というような話をされています。つまり「層間を耐火的に分離していくことがとても大事だ」とおっしゃって、唯一、計画的な話をされているんです。当時は“計画”と“技術”の割合はいかがだったんですか？

池田 | ほとんど技術が主でしたね。たしかあの前後に、超高層の火災の映画があったような気がしますが。

古谷 | 「タワーリング・インフェルノ」ですか？

池田 | そうそう。それで避難をどうするかということ、煙の処置が大問題になってね…。

上口 | スモークタワーが付いたんですよ。

古谷 | 煙探知器も、この時に初めて付いたんだそうですね。

池田 | そうです。

古谷 | 今ではみんな義務付けになっていますが、この記事を見ると、要するに煙が出始めてから実際に発火するまでの間に時間があるから、最初に煙が出た段階で感知していれば、避難が間に合うはずであるという話ですね。それ以前にはそういう考え方はなかったんでしょうか？

池田 | 建築ではなかった。船ではありましたよ。

古谷 | 先生が乗艦されていた「矢矧」^{（はつき）}も最後は火災が起きますね。矢矧は何階建てだったんですか？

池田 | 階数で言うと、だいたい地下5階、地上10数階くらいだったと思います。

古谷 | じゃあやっぱり全体でかなりの層が重なっていたんですね。その時は煙探知器とかは付いていたんですか？

池田 | もちろんありました。

古谷 | やっぱ層の間で遮断するとか、そういう囲い方ですか？

池田 | 防火壁がいたるところにありまして、防火だけではなくて防水というか、ここをやられても…。

古谷 | 次で水をブロックできるようになっているわけですか？

池田 | そう、全部、箱にしちゃうと言いますか…。

古谷 | なるほど。

池田 | その代わりなかなか沈まないんですよ。沈まない間は敵の飛行機が来ますからね。本当にやられた時は早く沈んでくれと思うくらい沈まないんですよ。とにかく、防火とか防水の最先端技術は全部、軍事ですからね。

古谷 | そうですよ。じゃあ霞が関ビルの時も先生は海軍で経験したことをアイデアとしてお出しになったようなこともあったんですか？

池田 | ずいぶんありました。特にコンピュータ関係は船がもとですからね。



上一層の梁型の孔型を持つH型鋼・ハニカムビーム：梁材を軽量化するため、H型鋼のウェブをジグザグに切断し、その山型の個所を溶接して組み合わせた“ハニカムビーム”が考案された。肉抜きとしての孔口は設備ダクト貫通、配電配管に利用されている | 中一鉄骨組み上げ風景：串型に3層分の2段梁を工場溶接してプレハブ化し、スパン中央部で現場溶接することで、建方ビームの減少と接合部の簡易化を図った | 下一鉄骨建方完了時の全景(1967年3月)：柱断面の補強を目的とした2段梁は、建物の周期調整と耐震性能の向上、市販サイズのH型鋼の活用などのメリットを生んだ【解説：上口泰位 | 所蔵3点とも：三井不動産】

^[2] 「特集：建設すすむ超高層一躍が関ビル」『SD』1967.6

^[3] 「座談会：高さへ挑戦するバイオニアの体験」(池田武邦×池田太郎×石田繁之介×伊東豪夫×郭茂林×鈴木二郎) 『SD』1967.6

古谷 | なるほどね。

ポツになった原稿 「文明の落とし穴」

古谷 | 先ほどの雑誌の座談会の話になりますが、最後は設計組織になっていくんですね。いろいろな能力を持った人が集まって、アイデアを出し合って協議や合議をしながらつくり上げる。例えば、建築家と施工会社という意識ではなくて、いつもフラットに議論できる、そういう組織が必要だったとおっしゃっていますね。

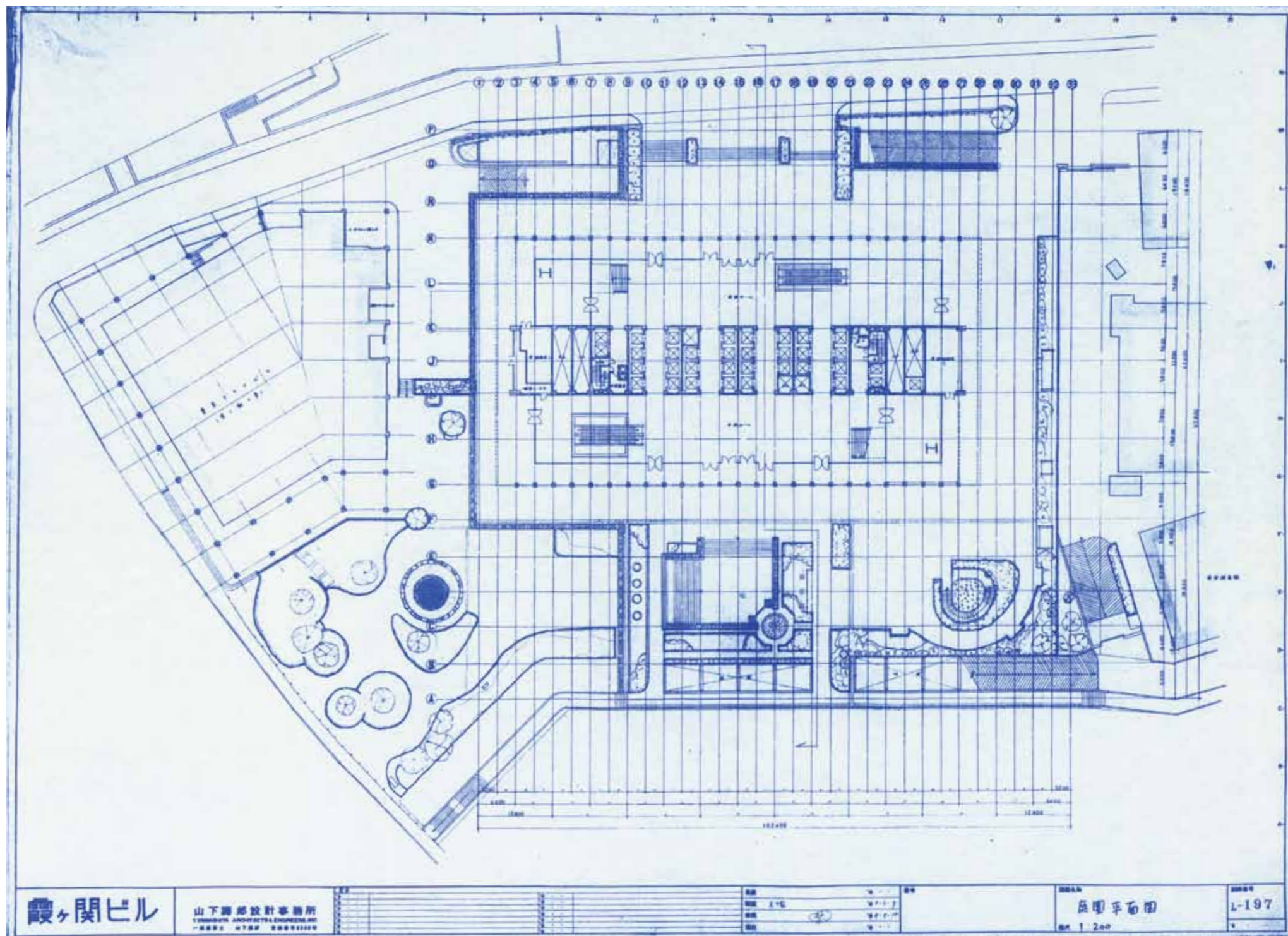
池田 | そうなんです。霞が関ビルは日本で最初の超高層ビルでしたから、すべてが初めての経験になるわけで、もちろん前例もない。そこで若手の人が中心になって取り組もうという話になりました。ただ、その発想は素晴らしいのですが、現実問題となると、施工と設計者の関係は、そううまくはいかない。どうしても自分たちの考えにこだわりますし、張り合ったりもするわけです。それを突破するきっかけになったのが200mの煙突の設計でした。地下から屋上までを貫通する200mのボイラー用の煙突の話が持ち上がったんです。通常のコンクリートの煙突では柔構造に対応できないし、スチールでは腐食の問題をクリアできないわけです。この時ばかりは相当、悩みました。

古谷 | 長さも問題ですが、ずっと炊きっ放しじゃないから、伸び縮みがあるとおっしゃっていましたね。

池田 | そうです。火力発電所の煙突はもっと高いものもありますが、四六時中、熱がコンスタントにかかります。ところが霞が関ビルは昼間のみ稼動して、夜は止めるわけですから、ものすごく温度差が出るわけです。鉄筋コンクリート造が良いことは分かっているのですが、それをどうやって揺らすか。その解決が非常に難しかった。この辺りから、みんなが力を合わせて必死に取り組むようになって、鉄筋コンクリート造の煙突を層間変形で動かすという結論に辿り着いたんです。お互いに協力し合わなければクリアできなかった。これはチームワークのおかげでした。

古谷 | 資料には、この時に個人と組織の関係性を学んだと書いてありましたね[4]。

池田 | どうしたら良いチームワークが出来るか。例えば1人よりも2人、2人よりも3人の方が発揮できるという考え方がありまして、これをグループダイナミクスと言うんだそうです。アメリカでは第二次世界大戦時の作戦を練る際にも採用したそうで、数学者や物理学者など軍事専門外の学者も入っていたと、戦後明らかになりました。一理あると思いました。それを僕は本で読んで、このやり方を山下寿郎設計事務所に取り入れようとしたら、どうしてもうまくいかなかった。それで日本設計をつくった時に、グループダイナミクスを取り入れた。どんな意見も絶対に否定しないで、その背景をよく見極めていく発想でやったんです。先輩も後輩もなく、対等に意見を出し合ってディスカッションする。そういう設計組織を目指したわけです。



古谷 | それは今も脈々と受け継がれていますか。

上口 | そうですね。われわれは全員「さん付け」で呼ぶんですね。

古谷 | 上も下も。

上口 | そうです。そういう意味では、池田さんがおっしゃったフランクと言いますか、みんな好きなことを言いますし、上司に対してもストレートに言える、そういう風潮は残っているかなと思います。

古谷 | そうですか。日本設計を立ち上げられた頃の話は後ほど詳しく伺いましょう。

ところで、この「LIXIL eye」の前身の「INAX REPORT」で池田先生と内井(昭蔵)先生が対談されている記事[5]に出ていた話なんですけど、「文明の落とし穴」とい

う原稿をお書きになっていますね。地震国に高層建築を建てることはできたけど、問題はまだまだいっぱいある。もっと謙虚に技術を見ていかなきゃ、どこに落とし穴があるか分からないとおっしゃっている。その時に必ず思い出すことがあると言って、1935年に北海道の沖合で日本海軍・第四艦隊の遭難事件の話をしていらっしゃいます。その時の船は外国の技術でつくられていたために、日本の台風を考慮していなかった…と。それはどういう事件だったのですか？

池田 | あの時の船はイギリスの船です。

古谷 | イギリスですか。

池田 | 日本の海軍はイギリス海軍の伝統を継承してまして、造船基準も全部イギリスの基準でつくられて

いたんですが、駆逐艦が北海道の沖で台風によって、艦首がもげてしまう事故が起こったんです。ところが防水区画がちゃんとしていますから浮いているんですよ。艦首の中には水兵が何人か乗っているんだけど、それを引っ張ってこようにも台風が激しくてとてもできない。そしてだんだんアメリカの西海岸の方へ流れていくんです。アメリカに流れ着いたら秘密が漏洩しますから、最後は…。

古谷 | 沈めたんですか、魚雷かなんかで？

池田 | はい、大砲で…。その時はイギリスの船は、太平洋の波の基準ではなかったわけです。太平洋は太平洋の波に耐えるようにつくられていなければならぬ。それ以降、日本海軍の船はどんな台風でも大丈

霞が関ビルディング 庭園平面図[所載：三井不動産]
「広場には人間性がある。はなはだしく人間疎的な大都市の、一般市民に開放された広場は、人間性回復の場として、珠玉の存在である。(中略)広いオープン・スペースをとることを目標とした、(中略)許された範囲の容積を得るため、階層を幾層にもつまかさねる—いわゆる「超高層」ビルの建設に踏切ったのである。これはなにも奇を衒うてのことではなく、より価値多き広場をつくる目的のための決断であった。かくて「超高層」ビルは、いわば目的ではなく、手段であった」と水室捷爾氏(当時の三井不動産副社長)が竣工時の「霞が関ビルディング」[三井不動産/1968]に書き記している[解説：上口泰位]

[4] 池田武邦「超高層への挑戦から50年—グループダイナミクスでつくった霞が関ビルディング」『新建築』2012.7

[5] 「対談：51対49のせめぎあい」(池田武邦×内井昭蔵)『INAX REPORT』No.129, 1997.4.15



新橋方面から見た建方完了直前の全景【所蔵：三井不動産】
「鉄骨の全ぼうが見えてくると、それが実に美しい。東京のスカイラインに強烈なアクセントを生みだした」と武藤清氏は『鹿島建設月報』1968年5月号に記している。外装デザインが決定したのは、この写真が撮影された約1か月後の1967年3月末。38,000m²のカーテンウォールを、当時の最速取り付け事例の3倍以上の早さで、4か月の短期間のうちに完了している【解説：上口泰位】

夫になった。余談ですが、1944年のレイテの戦いで散々やられて、「武蔵」も沈んで、「矢矧」もクラスメイトが戦死したりして内地に引き上げてきたんですが、途中、台湾沖で台風に遭ったわけです。その時、アメリカの駆逐艦は艦首がもげて遭難したけど、日本の船は平気で帰ってきた。それは造船の波の基準を変えていたからです。戦争中でしたが秘密裏に行われていたんです。

古谷 | なるほど、そうだったんですね。当時いつも科学的なことを解説されていたNHKの村野賢哉さんの寄稿【6】に、「安全というものが刷り込まれていく」という話が出ていました。みんなが安全だ、安全だと言っているうちに誰もが安全だと盲信してしまう。例えば、当時、日本でも地下鉄で火災があって、最初のうちは誰もが相当、心配しましたが、安全対策がいつばい講じられ「安全である」と宣伝しているうちに、地下鉄の関係者ですら安全だと盲信するようになってしまう。また、アポロの宇宙計画、NASAでの訓練中に爆発事故が起こりますが、これも航空宇宙局が「極めて慎重に対処しているから安全だ」と言っているうちに、当事者ももう安全だと思い込んでしまう。そういう思い込みが起きるわけですね。

池田 | そうそう。

古谷 | でも、やっぱりよそから来た技術にしても何にしても、自分でやっているわけじゃないんだけど、「誰か

がちゃんとやっているから安全だ」と思ってしまうところがありますね。そういう意味で、池田先生が書かれた「文明の落とし穴」という文章も、非常に重要な示唆があったと思うんです。しかもその原稿は霞が関ビルが出来た頃に書かれていたようですね。でも、原稿料は頂いたけど掲載してもらえなかった…と書いてありました。

池田 | そうです。その時は輝かしい技術開発についての執筆依頼だったんですよ。僕は「いやいやそうじゃないんだ」と言って、勝手に「文明の落とし穴」という原稿を書いて出したらボツになっちゃったんです。

超高層ビルを 実際に建てるための実験は…

古谷 | いよいよ霞が関ビルが竣工しますね。世間では大変なものが出現したと騒がれましたが、でも日本中が国を再建しようとする気運にあふれていましたから、総じて歓迎される方向で迎え入れられました。先ほどの「超高層のあけぼの」という映画もしかし、テレビ番組「37階の男」もしかし、もう36階といったら超高層の代名詞みたいなものでした。そして、1968年の6月号辺りでは、さまざまな雑誌に竣工の記事が掲載されるんですが、この中に幾つか面白いことが出ていました。やっぱり竣工してからも、さっきと同じよう

な技術論、組織論が多い。例えば『近代建築』を見ますと、浜口隆一さんが聞き手になった武藤先生との対談「超高層ビルのバイオニア」【7】も内容は設計体制、電子計算機、ターン・キー・システム、施工技术、設計と施工の協力という話でした。同じ号に内田祥哉先生がご自身で開発されたプレハブ技術に関して盛んに持論を披露されています【8】。でもこれはすごく分かりやすい記事で、どうしてこの時にプレハブ化が進んだかと言いますと、上階に行って作業する作業員の数を増やすとロスが多い。だからできるだけ下でつくってから上に持っていく。つまり、高層になったからという理由がひとつ。それから、高いということは必然的に繰り返しが多くなるために、スケールメリットが出て、プレハブ化、規格化する意味がある。これが大きなターニングポイントになったと読めるんです。そういうことでしたか。

池田 | そうですね、例えばトイレひとつをとっても…。

古谷 | プレハブにして、壁付きの便器にして床との取り合いに悩まなくてよくなった。

池田 | そうそう。竖シャフト位置を限定して他はすべて横引配管を原則にした。トイレが一番問題になったのは、上の階で用を足した汚物が流れ落ちる場合と、下の階で使った場合では重力、スピードが違う。それでも大丈夫とか、便器から横引配管でダクトに落とすわけですが、横に引く時にうまく流れるかとか…、メーカーの工場に行って実験をしたわけです。お味噌とプラスチックのお米の粒みたいなものを混ぜて、形や比重を実物と同じにして流す…、そういう実験をずいぶんやりました。大変な時間と労力をかけて実験しているんです。

古谷 | そうですね。いずれにしても霞が関ビルでプレハブ化したものにはデッキプレートの捨て型枠を始め、いろいろなものがありますが、階段もピースに分けてつくるんです。後に定番になりましたけど、横森製作所の階段では、鉄骨階段のワンフロアを4ピースに分けて標準化しているんです。

池田 | そういうことも全部やったんですよ。特に窓ガラスは、上の階の窓は台風にも耐えられるか。実際に風圧を当てると、映っている顔がグーツと膨らんで、ガラスがここまでたわむのか…と思うくらい強烈で、かなり印象に残っています。ですから霞が関ビルを実際に建てるための実験は、それぞれのメーカーがいろんなところでやっているんです。いずれもそれまでの建築の発想とは全く違う実験でしたね。

古谷 | なるほど。結局、超高層になると階段もバカにならないほどの量になりますから、標準化、プレハブ化、量産化というのは、同時に1個1個のピースに対してコスト管理をしっかりやらないと、数があるだけに大きく影響する…ということですよ。

池田 | そうですね。影響が出て深刻な問題になるんです。

古谷 | BCS賞をお獲りになった時の選評の中で、西澤文隆さんは、「非常にコストを厳しく管理されて、1

割アップくらいで出来ていることには敬意を表する」とおっしゃっていました【9】。

池田 | そんなものでしたかね。だけどそのための開発の研究や実験はすごかったと思う。それは値段に入っていない(笑)。

上口 | 私が調べたところでは、トータルで150億と決まっています、坪単価で記載されているのは31万でした。

古谷 | なるほど。それと西澤先生らしいと思いましたが、最後に1つだけ苦言が付いていて、それが広場の問題なんです。「あそこが2層になっているのだけは何かならなかったのか」、「車寄せから行くと地下に行ったような気がするし、2階のところも少しさびしい。エントランスももうちょっと何かならなかったのか」と。

池田 | そのとおりなんです。というのは、霞が関ビルの時は、高層化のために全精力をことごとく使いましたので、低層部の計画まではエネルギーが回らなかった。それで次に設計した新宿三井ビルの時には、低層をパッチリやろうと思ひましてサンクンガーデンにして、京王プラザホテルとの間も緑化したんです。ですから霞が関ビルでは技術開発をやりまして、新宿三井ビルは本来の超高層の在るべき姿を求めて低層部で勝負したんです。

古谷 | なるほど、なるほど。じゃあ霞が関ビルでは低層部の辺りは宿題になっていたんですね。そしてその後の2006年に上口さんがリニューアルすることになるわけですね。

超高層の高さは、 どういう点が問題だったか

古谷 | 竣工した時の『新建築』には、いろんな方が寄稿されています。大谷(幸夫)さん、林昌二さんが書かれていて、先ほどお話ししたNHKの村野さんの文章【6】に、幾つか示唆的なものがあるんです。「特に、超高層の高さは、どういう点が問題だったか」とおっしゃっている。「都市の美観上の問題だったのか、日照権とか電波障害や公害みたいなものが問題だったのか、構造的な問題だったのか、あるいは都市の形態上、機能的に問題があったのか、よく分からない」と…。ただ「電波障害とか日照権については、都心の真ん中のことだから解決の方法があるだろう。構造もどうやら解決された。とすると、残っている問題は美観上の問題と都市機能上の2つの問題になるのか…」とおっしゃっています。当時、東京海上のビルが高層化することに対して、都の許可が下りなくてストップしていた期間があったそうですね。

池田 | 東京海上がですか…?

古谷 | 設計は三菱地所さんがやられて、その計画に東京都の許可が下りなかったという話のようでした。

池田 | どういう理由で?

古谷 | それがよく分からないんです。美観上だったの



新宿三井ビルのサンクンガーデン【1974】
【写真：相原功】

【7】 「超高層ビルのバイオニア 霞が関ビルの竣工をめぐって 武藤清博士に聞く」(武藤清×浜口隆一)『近代建築』1968.5

【8】 内田祥哉「霞が関三井ビルのプレハブ構法決定の方法について」『近代建築』1968.5

【9】 西澤文隆「3 霞が関ビルディング」『建築業協会賞作品集 1969—第10回BCS PRIZE WORKS』[建築業協会/1969]



竣工直前の全景【所蔵：三井不動産】
日本初の超高層ビルのデザインとして、“大地のスピリットが集まってだんだん天に昇っていくイメージ”を描いていた。当初から外装は“縦縞(たてしげ)”のデザインを目指し、柱型を強調する意匠を追求していた【解説：上口泰位】

でしょうか。霞が関ビルではそれをクリアして実現した。その後、東京海上は前川(國男)先生がデザインすることになって、景観上もOKになったらしいです。当時、抜きん出て高いものに対して、美観がどうかか景観がどうか、そういう議論や反対論があったんですか？

池田 | いや、僕は印象にないですね。どうだったんだろう。

古谷 | 村野さんは、「美観上の問題が残っていたのかな」とおっしゃっているところを見ると、何となくはあったのかもしれないですね。つまり超高層が建つことに対する抵抗感といいますか。

上口 | 電波障害はありました。

古谷 | そうでしょうね。

上口 | 箱根から国鉄にマイクロウェーブが飛んでいるのですが、それがちょうど霞が関ビルに当たって、その問題が解決するまでは工事ができないという話があったんです。結局、電波を東京タワーにいったん迂回させて、同軸ケーブルで東京駅まで持ってくることで決着がついたと。

古谷 | そうでしたか。霞が関ビルはあまりにも抜きん出て高かったから、美観上の問題よりも技術開発とか復興の高揚感の方が強くて、あんまり問題じゃなかったのかもしれないですね。

池田 | そうね、僕らにはあまり問題じゃなかった(笑)。

高層の“オフィス空間”が せっかく誕生したのに…

古谷 | 今、思い返してみると意外だと思うのは、せっかく高層のオフィスが出来たのに、どの雑誌もオフィス空間の扱いが素っ気ないんです。なぜか小さい写真しか載っていない。

池田 | そうでしたか(笑)。

古谷 | 例えば『SD』にしても『新建築』にしても、外観とかカーテンウォールの写真ばかりで構成されてい

て、いたって不思議だと思うんです。

池田 | そうですね。僕らもオフィスをメインで考えていました。モジュールで全部、間仕切りをしていてね…。

古谷 | そうですよ。それが竣工写真では小さくしか扱われないというさみしさがありましたね。上口さんはいかがですか？

上口 | 竣工写真を撮ると、いつも基準階のオフィスは非常にフォトジェニックじゃないですよ。

古谷 | どうしてだろう。

上口 | 家具が何も無い。そういう意味では絵にならないという単純な理由がひとつあったと思うんです。

古谷 | 本当はオフィスの環境というか空間性が大事ですよ。エントランスホールがいくら立派でも…。

池田 | そうそう。目的はオフィスの空間なんだ。

上口 | 確かに無柱空間ですから、13m飛ばして柱が1本もない空間は初めて登場したんですよ…。

池田 | 自由に間仕切れるしね。

古谷 | ですから、竣工時の記事でいうと、唯一、剣持(勇)さんがデザインされたレストラン、ここだけがつややかに表現されているんです。郭茂林さんは「東京タワーからの眺めは観光的であるが、霞が関ビルはオフィスビルとして生活的である」とおっしゃっているんです【10】。確かに35階のレストランは、東京タワーの展望台とは違うでしょうね。ここに座って夜景を楽しみながら食事をする…となりますと、普通の人にとってはハレの場ではありますけど、生活空間としての眺望を初めて生み出したのかなと思います。池田先生は竣工してから、35階のレストランに行かれましたでしょ。どんなご気分でしたか。

池田 | いやあ、確かに気分は良かったですね。

古谷 | 今だったらこのビルでも当たり前ですけど、これは日本で最初に出現した超高層ダイニングスペースですからね。

日本設計設立の経緯

結局107人が一緒に…

古谷 | 1968年というのはまだまだ高度成長期でしたが、その後、京王プラザホテルを設計し、先ほどから登場している新宿三井ビルも設計される。ちなみに日本設計は、霞が関ビルが竣工する前に設立されていますよね。日本設計が設立された辺りのお話を簡単にお伺いしたいのですが、上口さんはどんなふうに聞いていらっしゃるんですか？

上口 | 僕が知っていることを申し上げますと、まず池田さんが山下寿郎設計事務所の中でいろんな社内改革的なことを発言されていて、煙たがられていたらしいです。それで役員にしたら黙るだろうと役員にしたんだけど一向に収まらなくて、役員会議でもどんどん言いたいことを言っていた。ついには、池田さんは山下を飛び出した…というところは本で読みました。それは事実ですか(笑)？

池田 | 事実ですね。

古谷 | その前があるとするば、私が聞き及ぶ限りでは、山下寿郎設計事務所には非常に自由な社風があって、要するに会社の仕事とは関係のない保育園を設計したり、コンペに応募したり、いわばアルバイトを認めるようなおらかな社風があった。しかし、霞が関ビルをやられる頃になりますと、少し組織的に変わってきて「それはいかがなものか」という声が出てきて、かなり窮屈な感じになってきた。そこで、引退なさっていた山下寿郎先生にもう一度お出まじいごうとしたのだけれど、それがうまくいなくて、結局、池田先生が出てしまわれることになったと伺っています(笑)。それで、本来はごくごく身近な人だけを一緒に出す予定だったのかもしれませんが、結果としては107人が付いてきた…と。

上口 | 池田さんによると、ファイトのある人だったと…(笑)。107人全員が山下寿郎設計事務所からではなかったらしいです…。

池田 | いやいや、能力ですよ。すごく良い人材が来てくれたんです。

上口 | 付いて行こうという気になったわけですから、池田さんの人徳ですね。でも、その頃は霞が関ビルは大詰めの時期じゃないですか？ そんな時に飛び出して新しい組織をつくらうというのは、不安がなかったのかと思いますね。

池田 | 不安なんて全然…。

上口 | なかったんですよ。

古谷 | こうして日本設計が設立されて、その後、あの伝説の“雪の事件”が起きるわけですね。新宿三井ビルに入居されたのは何年頃だったんですか。

池田 | たぶん建物が1974年頃の竣工で、入居はオイルショックだったか、経済的に厳しくなった時期でしたね。

古谷 | 1回目のオイルショックですかね。第二次オイルショックは1978年の暮れですから。

池田 | オイルショックになっちゃったけど、僕は自社で設計した新宿三井ビルにテナントとして入ることに決めていたんです。だって日本設計なんて誰も知らないでしょう。だけど作品を見ればすぐ理解してもらえるはずだと思っていました。でもね、社員は反対したんですよ。「給料を減らしてまで入るのは反対」と僕の家まで押し掛けてきました。実際は、減らしたんですけどね。

古谷 | 本当ですか(笑)？

池田 | そう、給料は1割か2割、全員減らして入居したんです。でもね、入ってまもなく、香港から李嘉誠さんという香港の財閥のナンバー2の方が来られて、「香港で仕事してほしい」という依頼がありました。

古谷 | なるほど、やっぱり広告塔として役に立ったわけですね。そして50階に入居されて、あのエピソードになる。

池田 | 入居した次の年の冬です。

古谷 | じゃあすぐの話だったんですね。50階にある

日本設計の事務所でワイシャツ一枚になって仕事をされていて、雪雲が分からなかった。

池田 | そう。霧の中にいるようなものだから、外は全然、見えませんですよ。

古谷 | 1階に下りて行ったら雪だったという話は、僕は広島で伺いました。もう20年以上前です。ちょうどハウステンボスが竣工した頃ですが、広島で講演会がありまして、一緒にお話をさせていただいたんです。先生は「ワイシャツを腕まくりして仕事をしていたんだけど、下へ下りたら雪だった。その時に悟ったんです」とおっしゃった。相当ショックだったんですね(笑)。

池田 | もともと僕は船乗りだったから、朝起きると今日の雲は…とか、常に天候を気にして体で感じていたんです。ところが超高層ビルに入ってから、そういうことを感じなくなって、雪が降っていることも知らずに仕事をしていた。これはかなりショックなことだったんですよ。僕は自然に関してはものすごく感性があると思っていましたから、こういう中で仕事をしていたらたちまち鈍っちゃうと…。

古谷 | 船の上では、今日は大潮なのか小潮なのか、暦も全部分かっている。

池田 | そうです。例えば月齢は海の潮流ともものすごくかわりがありますから真剣に身に付けていたのに、人工環境の中で仕事をしているうちに自然に対する感性がものすごく鈍くなっていた。気を付けないと…。

上口 | そうですね。私たちも1階に下りて初めて雨が降っていることに気が付いて傘を取りに戻るものが、時々あります。

池田 | そういう感覚で人間が住まう環境を設計していたらまずいですよ。大間違いです。

古谷 | そうそう、この時から池田先生はにわかにおっしゃった。そのお話を聞いてみんな驚いたんですよ。日本設計は超高層の輝かしい経歴をお持ちなのに、急に「超高層はダメだ、窓を開けなさい」とおっしゃった。本当に驚きました。でもやっぱり人間には、自然を身近に感じられるところが必要なんですよ。

池田 | 絶対に必要ですね。

建設委員会の議事録を見ると、 本当のキーマンは…

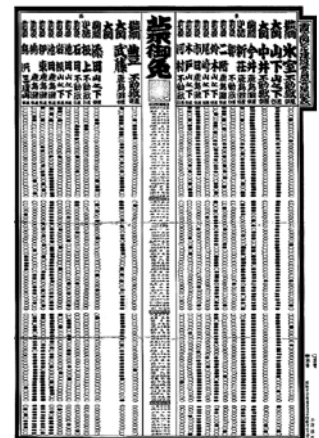
古谷 | 今回は上口さんが鼎談の資料を膨大にご用意して下さったんですが、これに全部目を通された？

上口 | はい。特に私が興味を持ったのは、建設委員会の議事録で、それはつぶさに読ませていただきました。

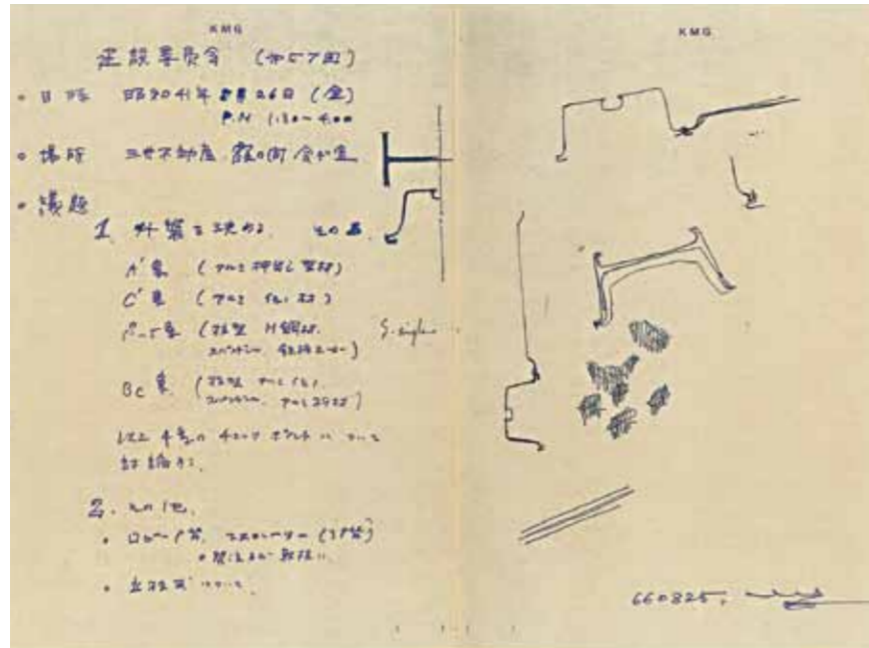
池田 | ああ、そうなの。108回やっただですよ。

上口 | そうですね、108回、毎週金曜日に霞の間というところでやられていた。読んでみますと、建設委員会のチームの方々の肉声のようなものが聞こえてくるんです。建設委員会の会長が氷室(捷爾)さん、この方が本当のキーマンと言いますか…。

池田 | そう、素晴らしい方なんです。氷室さんはほとんどジャーナリストティックには出て来ないけど、三井不



建設委員会メンバー全員の出欠表【所蔵：三井不動産】
竣工1年後、大相撲の星取表にならって作成されたもの。108回のうち、郭茂林氏の欠席は1回のみで、委員会における主導的役割を物語っている【解説：上口泰位】



建設委員会の議事録【所蔵：三井不動産】
通算108回開催され、その第57回目
(1966年8月26日)のアジェンダに描か
れた池田武邦氏のスケッチ。柱型をアル
キャスト、H鋼で検討している時のもの
と思われる【解説：上口泰位】

不動産の副社長なんです。あまり表だつたところには出
て来られないし、ご自身もあまり好きではなかった。
静かな方だね、それでいてどんなつまらない意見でも
丁寧に聞かれるんです。氷室さんがいらしたから、皆
さんは自由に発言できたんです。氷室さんがいなかっ
たら、ここまでできなかったと思います。僕の尊敬する
第一の人です。

上口 | しかも懐が深い方で、建設委員会では本当にい
ろんな意見が出ていたんですが、氷室さんはそれをす
ぐには否定しないで…。

池田 | そうそう絶対、否定なさらぬ。

上口 | 諦めないでもう少し考えてみようとか、視野を
広くして、じっくり皆さんに検討させるんです。それか
ら、いろんな外部タレントを呼んで、勉強会もしていま
した。例えば東大の小木曾(定彰)先生に形態論を講
義してもらおうとか、外部の意見を積極的に取り入れよ
うとしていました。小木曾先生の形態論では、ポリウ
ームがどう見えるかという講義をされています。同じポ
リウームでもこっちの方がすっきり見えるとか、“サン
マイにオロス”とか。平面と妻面はデザインを変えた方
がポリウーム感が消えるとか…。その時に“視抵抗”と
いう言葉が使われていますが、“視覚の抵抗を減らす”
という考え方が、外装デザインの根底に流れていまし
た。それから“サンマイにオロス”という話ですが、実
際にはセンターコアですから3枚じゃないんですが、妻
側に避難バルコニーがありますね。小木曾先生の「バ
ルコニーを付けたらどうか」という案は、ここで出され
たんです。避難バルコニーは当然、面積が減りますか
ら、三井不動産は反対なされた。だけど安全性という
意味ではすごく有効ですし、ポリウーム分割におい
ても効果的だった。そういうことも書いてあるんです。
それからアルキャストの外装モックアップの写真【11】
なども議事録に付いているんですよ。

池田 | そうそう、そうだったね。

古谷 | へえ、最終判断をですか？

上口 | 要するにアルキャストに対する懸念はどうして
も残る…。しかし、常務会としては「これだけ長い間、
検討してきた建設委員会を尊重する」と、そういう判断
で氷室さんに一任された。氷室さんは「私としてはアル
キャストでやりたいけれども、やはりそういう懸念が
常務会と長く勉強された建設委員会の一部の方々にも
ある以上、踏み切れない」、そういうプロセスで今の
形、アルミパネルカーテンウォールになったんです。
古谷 | どういうアイデアでも一回俎上に載せて、皆さ
んで多角的に検討し、検証をして一段階ずつ上がって
いく…。

上口 | そうですね。それと氷室さんは建設委員会
ではいつも、「大都市における人間性の回復」とおっ
しゃってまして、議事録をずっと通して読み解いてい

池田 | アルミのキャストはモックアップもつくったね。

上口 | そうです、アルキャスト。議事録を見ますと、柱

型がありまして、その袖にスパンドレルパネルがつなが
るようにして、ひとつのユニットをつくる構成となっ
ています。それ以前には、柱型をスチールやコルテン鋼
で、スパンドレルをホーロー鉄板で…などと、実にいろ
んな検討をされていたことがわかります。それから、コ
ストで何かを決めようと思すと、「それは違うんじゃない
か。コストの差をカバーできるものはデザインだから、
良いデザインを考えよう」…、そういうスタンスなん
です。

古谷 | そういうことも全部、この議事録に記録されて
いるんですか？

上口 | そう、書いてあるんです。僕がすごく興味を
持ったのは、外装デザインのプロセスです。初めて建
つ超高層ビルファサードの風合いは軽々しいものでは
なく、堂々としたものであるべきだという理由で、最
初はコルテン鋼で計画されていたんです。当時、建
設委員会の何人かの方がSOMが設計したシカゴのシ
ビックセンターを見ていらして「コルテン鋼は非常に風
合いがある素材だ」という話になりまして、全面コル
テン鋼、柱型だけコルテン鋼…とか、いろんな検討をす
るんです。コルテン鋼はもちろん錆びますから、曝露
試験もやっています。ピロティの形が決まっていま
したから当然、足元を人が通ることも分かっている「錆が
安定するまではずっとテナントさんに説明し、言い訳を
しなきゃいけない。それが不動産屋としてはちょっと
…」と、錆の問題のためにネグられていくんです。そ
して、アルキャストはそのまま裸で使うのか塗装する
のか、サッシはアルミにするのか…、そういう外装の計
画について、延々と2年間くらい検討しているんです。
それもツルピカじゃなくて少し粗面が良い…と、池田さ
んもおっしゃってましたし、氷室さんも同じ考えでし
た。そして最終的に建設委員会としてはアルキャスト
でやりたいということで、三井不動産の常務会にかけ
たんです。ところが常務会では、キャストは材料的に
ピンホールや製品精度、製作管理の問題があって、材
質に対する不信感が拭えなかった…と、結果としては
氷室さんに一任されたんです。

池田 | そうそう、そうだったね。

古谷 | へえ、最終判断をですか？

上口 | 要するにアルキャストに対する懸念はどうして
も残る…。しかし、常務会としては「これだけ長い間、
検討してきた建設委員会を尊重する」と、そういう判断
で氷室さんに一任された。氷室さんは「私としてはアル
キャストでやりたいけれども、やはりそういう懸念が
常務会と長く勉強された建設委員会の一部の方々にも
ある以上、踏み切れない」、そういうプロセスで今の
形、アルミパネルカーテンウォールになったんです。
古谷 | どういうアイデアでも一回俎上に載せて、皆さ
んで多角的に検討し、検証をして一段階ずつ上がって
いく…。

上口 | そうですね。それと氷室さんは建設委員会
ではいつも、「大都市における人間性の回復」とおっ
しゃってまして、議事録をずっと通して読み解いてい

池田 | それだけは残しておいたんです。

上口 | それがそのまま実現したんです。その先見性

きますと、ハンドメイドなものに対する執着や材料の選
択に対して、人間味があるといいますか、肌合いのあ
るものを選択していこう、そういう姿勢が随所に見られ
るんです。外装をアルキャストで追求していた背景も
そこにあったと思います。

古谷 | 氷室さんはお歳回りはお幾つくらいの方でした
か？

池田 | 僕より30歳くらい上だったと思いますが…。

古谷 | そうでしたか。じゃあその当時、かなりのご年
配でいらしたんですね。

池田 | そうですね。しかしあの方がいなくなったら、こ
うはできなかった。

上口 | いろんなものを受け入れる懐の深さのお話は
しましたが、例えば、否定されたアルキャストのファ
サードは、やはり捨て難い思いがあったようで、ロビー
の天井照明器具に残っているんです。それともう
一つ手すりを支える支柱、これも鋳物なんです。鋳物
を検討した名残というか記念が残っている。先日、当
時、山下寿郎設計事務所の新人で霞が関ビルの設計
を担当された阿部彰さんにそのお話を伺う機会があり
ましたが、氷室さんはやはりそうおっしゃっていたそ
うです。

池田 | そうだったんだね。

上口 | もう一つ、13階の機械室のガラリはコルテン
鋼で出来ているんです。機械室だったら錆が出ても
影響がないということですかね。ただ、こちらは度重
なる改修工事で塗装されて、もとの姿は残っていない
そうです。でもやっぱり、当時、検討していた人たちに
対する配慮のようなものを感じますね。

古谷 | 3年前の『新建築』に「超高層への挑戦から
50年」というインタビュー記事【4】が載っていますが、
氷室さんが最後の建設委員会の時にメンバー全員に
「『このビルは自分が設計したと言っていいですよ』と
おっしゃった」。これが「とても印象的」だったと書い
てありましたね。

上口 | そうですね。非常に印象的でしたね。

全体街区については 将来を見据えた計画が

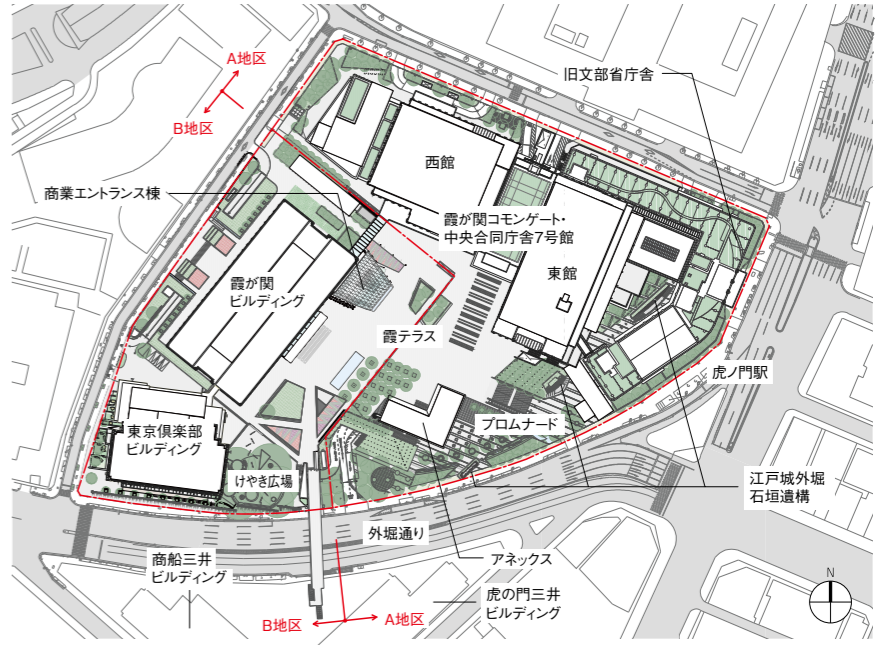
池田 | リニューアルは非常によく出来たね。びっくり
しました。久しぶりに行ったんです。あれは本来の超
高層の姿をちゃんと考えてやっているね。

古谷 | 先日、ご案内して下さったとか…。

上口 | そうです。その当時、全体街区については、遺
言ではないんですが、特定街区指定理由の中に将来
を見据えた計画を示唆する文章が1文入っていました。
「将来、官衙地区の再整備に伴い、全面的に建て直し
の必要が生じた場合は、文部省を含めた大街区とし
て、霞が関ビルを既存のものとして含む、総合計画へ
と発展させる」というものです。

池田 | それだけは残しておいたんです。

上口 | それがそのまま実現したんです。その先見性



はずごいんですね。

古谷 | つまり、ちゃんと遺言を守った…。もともとこ
こは霞が関三丁目南地区になりまして、中央官衙地区
と商業ビジネス街が共存している。全く主体の異なる
2つの事業、A地区とB地区に分かれているんです。
官庁施設を建て替えて霞が関コモンゲート・中央
合同庁舎7号館を建設するA地区、霞が関ビル低層部
をリニューアルして東京倶楽部ビルを建て替えるB地
区。この官民2街区が立場を越えて協力し、21世紀
を先導するまちづくりをする。そういう目的で「霞が
関三丁目南地区まちづくり協議会」が設置されるん
です。私も途中から委員に入っていました。要するに文
部省、会計検査院を建て替える話になっていましたか
ら、高層化するPFIの前に、関係者が集まって協議会
をつくったわけです。その時にせつかくの機会だから
高層化に当たっては、両方で困っている中の広場を明
るく整備すべきだという話になりまして、それが霞テラ
スになるんです。そばにケヤキが植えてあるもとの
の庭があるんですが、その雰囲気を最大限に感じられ
るようにしたい。それから、外堀通りが蛤型というか、
ちょっとカーブした良い形になっていて、その沿道
を辿って歩けるような雰囲気を作りましょう。そうい
うことを話したんです。もとは外堀通りは、向かいに
虎の門三井ビルと商船三井の建物がありまして…。

上口 | 今、広場に立つと虎の門三井ビルも商船三井も
広場の一部に見えるんです。先ほど、西澤先生に苦言
を呈された【9】2階レベルの広場の問題ですが、今と
なるとは逆に、そのおかげで車道が見えなくて、広場
の広がり商船三井までつながっているかのように見え
るんです。

古谷 | それは協議会でも議論したんです。もとの石
垣とか昔の空間性を少し彷彿とできるのがいいんじ
ゃないかと。

池田 | 本来の超高層の足元空間の意味がはつきりして
きたね。

霞が関三丁目南地区全体図【提供：日本設計】
人工地盤の霞テラスが蛤型に大きく開かれ、
虎ノ門駅と横断歩道橋からのアプローチが
改善され、霞が関ビルディングの正面性を感
じることができるようになった。官民一体と
なって、市民に広く開放された都市広場とし
て霞テラスに結実した【解説：上口泰位】



真鍮鋳物のアッパー照明器具



真鍮鋳物の支柱



日本設計の会議室で談笑する池田氏(中)、上口氏(右)と古谷氏(左)

デザインプロポーザルが実施されることになりまして、当然、われわれも応募して幸いにも選ばれたわけです。ただランドスケープデザインだけはトーマス・バルズレー氏が選定されて、彼と一緒にやりました。

古谷 | 全体的な配置としては？

上口 | もととの霞が関ビル広場は中央広場とケヤキ広場だったんですが、街区の再編計画で倍以上の面積7,800㎡に拡張されました。そこでA地区側の計画で外堀通り沿いのプロムナードから大階段で直接2階の霞テラスに行けるようにしたんです。これによって今まで建物に隠れていた奥まった広場が、まちに大きく開かれた段丘状の広場になりました。また、樹種やベンチ、床の石材を揃えてもらうなど、A地区側に協力していただいたおかげで広場の一体感が生まれました。それから先ほども出ましたが、地下鉄虎ノ門駅から真っすぐエスカレータで2階が上がって、広場から霞が関ビルの正面にアプローチできるようになったことも大きかったですね。

古谷 | 新しい都市広場が再生された。

上口 | そうです。この広場には幾つかのアクセスの軸線がありまして、その軸線を強調するはっきりとしたデザインにして、そこに照明ポールとかジオメトリックガーデン、いわゆる幾何学的なパターンを持った花壇などを配置して、アクセスしながらも気持ち良い空間をつくっていく。

池田 | そのデザイナーはアメリカの造園家？

上口 | はい、アメリカのランドスケープデザイナーです。我々は軸線に沿って樹木を植えて日陰をつくる提案をしたのですが、彼はなるべく樹木を植えない主義でしたから、広場に存在するさまざまな軸線で構成されたジオメトリックガーデン、楔形の光壁ライトウエッジ、照明ポールのライトワンドなど、視覚的に動線を明確にする仕掛けをつくって、人々が広場に引き込まれるように構成したんです。この新しいアプローチに応じて、霞が関ビルの正面玄関の構えをつくり、加えて1階店舗ゾーンへの導入口として、商業の回遊性を促す商業エントランス棟を増築しました。これによって霞が関ビルの低層部の新しい顔をつくらうと思ったんです。特に増築した商業エントラン棟は、もともと中央広場には1階の商業エリアに引き込む吹き抜けの螺旋階段があったのですが、ほぼその位置で広場に顔を出すようにデザインしました。周辺への視覚的な圧迫感を避けてアーチ状の形態として、ガラスを通して内部の賑わいがあふれるようなアトリウムになっています。

古谷 | 確かに新しい顔になりましたね。

上口 | 建設委員会の議事録を読みますと、当時の人たちは都市をつくっていくことに対して、非常に高いビジョンを持っておられたことが分かります。それが結局、今の霞テラスに結実したことになるんですね。都市が長生きするためには、当たり前のことですが、最初に良いものをつくっておくことがとても大事だということがよく分かります。

古谷 | さっきの遺言みたいに、先を見るということでは

ね。今とりあえずこの場が良ければ…ということだけではない。

上口 | 何十年後かの先を見越して計画をしていくことが、本来の都市計画ではないか。それがよく分かりましたね。

古谷 | 建築家や都市計画家がそう考えるだけじゃなくて、一棟一棟建てていく時にそういう意識を持っていないといけませんか。

池田 | そうですね。

古谷 | いずれにしても、この建設委員会の議事録は克明にしかも簡潔にまとめられていて、この記録を取った人もすごいですね。

上口 | 最初、議事録を書かれた人が郭さんに「こんな長々と書くな」と怒られて、それから簡潔に書くようになったそうです。

古谷 | 発言者と発言の要旨が、本当によくまとめられている。これは日本設計では、誰でも閲覧できるんですか？

上口 | 今は倉庫に眠っていますが、誰でも見ることができます。

古谷 | この記録は日本社会にとって重要なものですか、ぜひ何らかのかたちで閲覧可能になるとうれいすね。

池田 | 今は超高層が当たり前だけど、霞が関ビルは日本で初めての超高層だし、その記録だからね。ちゃんとした方が良いと思う。

古谷 | 本当にそうですね。

本日は有意義で楽しい、そして示唆に富んだお話をありがとうございました。

[収録：2015年6月12日]

いけだ・たけくに——建築家/1924年生まれ。1949年、東京大学第一工学部建築学科卒業。山下寿郎建築設計事務所勤務。1967年、日本設計事務所(現・日本設計)設立、取締役就任。1976年、日本設計代表取締役社長。1993年、同社代表取締役会長。1997年、同社名誉会長。主な作品：京王プラザホテル[1971]、新宿三井ビル[1974]、筑波研究学園都市工業技術院団地[1980]、長崎オランダ村[1980]、東京都立大学新キャンパス[1991]、長崎オランダ村ハウステンボス[1992]など。

かみぐち・やすのり——日本設計建築設計群専任部長/1952年生まれ。1977年、東京工業大学工学部社会工学科卒業。1979年、同大学大学院総合理工学研究科社会開発工学専攻修士課程修了。アール・アイ・エー建築総合研究所を経て、1985年、日本設計事務所(現・日本設計)入社。2006年、同社プリンシパルデザイナー。2012年より現職。主な担当作品：新宿アイランド[1995]、茨城県市町村会館[1999]、松下電工東京本社ビル(現・パナソニック東京汐留ビル)[2003]、日産先進技術開発センター[2007]、三井ガーデンホテル四谷[2008]、ホテルユニゾ渋谷外装デザイン[2010]、上本町YUFURA大阪新歌舞伎座外装デザイン[2010]など。

ふるや・のぶあき——建築家・早稲田大学教授/1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。1980年、同大学大学院博士前期課程修了。1986年から1年間、文化庁芸術家在外研修員としてマリオ・ボッタ事務所(スイス)に在籍。近畿大学助教授を経て、1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。1997年より現職。主な作品：アンパンマンミュージアム[1996]、詩とメルヘン絵本館[1998]、早稲田大学會津八一記念博物館[1998]、ZIG HOUSE/ZAG HOUSE [2001]、近藤内科病院[2002]、神流町中里合同庁舎[2003]、茅野市民館[2005]、高崎市立桜山小学校[2009]、小布施町立図書館「まちとしよテラス」[2009]、早稲田大学理工カフェ[2009]、鶯庵[2009]、T博士の家[2010]、実践学園自由学習館[2011]、熊本市医師会館[2011]、中河原保育園[2012]、ルビニア滋賀工場[2012]など。

鼎談後記——古谷誠章 建築が都市につながる組織の一部となり、 人々の生活空間を都市の上空に生み出した

映画となった「超高層のあけぼの」、日本が戦後の復興期から、高度成長期へと足を踏み入れようとする、まさにその象徴のような出来事だった。本誌第1号で取り上げた東京タワー[1958]も、ある意味では復興を象徴し国民を大いに鼓舞したが、それでも一般のわれわれにとっては、そこから見下ろす東京の景観は非日常の世界。この事業の立役者である郭茂林さんが「東京タワーからの眺めは観光光的であるが、霞が関ビルはオフィスビルとして生活的である」と言ったように、同じ地上150mでも、一度上って見ると毎日見るのとでは風景が違う。日本の地震を克服して都市に初めて新しい居住空間を獲得したのだ。僕自身の体験で言えば、京王プラザホテルを始めとするその後の西新宿の超高層の方が、通っていた都立青山高校の廊下から工事の進捗がよく見えたこともあって、視覚的により鮮烈に記憶に残っているのだが、それでもその先鞭をつけた霞が関ビルは当時別格の印象があった。それからすでに半世紀がたとうとして、海軍時代の池田さんが駆逐艦「矢矧」に乗艦し、火の海から命からがらに生還した体験は、別の機会につぶさに伺ったことがある。その凄惨な光景は聞く者の想像を絶するものであるが、皮膚に染み付くようなその記憶が、今日に至るまで池田さんの空間の感覚に結び付いているのが印象的だった。そうして霞が関ビルが生まれ、日本設計が生まれ、新宿三井ビルが建ち、そして再び超高層を去った池田さんがいる。一つひとつがドラマのようだ。上口さんらの手によって再生された霞テラスの様子を、「あれは良くなったね」と目を細めている池田さんの表情が良かった。記憶は継承されて、新しい世代がそれをより良いものへと手を加えていく、そうしたプロセスはすでに一個のビルというより、都市の生成そのものだ。おふたりの話を伺っていて、超高層は生活の空間を都市の高みに持ち上げただけでなく、建築を都市組織の分かち難い部分として、建築そのものを“都市化”したのだなと思えてきた。

[取材協力]霞が関ビルディング/虎の門三井ビルディング/三井不動産



竣工当時の広場：特定街区によって整備され、日本初の公開空地となった【所蔵：三井不動産】

ガラス・アーティスト、 マッシモ・ノルディオさんの巻

Massimo Nordio

中村好文：文、イラスト、写真
Yoshifumi Nakamura

ガラス・アーティスト

30代の前半から、好んでイタリアを旅するようになりました。とりわけ10年ほど前からはヴェネツィアに魅せられて、しかるべき渡航理由と時間を捻出しては繰り返してこの街を訪れています。3年前の晩秋は友人のファッション・デザイナーの皆川明さんや、木工作家の三谷龍二さんたちと一緒に東欧を旅しましたが、「東欧に入る前に、3、4日、ヴェネツィアで遊んでいこう」ということになり、連日、高潮が続き、文字通り「水の都」と化したヴェネツィアで過ごしました。皆川さんの旧知の友人で著名なガラス・アーティストのマッシモ・ノルディオさんに初めてお会いしたのはこのときです。

その日の午後は、生粋のヴェネツィアっ子的マッシモさんの行きつけのカフェやバーカロ（立ち呑みの居酒屋）を数軒ハシゴした後、迷路のような小径を縫うように辿って細密なヴェネツィア・グラスを扱う店などにも案内してもらいました。

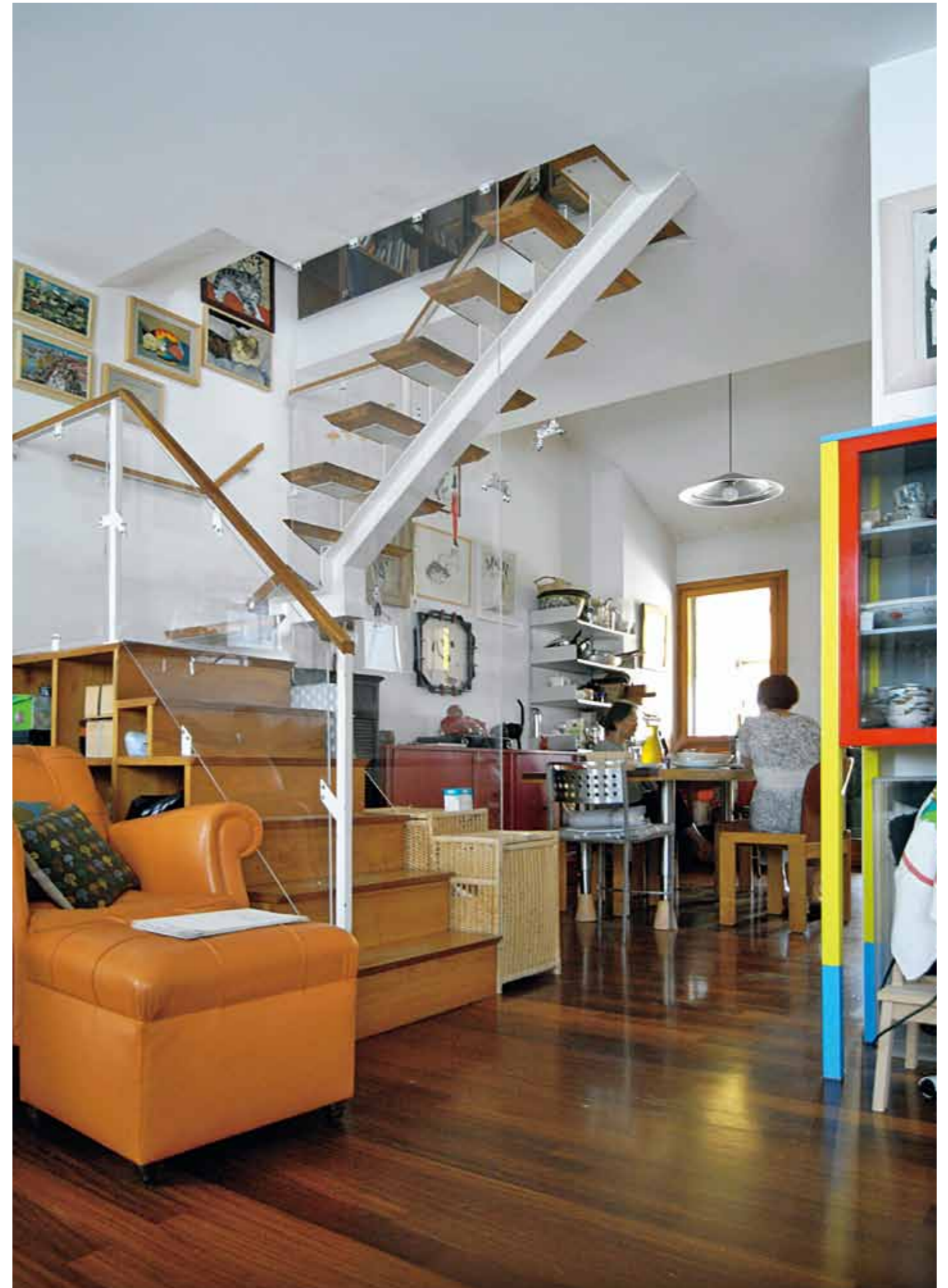
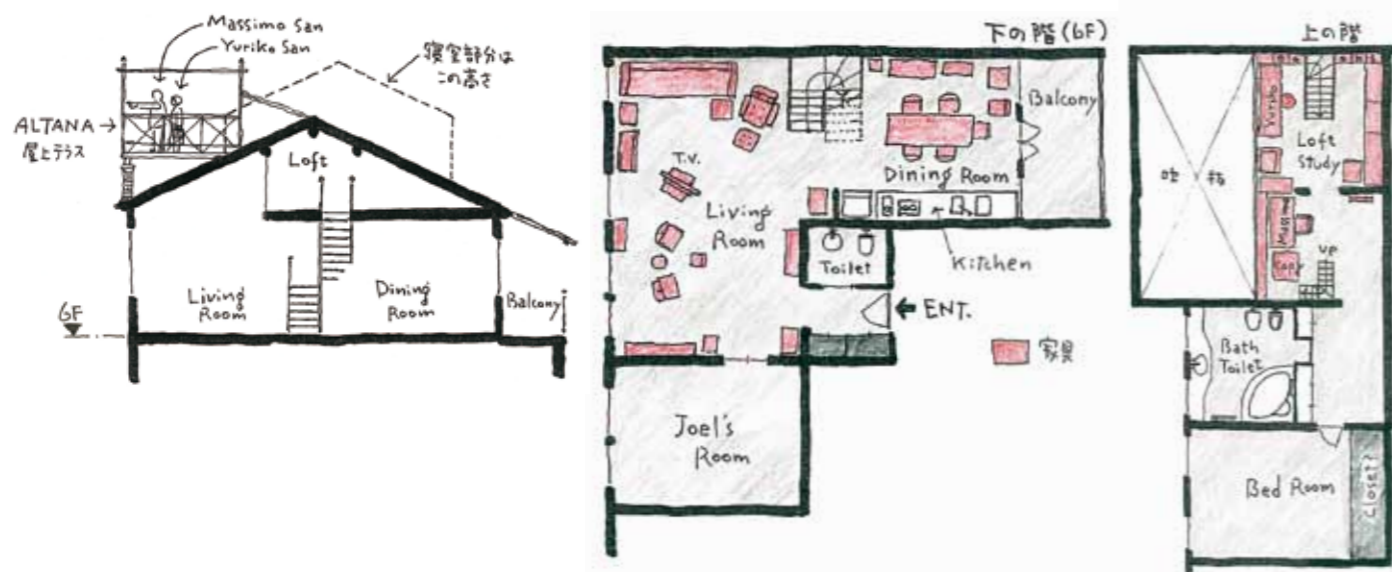
ガッシリした体軀、穏やかな表情に秘めた強い意志、頭の回転

の速さを感じさせる話しぶり、悪戯っ子のようなユーモアのセンス…、どこかアメリカの往年の性格俳優、アーネスト・ボークナインを彷彿とさせるガラス・アーティスト、それがマッシモ・ノルディオさんでした。

ムラーノ島へ

ところで、突然ですが、今年(2015年)の晩春から夏にかけて、私は、永年の夢だった「ヴェネツィア暮らし」をするため、2ヵ月あまりヴェネツィアに滞在しました。3年前、マッシモ夫人のゆりこさんは、たまたま日本に里帰り中でお会いできませんでしたが、今回はお目にかかって一緒に食事したり、街歩きをしたり、お宅にお邪魔して食事をご馳走になったりなど、ひとり息子のジョエルくんを交え、何度となくお目にかかって親しくさせていただきました。

あるときはマッシモ夫妻に連れられてヴェネツィアン・グラスで有名なムラーノ島のガラス工場に出かけました。ムラーノ島はガラス・アーティストであるマッシモさんの縄張り、マッシモさんの創



居間からダイニングキッチン方向を見る。段板が宙に浮いているような軽やかな階段。その階段を挟んだ天井の低い部分がロフト

案による数々のガラス作品は、この島にあるガラス工場で制作されています。そういう意味ではマッシモさんにとっては島そのものが創作の工房と言えるかも知れません。

ムラーノ島にはモザイクで有名なサンタ・マリア・エ・ドナート教会があり、私はその教会の円蓋を飾る聖母マリアのモザイクを観るために何度もこの島を訪れていますが、ガラスの工房の内部を実際に見学するのは今回が初めてでした。

見学日は7月13日。朝から強烈な真夏の陽差しが照りつける炎暑に灼かれ、島のなかを巡り歩いて3ヵ所のガラス工房を訪ねました。海風の吹く屋外を歩いていても汗だくになるのに、ガラスを溶かす溶解炉が何台も稼働している工房の内部は^{るつぽ}坩堝そのもの。働いているガラス職人たちは水を浴びたような汗をかいて働いていました。この日のマッシモさんのムラーノ行きの目的は、新作のワイングラスとゴブレット制作のために馴染みの工房の親方と打ち合わせすること。ガラス工房ではガラス作品を親方に1人ないし2人の弟子が付いて阿吽の呼吸で制作していく様子を興味深く見学しました。また、マッシモさんがそのあたりにある台の上にチョークで手早くスケッチして親方と技術的な相談をしているところを、「ああ、自分が家具職人とやっていることと同じだなあ」と思いながら眺めたりしました。

「そう、そう、そうだったんだ！」

じつは、今回の長期滞在が実現することになったときから、ヴェネツィアにいる間に運良くアーティストに巡り会えたら、この『LIXIL eye』の連載ページで取り上げたいと虫のいいことを考えていました。とは言っても、生来のんきな性格の上、ものごとを計画的に進めるタイプではないので、友人知人に声をかけ、どなたか「しかるべきアーティストを紹介してもらおう」というような下準備(根回し?)をしていたわけではありません。あくまで運まかせだったわけです。

ヴェネツィアに住んでいるアーティストの住まいぶり、暮らしぶりには大いに興味がありましたので、知り合ったばかりのゆりこさんに、やや唐突ではありましたがダメモトで取材をお願いしました。そして、幸いにも快諾していただき、めでたく今回の取材が実現できたのです。

そのマッシモさんのスタジオと住まいは、サンマルコ広場の北にあ



夕陽に染まるアルターナ(屋上テラス)でマッシモ夫妻とスリーショット。右手にフランチェスコ・デ・ラ・ヴィーニヤの塔が見え、ちょうどこの反対方向にサンマルコの塔が見える

るフォルモーサ広場から徒歩5分の集合住宅にあります。1階にマッシモさんのスタジオ、最上階がマッシモさん一家の住まいです。最初に作品展示室を兼ねたようなスタジオでマッシモさんの多才ぶりが遺憾なく発揮された作品を見せてもらった後、6階まで階段を上りました。

階段を昇りきって、ひと息つき、呼吸を鎮めてから玄関ドアを開けて室内に入ったとたん、予想もしていなかった天井の高い空間が待ち受けていました。この住まいは吹き抜けを持つメゾネットだったのです。室内は白い壁、白い天井、焦げ茶色のフローリングのごくシンプルなトーン。壁には「無数の額」と表現したいほど沢山の額が、色の組み合わせも楽しげに飾られ、壁を背にして置かれたいくつものガラス棚にはマッシモさん自身の作品をはじめ多くのガラス作品や日本の古い陶磁器などが飾られていました。さて、この空間に漂う朗らかな空気感をどう表現したものでしょう。そう、「祝祭的な雰囲気」と書いたら少しはその感じが伝わるでしょうか。たとえば私が予備知識なしにいきなりこの部屋に入ってきて、ここが「アーティスト夫妻の住まいだ」と直覚するにちがいがありません。室内を見回しているこのアーティストがどんなことに興味を持ち、どんなモノから影響を受けたり、学んだりしてきたか、その輪郭が次第に浮かび上がってくるような気がします。室内に飾られている珍しいモノたちは単なるコレクションではなく、それがすべてアーティストの教材であり、血肉になっていることが理解できるのです。

ムラーノ島のガラス工房でチョークでサラサラとスケッチした様子を見ていた私が、「マッシモさんは美術学校の出身ですか?」と訊ねると、こんな応えが返ってきました。

マッシモさんは子供のころから絵や工作が好きで、美術系か理数系の学校に進みたいと思っていたそうですが、母親の意向でより実務的な商業高校(経理学校?)に進んだのだそうです。ただ、芸術や工芸への感心はやみがたく、高校卒業後にアカデミア美術学校の先生たちと知り合い、次第にこの世界に親しむようになったといいます。その後、映画関係の仕事に就き、監督の助手をしていました。1960年代から写真を撮るようになり、カメラマンとして、ガラス作品の写真を撮るうちに、80年代から自分でもガラス制作にかかわり(といってもガラスを吹いたりする職人としてではなく、ディレクターやデザイナーとして)、気がつくとガラス・アーティストになっていたとのこと。

1900-1950年ぐらいまでの古いヴェネツィアン・グラスを蒐集したり、売買したりするギャラリスト的な仕事もしていますし、ヴェネツィアのドアノブだけの写真集を出版したり、建築家カルロ・スカルパのデザインしたガラス作品の写真集の撮影をしたりなど、カメラマンとしての素晴らしい仕事もしています…と、ここまで話を聞いてもう一度室内を見回すと、飾られている多くのモノの意味合いが「そう、そう、そうだったんだ!」という具合にいちいち腑に落ちるのです。

アルターナ

さきほど、あっさり集合住宅と書きましたが、この建物は1400年代に建てられた建物だそうです。地盤のゆるい干潟の上に建てられた石造の建物が500年も、600年も現役で使われていることに、あらためて感心しないわけにはいきません。おそらく由緒のある建物だろうと思っていますと、すかさずマッシモさんが、以前は修道女たちが住んでいた建物で、21年前に改修する前は小部屋がズラリと並んでいた、と教えてくれました。改修するにあたって基本設計はマッシモさん自身がやり、実施設計と監理は幼なじみの建築家の友人に頼んだとのこと。ゆりこさんによれば、彼女が結婚して越してくるまでは、階段に手すりも付いていないような、まるで生活感のない、いわゆる「カッコいい、男の部屋」だったのだそうです。

そのゆりこさんもガラスのビーズを使った繊細な作品などを作るアクセサリー作家ですが、ゆりこさんの好みと生活者としての趣味の良さがはっきり感じられるのがダイニングキッチンです。皿立ての部分だけタイルが立ち上げてあるなど、きめ細かくデザインされていて、どことなく母性的な居心地の良さを感じられました。

「じゃあ、そろそろ上に…」

よく冷えたプロセッコ(ヴェネト地方の発泡ワイン)のビンとグラスを載せたお盆を持ったマッシモさんを先頭に、我々は(妻も一緒にお邪魔していました)まずロフト的な書斎と主寝室のある階に上がり、そこから屋根の上のバルコニーに上がりました。小津安二郎の「東京物語」に出てくる物干し台とそっくりな屋上テラスは「アルターナ」と呼ばれ、ヴェネツィア名物の建築装置です。狭い島に建物がひしめき合っているので庭を持つことが難しく、庭の代わりに屋上に上がることにしたと陣内秀信さんの本に書いてありました。

アルターナに出たとたん、思わず「うあ〜、気持ちいい」と歓声を上げました。

夏の夕暮れ、南西にはサンマルコの塔、北東にはフランチェスコ・デ・ラ・ヴィーニヤの塔を望み、手には細かく泡立つ冷たいプロセッコ。黄昏の空は群青色に変わり、やがてひとつ、ふたつと星が降きはじまりました。

なかむら・よしふみ——建築家/1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972-74年、宍道設計事務所。1976-80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。主な作品:三谷さんの家[1986]、REI HUT [2001]、伊丹十三記念館[2007]など。主な著書:『住宅巡礼』[新潮社/2000]、『住宅読本』[新潮社/2004]、『意中の建築 上・下』[新潮社/2005]、『Come on-a my house』[ラトルズ/2009]、『普通の住宅、普通の別荘』[TOTO出版/2010]、『建築家のすまいぶり』[エクステルジ/2013]など。

左一親方はほぼ座ったままの作業。弟子たちは作業に必要な道具を阿吽の呼吸で手渡ししたり、溶解炉と親方の間を行ったり来たり忙しく立ち働く | 右一工房で親方と打ち合わせするマッシモさん。サラサラと描いたスケッチでデザイン意図の説明をしながら親方と具体的な打ち合わせ



上—玄関を入ると出迎えてくれる室内の風景。壁にかけられた沢山の額、ガラス棚に飾られたガラス作品が室内に活気を与えている。座面の低い2つの椅子はカルロ・スカルパの息子トビア・スカルパのデザイン | 中—必要など必要のモノがおさまっている簡素な台所。壁に飾られたサルディニア島の窯細工のお盆が良いアクセントになっている | 下—ロフトスペース。階段は屋根の一番高い部分に昇ってくる。正面は造り付けの本棚。主寝室もこの階にあるが、そちらの屋根は高いので天井高は充分にある



道空間を活用した まちづくり

海外のまちを訪れると、屋外のカフェやレストランで楽しみに語り合い食事を楽しむシーンに出くわす。かつての日本でも茶屋の縁台がいわばオープンカフェだったわけだが、いつの間にかそうした風情は消えてしまった。まちを回遊し、ちょっと腰を下ろして会話を楽しむにはこうした施設は欠かせない。

これまで、イスやテーブルなどで道路を占有することは道路法において厳しく制限されていた。2011年の都市再生特別措置法の一部を改正する法律が施行され、まちの賑わい創出に資する施設であれば、一定の条件のもとで道路を利用することが許されることになった。それが道路占用許可の特例制度である。このことで、オープンカフェなどの食事施設や広告板、コミュニティサイクルポートなどの施設の設置が可能となり、道路空間を活用したまちづくりが各地で展開し始めている。

本特集では、新しい道路活用の事例を紹介しながら、まちづくりのヒントを探ってみたい。



新宿三丁目モア4番街のオープンカフェ：2012年11月、全国で初めての道路上の常設オープンカフェとして本格的にスタートした

【特記のない写真は、シラバラタク】

道空間の有効活用とまちの活性化 戦後の公物管理法からの大転換

中野恒明

Tsuneaki Nakano
芝浦工業大学システム理工学部教授・アプル総合計画事務所代表

常設化した 新宿三丁目モア4番街のオープンカフェ

今、各地で道路上のオープンカフェへの期待が渦巻いている。その背景には、まちなか再生や地域活性化、そのための官民連携によるエリアマネジメント、そして公共空間のプレイスメイキング(Placemaking=居場所づくり)やPPS(Project for Public Spaces)のための勉強会などが各地で目白押しとも

聞き及ぶ。それを象徴するのが路上のオープンカフェを条件付きながら可能とした2011年の都市再生特別措置法改正と言っても良いだろう。筆者はその適用第1号となった新宿三丁目モア4番街を含む新宿モア街の計画・設計(1986年-、事業主体:新宿駅前商店街振興組合)から社会実験(2003年-)の提案、そしてその後のフォローも行ってきた。また長年、各地の都市デザインプロジェクトの現場で公共オープンス



新宿三丁目モア4番街のオープンカフェ風景:幅員22m、延長100mの短い区間に固定店舗2カ所、可動式パラソル・イスで営業している

ペースの市民利用を試みてきた。その立場から改めて、本テーマについて考察してみたい。

欧米諸都市に定着したオープンカフェや公共空間のプレイスメイキング

ご存じのように、我が国の道路などの公共オープンスペースは長らく、その利用が極端に制限されてきた。その歴史は第二次世界大戦後の路上「闇市」撲滅のための「公物管理法」[1]の概念規定から始まる。その後、1960年代末の学生運動による路上の示威活動排除を目的とした道路交通法の厳格運用[2]の時代を経て、路上からは休憩場所などが消え、道路=通行空間という固定観念が定着する。地方部でもいつの間にか行商のおばさんや青空市などの姿は消え、残るは九州の博多の屋台、札幌の大通公園でのとうきび売りの姿など、例外扱いのみとなってしまった。

その固定観念ゆえか、パリなどを訪れた日本人観光客がシャンゼリゼ通りの歩道に展開するオープンカフェに驚きの声を発する。実は欧米諸国では公共空間における商行為はカフェに加え、花屋、果物屋、その他多種多様な店舗が認められ、道路管理者すなわち自治体には多大な占用使用料が入り、それは各種市民サービスなどの公共に還元される構図が出来上がっている。そしてこれらは通行障害にならないようあらかじめ設置位置が定められ、パレードなどの際は、撤去指示から数時間以内に移動できる仮設物であること、意匠や色彩制



札幌・大通公園:秋の風物詩として定着した、とうきび売りの店舗[写真:筆者]

限、地先店舗などの了解、清掃・片付け義務などが規定されている。そして路上のたまり空間の存在がストリートウォッチャー効果を生み、犯罪抑止や道行く人々の安心感をもたらすという考え方が定着している。それは1970年代以降の欧州諸都市の歩行者空間整備の普及と共に、北欧など屋外カフェの習慣のなかった地域でも続々と広まっていった経緯がある。

我が国における 近年のオープンカフェ

その流れが我が国にも浸透し、ここ10数年の間に雨後の筍のごとく、オープンカフェがイベントや社会実験のかたちではあるが各地で実施されてきた。初期の事例では横浜・鶴見のフーガショッピングモール、同・日本大通りのオープンカフェ、名古屋や広島、そして地方部でも同様の試みがなされてきた。近年では地域のエリアマネジメント団体が率先してその試みに参画している。本格実施は大阪の梅田北ヤード(うめきた)の計画的に配置された路上カフェ営業で、これは都市再生特別措置法の適用第2号案件であり、れっきとした常設カフェである。そして福岡、札幌、池袋、虎ノ門、横浜みなどみらい21地区などの事例もネット上に配信され、常設化への動きが加速されつつあることが分かる。

しかし、これらのカフェ常設化に向けて、数々の課題の克服が待ち構えているように思う。その理由は経営的側面、そして沿道既設店との競合問題ではないだろうか。と言うのは、新宿三丁目モア4番街の場合は、2年ごとの公募制だが、社会実験中の7年間、そして本格実施以降の2年間、そのカフェ営業は赤字の連続で、ようやく1年前に黒字に転換した。とは言ってもテイクアウトのクレープ販売が伸びたにすぎない。その経年赤字を補填し続けたのがイベントや広告塔収入で、本業は苦戦続きである。各地でカフェの老舗が閉店し、全国ネットのブランド店が定着する中で、路上カフェの成立基盤はあるのか。そして許



左-パリ・シャンゼリゼ通りのオープンカフェ風景[写真:筆者] | 右-デンマーク・コペンハーゲンのニューハウンのオープンカフェレストラン風景[写真:筆者]



梅田北ヤード・グランフロント大阪のオープンカフェ風景

可条件のカフェの客単価の低さなどの課題は少なくないはずである。似たような話は多くの実施地区で耳にする。その結果、自治体の道路占用料の減免特例を申請するのは当たり前の風潮となりつつある。またカフェ利用者の多くがテンポラリーな来街者で占められるなど、明らかに常連客が少ないのも課題で、そこが固定客の多い本場のオープンカフェとは大きく異なっているようだ。例えば、パリのまちは昼間人口より夜間人口が多く、大通りの背後地には高級な住宅街が存在する。それがオープンカフェを支え、来街者が加わり、交流が生まれる。公園や広場で定期的に開催さ

れるマルシェ(青空市場)も同様で、市民生活の中に定着しているのである。また、アメリカの公共空間におけるプレイスメイキングの可動イスの管理はBID(ビジネス改良地区)団体が行う仕組みで、その運営資金の調達は条例に基づき自治体が行っている。それに似た制度が大阪市のBID条例に他ならないが、それをカフェ営業の補填に使えるかについては、さまざまな議論がありそうだ。かくして我が国の常設オープンカフェはどこに向かうのか、期待と同時に不安も残る。それは今後の我が国の都市計画の目指すべき方向に大きく依存することは間違いない。

[1]公物管理法
道路法、公園法、河川法、港湾法、海岸法などの公共空間の管理にかかる法を指す総称。水辺の河川、港湾はそれぞれ2004年、2006年より解禁
[2]新宿駅西口地下公共通路での示威活動を排除するために、道路は通行の用に供する場所として位置付けられ、以来これらに障害する行為が取り締まりの対象となった。筆者も学生時代排除された経験をも有する

なかの・つねあき——芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科教授・アプル総合計画事務所代表/1951年生まれ。1974年、東京大学工学部都市工学科卒業。横総合計画事務所を経て、1984年、アプル総合計画事務所設立。2005年、芝浦工業大学教授。東京大学まちづくり大学院・東京芸術大学非常勤講師を兼務。専門は都市デザイン。主な仕事:皇居周辺道路景観整備[1988-96]、門司港地区まちづくり[1989-2014]、那覇国際通り商店街支援[1998-2004]、新潟駅南口駅前広場整備[2003-14]、葛飾柴又帝釈天参道周辺街並みデザイナー派遣[2004-06]、横浜みなどみらい21新港地区景観計画[2007-09]など。主な著書:『建築・まちなみ景観の創造』[共著、技報堂出版/1994]、『まちづくりがわかる本—浦安のまちを読む』[共著、彰国社/1999]、『日本の都市環境デザイン1・2・3』[共著、建築資料研究社/2002、2003]、『都市環境デザインのすすめ—人間中心の都市・まちづくりへ』[芸芸出版社/2012]など。

ニューヨーク市における公共空間再編の取り組み 都市戦略としての先進的な賑わい空間づくり

中島直人
Naoto Nakajima
東京大学都市デザイン研究室准教授

都市戦略としての 公共空間再編とは何か？

2015年7月中旬、ニューヨーク市都市計画局でチーフアーバンデザイナーを務めるジェフリー・シューメーカー氏が来日し、「公共空間から始まる都市再生」というテーマで計9回もの講演を行った。日本の実務家や研究者の間での公共空間再編への関心の高まりが彼の講演会を実現させたに違いないが、一方で、この講演会は公共空間がもたらす効果を深く理解しているニューヨーク市自体の都市戦略の一環のようにも思えた。よくデザインされたスライドに映し出される生き生きとした公共空間の姿を目にして、参加者はニューヨークという都市についてのポジティブなイメージを更に膨らませることになっただろう。ニューヨークという都市のブランディングの中核を担っている都市戦略としての公共空間再編の鍵は、以下の3点である。

①ブルームバーグ前市長の強いリーダーシップ：2002年以降のニューヨークの公共空間再編は、2013年までの3期12年間にわたって市長を務めたマイケル・ブルームバーグ前市長のリーダーシップによって進められた。世界有数の金融メディア企業の創業者でもある前市長の市政運営は「市長にCEOとしての役割を与え、市政府は会社、望ましいビジネスや居住者はクライアントやカスタマー、そして都市自体を商品として見立てる」ことを基本とした。市が提供する商品は、とりわけ「アーバンイズムそのもの、つまり都市文化、多様性、密度、コスモポリタニズムがセリング・ポイント」であった。

②市政における高度な専門家の登用：ニューヨーク市は、良質な商品を提供するため、市政のさまざまなレベルのポジションに民間企業やNPO、大学から専門人材を積極的に登用し、専門家に新しい機会を提供した。専門家の技術、能力を信頼し、能力主義とプロ意識を徹底させることで、技術力が高く、高学歴で、倫理観の強い専門家を市政に引き付けた。そして、彼・彼女らが、「最高の商品」を提供する具体的な力となったのである。

③分野統合型の総合ビジョン：しかし、いかに優れた人材を採用したとしても、ばらばらに仕事をしていたアウトプットの質の向上はそこまで期待できない。2007年、2期目に入ったブルームバーグ市長は、「よりグリーンで、より素敵なニューヨーク」を目標に掲げた都市改造の長期的ビジョンとその実現に向けた具体的政策を束ねた総合計画「PlaNYC」を策定した。各分野の具体的な数字を伴う目標設定と、その目標を実現するための具体的な政策で構成されたプランである。公共空間と関係するオープンスペース部門については、「すべてのニューヨーカーに徒歩10分以内に公園がある暮らしを提供する」という明確な目標が設定され、その実現手段として、後述する広場創出と関係する施策が書き込まれた。ニューヨーク市は毎年、目標到達度を評価したプログレス・レポートを発行し、進捗を管理することで、「PlaNYC」の実行力を担保した。

以上、個々の公共空間を見ていく前にこうしたニューヨークの都市戦略を確認したのは、日本の都市に一番欠けているのが、都市戦略としての公共空間再編だからである。

公共空間は どのようにして再編されたのか？

もちろん、ブルームバーグ市政以前からニューヨーク市には魅力的な都市空間が多数あった。例えば、五番街に面して建つ公共図書館の裏手にあるプライアントパークは、ニューヨークで一番の賑わいを見せる公園である。ピストロチェア（ニューヨークの公共空間のシンボルとなっている）を自分のお気に入りの場所に移動させ、1人、2人、あるいはグループで、それぞれ思い思いにくつろぎ、楽しんでいる。公園内にはレストランやキオスクがある。夕方には真ん中の広場で野外映画が上映されたり、ジャズの演奏会が開かれたりする。この公園を管理運営しているのは、公園周囲の地権者らの負担金をもとに地域を経営する組織・BID（ビジネス改良地区）のひとつ、プライアントパーク・コーポレーションである。

この10年の間にニューヨークで起こった都市空間の変化は、一言で言えば、都市内で気持ち良く座ってくつろげる場所の増加である。それらの場所の多くは、BIDを主とする民間組織がマネジメントを行っている。つまり、ニューヨーク中にプライアントパーク的な風景が広がり、豊かな戸外生活が生み出されたのである。この変化は、主に工業都市時代の産業・交通インフラの公園化と、自動車のための道路空間の人間のための広場化の2つによって達成された。

①工業都市時代のインフラのコンバージョン：1930年代に使用開始され、1960年代には列車運行が停止されていた貨物専用高架線をコンバージョンしたハイラインや、1960年代までに数多くの倉庫、埠頭が建設され、工業系



恒久広場化されたタイムズ・スクエア [写真：筆者]



仮設段階のバル通り広場（ブルックリンDUMBO地区） [写真：筆者]

用途で使用されていたイーストリバー沿岸の土地利用転換によるブルックリンブリッジパークが代表例である。前者では、高架線のコンバージョンを思い付き、土地所有者や鉄道会社、市との交渉、設計や建設、そして完成後の管理運営を行っている。その一連のプロセスを常に主導したのは、ハイライン近くに暮らしていた2人の若者が始めたフレンズ・オブ・ハイラインという市民有志組織であった。後者も地域住民たちを中心に設立されたフレンズ・オブ・フルトン・フェリー・ランディングが主体となった粘り強い公園化運動の成果であった。そして、そうした市民運動とニューヨーク市の都市戦略とを結び付けたのが、非営利専門家組織の支援である。フレンズ・オブ・ハイラインの初動期には、デザイン・トラスト・フォー・パブリック・スペースが市民とデザイン専門家や行政担当者を結び付けた。イーストリバー沿いの土地利用転換に当たっても、ヴァン・アレン・インスティテュートなどの非営利専門家集団が独自調査や設計競技の主催などの取り組みを通じて、公共空間創造の流れをつくり出した。

②自動車のための道路空間を人間のための広場に：この10年で公共交通や交通インフラの整備、管理を担当する交通局の仕事が大きく変わった。2008年4月に策定された交通戦略計画「サステナブル・ストリート」にて、今日の世界の先進都市の標準として「街路を社会・経済的活動を涵養する生き生きとした

公共空間と考えるアプローチ」を掲げ、「世界水準の街路」というコンセプトを打ち出した。「世界水準の街路」政策のシンボルは、ニューヨークのエンターテインメントの中心地タイムズ・スクエアを含むブロードウェイの広場化であった。マンハッタン・グリッドと斜行するブロードウェイが生み出す変形交差点部は、つい10年前までは自動車交通と歩道からあふれるほどの通行者で極度に混雑していた。しかし現在は、自動車が完全に排除され、代わりに散りばめられたピストロチェアに多くの人々が腰掛け、談笑し、読書し、ホットドックをほおぼっている。この広場化も、交通局主導というよりもBID組織のタイムズ・スクエア・アライアンス(TSA)と専門家組織との協働から始まったものであった。そして、ニューヨーク市による社会実験を経て、タイムズ・スクエアの前後の区間でも、道路空間配置の変更、信号タイミングの調整、横断歩道の短縮化、駐車規制の変更など、さまざまな施策を一体的に実施したのである。交通局による道路空間の広場化の取り組みは、新設された公共空間部門が担当するプラザ・プログラムによってニューヨーク市内全域に広がった。この

プログラムでは、毎年、BIDを始めとする非営利組織を対象として、道路空間の広場化の提案を募集する。採択された提案については、交通局と提案団体とのパートナーシップを軸として、広場の設計・建設を担当する建設・デザイン局や地域協議会とも協働して広場化を進めていく。パートナーに求められるのは広場の日常的な維持管理から、保険、アウトリーチ活動、デザイン、プログラムやイベント、スポンサー獲得を含む財政計画に責任を持つことである。現在、交通局が関与して創出した広場の数は70を超えている。2013年8月にはチェース銀行からの寄付を受けて、小規模のパートナーを支援するためのネットワーク組織「近隣広場パートナーシップ」が設立され、広場のマネジメントのノウハウを共有するようになっている。

日本でも全国各地で新たな公共空間の創出が試みられるようになっている。今、私たちがニューヨークに見ているのは、公共空間再編の先にある生き生きとしたまちの姿であるが、同時に、公共空間を創出し、運営していくプロセス自体が行政、企業、地域といった多主体が協働する「広場の性格」を帯びている、そのことが豊かな示唆を与えてくれる。

参考文献：『ニューヨークの計画志向型都市づくり 東京再生に向けて(中間のまとめ)』[森記念財団都市整備研究所ニューヨーク・東京比較調査研究委員会編著、森記念財団/2015]

なかじま・なおと——東京大学都市デザイン研究室准教授/1976年生まれ。1999年、東京大学工学部都市工学科卒業。2001年、同大学院修士課程修了。2006年、博士(工学)。東京大学大学院助手、助教、慶應義塾大学専任講師、准教授を経て、2015年4月より現職。専門は都市計画。主な著書：『都市美運動 シヴィックアートの都市計画史』[東京大学出版会/2009]、『都市計画家石川栄輝 都市探究の軌跡』[共著、鹿島出版会/2009]、『建築家大高正人の仕事』[共著、エクスタネッジ/2014]など。

オープンカフェと路上マルシェが連携して賑わいをつくる 池袋・グリーン大通りの2ヵ月限定の社会実験

東京都豊島区

2015年5月に供用開始した豊島区役所新庁舎は、地上49階の高層ビルで、3-9階に区役所、上階に432戸の住宅を備える日本初のマンション一体型本庁舎として話題となった。区役所移転を契機に、旧区役所の跡地利用や造幣局地区のまちづくりなど、池袋駅周辺は新しいプロジェクトで活気付いている。

そんな中、豊島区の魅力を世界に向けて積極的に発信する「国際アート・カルチャー都市構想」を実現するため、2014年から社会実験がスタートした。サンシャイン60通りに集中している賑わいを東口全体に広げようと、地元町会や商店会、まちづくり団体などが中心となり、駅東口から新庁舎に向かうグリーン大通りを活用したオープンカフェと「GREEN BLVD MARKET」と呼ばれるマルシェ(青空市場)を実施した。

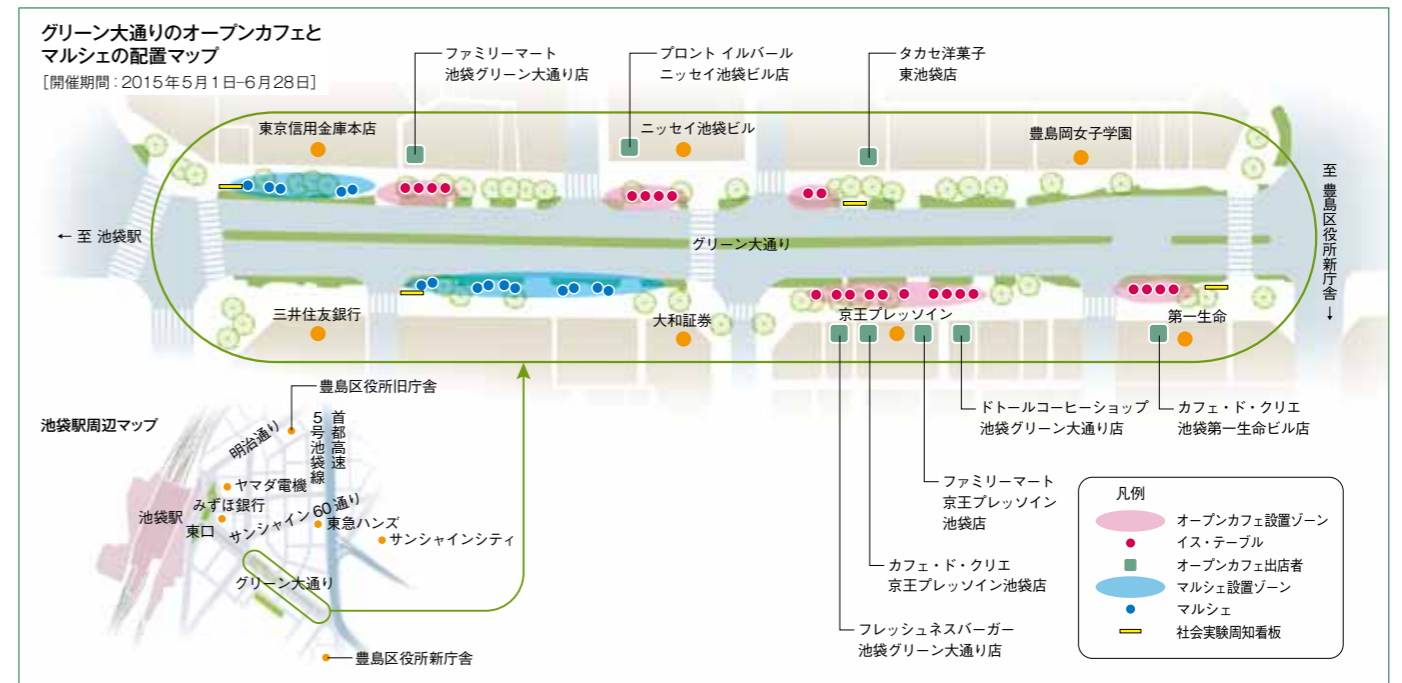
第2回目となる2015年は、5月1日-6月28日に開催。緑豊かなグリーン大通り沿いのコーヒーショップやコンビニの前にオレンジ色のイス72席とテーブル24卓を置き、8店舗5カ所にオープンカフェを設置。誰でも利用できるテイクアウト方式[*]にした。さらに、休日に関断となる金融機関のビル前に屋台を並べて賑わいを出そうと、土日限定のマルシェを開催。大きな並木の間におしゃれな屋台が並び、オーガニック野菜や手づくりの雑貨などが並んだ。マルシェへの参加事業者は74団体。1日平均21ブースに振り分けたが、出店料が無料とあって参加希望者は予想を上回る。要望の多かったアルコールも提供され、賑やかな雰囲気に滞留時間も延びる。2ヵ月間で延べ4万8,000人が訪れ、利用者、参加者双方からの常設化を望む声も多い。新宿に次ぐ国内2位の乗降客数を誇る池袋のポテンシャルは高い。「グリーン大通りを丸の内のように楽しく歩ける通りにしたい」と、豊島区都市整備部の担当者は抱負を語る。アニメの聖地から多世代が楽しめるおしゃれなまちへ、大きく変わろうとしている池袋の今後に期待したい。

(文責：編集室)



- 1 グリーン大通りのマルシェ：大手のショップだけでなく、個人営業の雑貨店や工房による陶器店なども並んだ
- 2 オープンカフェ：樹木の緑が美しいグリーン大通りの歩道に、オレンジ色のイスとテーブルが映える
- 3 清掃活動と安全対策：グリーンバード池袋チームや地域企業による路上の清掃活動を実施。マルシェ開催中はスタッフ4名と警備会社の警備員2名を配置し、安全が図られた
- 4 社会実験周知看板：オープンカフェ実施の告知板が4カ所設置された
- 5 グリーン大通りの歩道：道路を使ったマルシェは全国でも珍しい。リヤカーの土台に庇を付け、深緑色にペイントしたマルシェ用の屋台はすべて手づくり。パラソルと共に賑やかな景色をつくっている

[*]ヨーロッパでよく見る、店に接続してイスとテーブルを並べ、店の延長として機能するサブ方式に対して、店先の歩道を確保し車道寄りにイスとテーブルを並べるテイクアウト方式は、店の客席とカウントせず、原則誰でも利用できる



まちをカフェにする「高崎まちなかオープンカフェ」 コミュニティサイクルと連動して賑わいと回遊性を高める

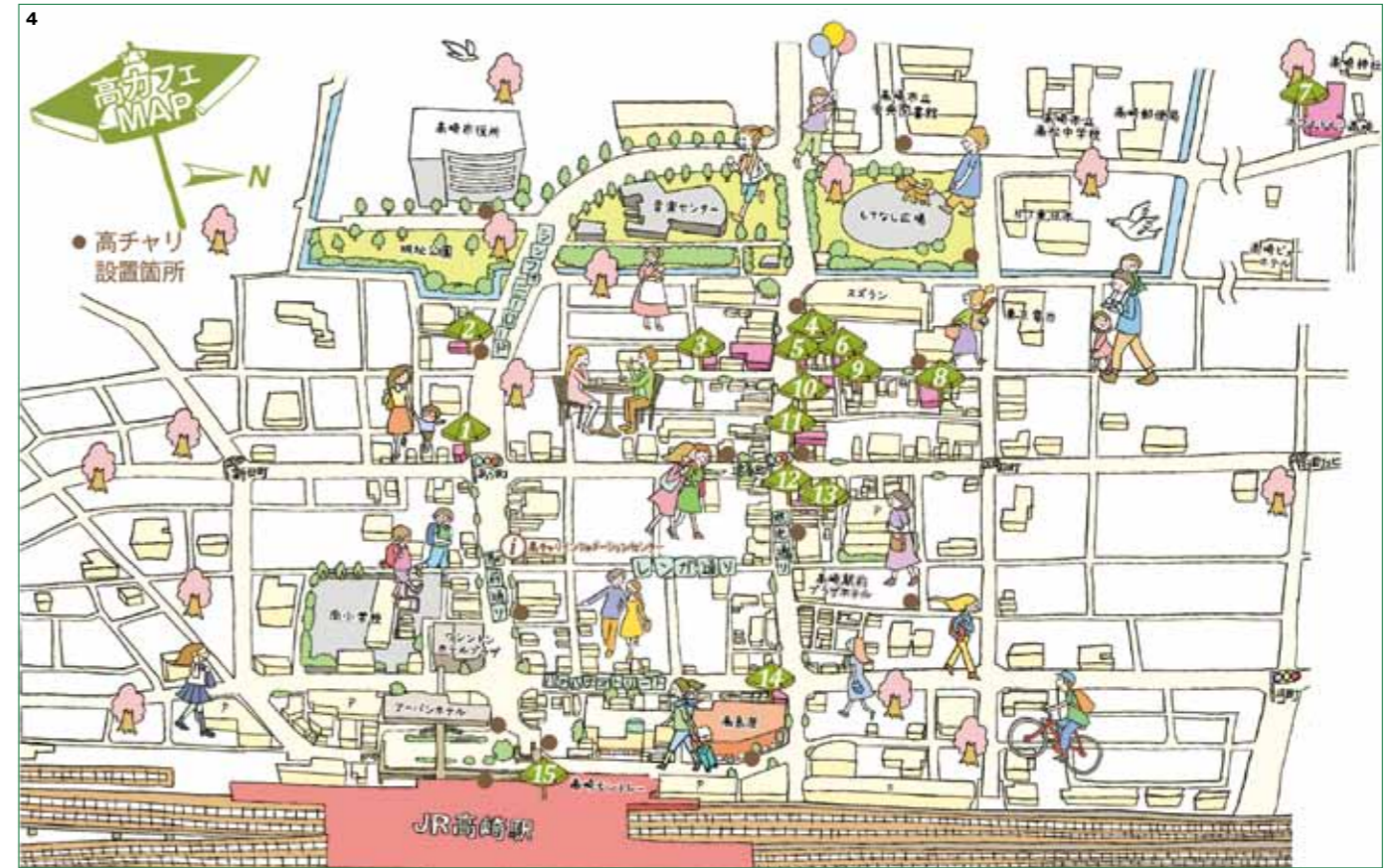
群馬県高崎市

関越・上信越・北関東自動車道、上越・北陸新幹線が交差し、“内陸最大の交通拠点都市”と言われる高崎市。高崎駅前に広がる中心市街地は、古くから商都として発展し、群馬県内随一の商業集積を誇っている。高崎市では、2011年の都市再生特別措置法の改正に伴い創設された道路占用許可の特例制度にいち早く着目。まちの新たな賑わいの創出・回遊性の向上を図るため、オープンカフェとコミュニティサイクルを展開している。

オープンカフェについては道路上での営業が可能となったが、実際は行政や警察との協議・手続きなどが複雑で、全国的になかなか実施に至っていないのが現状だ。高崎市では、市と高崎商工会議所が、時間をかけて課題をクリアしていき実現させた経緯がある。

2012年7月、高崎市と高崎商工会議所、中心市街地内の商店街団体・料理飲食業団体の関係者・出店者などで「高崎まちなかオープンカフェ推進協議会」を結成し、同年9月に社会実験を実施した。まちなかに点在する10店舗で安全性などの問題を検証した後、2013年4月から本格的に「高崎まちなかオープンカフェ」がスタートした。全国では、東京の新宿三丁目モア4番街に次ぐ常設オープンカフェとなる。現在参加する15店すべてが店舗前の道路空間などにイスとテーブルを設置してサービスするサーバ方式が特徴で、ベビーカーやペット連れでも、気兼ねなく利用できること好評だ。また、同時に始まった無料のコミュニティサイクル「高チャリ」を使って、少し離れた飲食店でランチをとる社員なども増えており、人の流れに変化が見られる。今後は、公共空間を使い中心市街地に店舗を持たない飲食店の屋台などの受け入れや、駅前の大通り沿いにパラソルが連続的に並ぶようなおしゃれなまち並みの演出も進めていきたいとのこと。地方都市の限られた空間をうまく活用しながら「オープンカフェのまち」を目指す。

(文責：編集室)



- 1 中心市街地の趣ある道空間：オープンカフェが多く点在する「ざやも〜」周辺地区は、石畳風に化粧塗装された美しい通りとなっている
- 2 オープンカフェで食事をしながらライブを楽しむ風景：6月第2-4週の日曜に「高崎まちなかオープンカフェ」と「高崎おとまちプロジェクト」のコラボイベントが開催された。通りで楽器や歌によるライブが行われ、まちに音楽があふれた。今後もオープンカフェと連携したイベントで活性化を図っていく
- 3 コミュニティサイクル「高チャリ」：中心市街地内に設置された16カ所のサイクルポートで150台の自転車を無料で貸し出している。事前登録などが不要で100円玉をキーボックスに投入するとキーロックが解除され、サイクルポートに戻し施設した際に返却される。シンプルな仕組みで使いやすい高い利用率を誇る。オープンカフェが点在するまちなかを水玉模様特徴の「高チャリ」が走り、まちの回遊性を高めている
- 4 高カフェMAP：「高崎まちなかオープンカフェ推進協議会」による15店あるオープンカフェとコミュニティサイクルの案内図[提供：高崎商工会議所]
- 5 歩道を利用したオープンカフェ：オープンカフェは店舗を延長したスタイルのサーバ方式を採用し、毎年4-11月に常設で実施される

東京のシンボリストリートを目指す 新虎通りのエリアマネジメントが始動

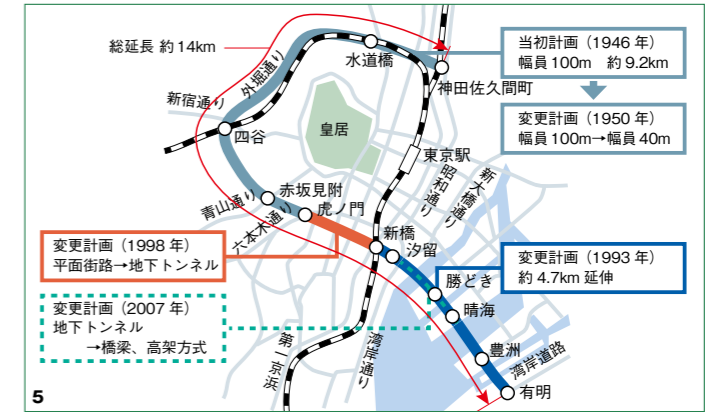
東京都港区

有明から神田佐久間町までの全長14kmの環状第2号線は、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会において、晴海の選手村と競技会場を結ぶ重要な道路に位置付けられ、その整備が急がれている。なかでも新橋―虎ノ門間は、道路の用地買収が難航し、長い間整備が進んでいなかったが、1989年に立体道路制度が創設され、道路上に建物を建てるのが可能となった。そのことから、市街地再開発事業を用いた道路整備の機運が高まり、2002年に市街地再開発事業がスタート。2014年3月には、新橋から虎ノ門に至る約1.4kmの区間を交通開放するに至った。環状第2号線の本線となるトンネル部分は「築地虎ノ門トンネル」、地上部道路は公募により「新虎通り」という愛称に決定した。

一方、新虎通り沿道を魅力的なまちへ導くための取り組みとして、2014年3月に「新虎通りエリアマネジメント協議会」が発足した。協議会は、新虎通りおよびその沿道を魅力的で持続可能なまちへ導き、まち全体の価値向上につなげるため、道路空間の利活用や道路空間を良好な状態で保っていく方法などについて、検討・活動を行うことを目的としており、沿道の土地所有者などで構成されている。

このような地元の動きに合わせ、沿道も含めた一体的なまちづくりを進めるため、行政も新たな取り組みを始めた。2012年3月には港区が、「環状2号線周辺地区まちづくりガイドライン」を作成。2014年3月には、東京都建設局が「東京シャンゼリゼプロジェクト」[*]を始動した。この制度を活用し、新虎通りの一部で、現在、歩道上にオープンカフェが3カ所設置されている(歩道整備のため2015年9月から2016年3月まで一時休止)。また、2020年に向けて、歩道部分のレンガ舗装や、日本の四季が感じられる樹種による街路整備が進められており、魅力的なストリートが完成する予定だ。

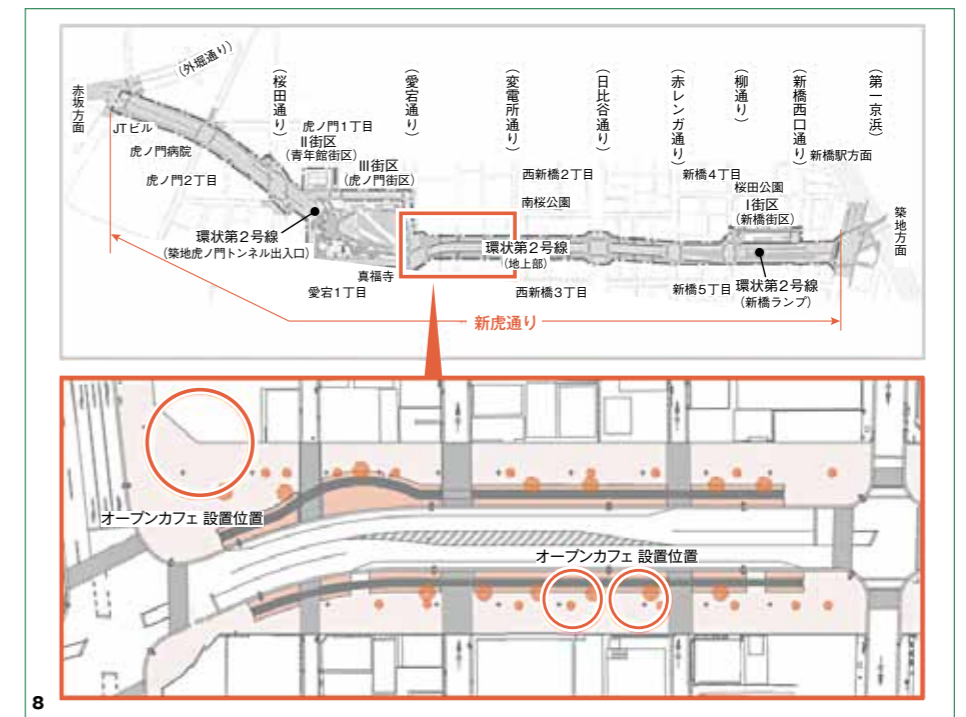
(文責：編集室)



7 shintora avenue

- 1 オープンカフェ：虎ノ門ヒルズを背景に昼食後のコーヒーを楽しむ
- 2 交差点沿いのオープンカフェ：愛宕通りと交差する広い歩道に面したカフェレストラン。夕方、仕事帰りに立ち寄る人も多い
- 3 新虎通り：虎ノ門ヒルズを背後に新橋方向を見る
- 4 虎ノ門坑口：環状第2号線築地虎ノ門トンネルの出口
- 5 環状第2号線の全体図
- 6 新虎通りイメージパース：日比谷通り側から見た地上部道路の工事完成イメージ【提供：東京都】
- 7 新虎通りのロゴマーク
- 8 新虎通りとオープンカフェ位置図：○の部分はオープンカフェの設置位置【提供5・7・8：新虎通りエリアマネジメント協議会】

[*]東京シャンゼリゼプロジェクト
東京都が管理する道路において、都市再生特別措置法や国家戦略特別区域法に基づく道路占用許可の特例を活用することで道路を賑わいの場とするインフラの多機能化を推進し、まちの活性化を図っていくことを目的とした取り組み。対象となる道路の条件、設置できる施設および手続きの流れなどをあらかじめ定めている。詳しくは東京都建設局のホームページを参照



3つの通りを活かし、国際的空間を創出する 国家戦略道路占用事業に取り組む大丸有の道空間

東京都千代田区

東京駅から皇居側に広がる大丸有(大手町・丸の内・有楽町)エリアでは、1996年以降、公民連携のエリアマネジメントによるまちづくりが行われている。丸の内仲通りでは、それまでオフィス街として通過するだけだった道路空間を、歩道と車道を一体的に整備するとともに沿道街区の開発と併せて統一感ある都市空間を形成。憩いの場やイベント会場として“快適な交流空間”へと発展させてきた。

並木の緑あふれる幅7mの歩行空間にはベンチが設置しており、彫刻やハンギングバスケットなどが点在し、沿道のオフィスビルの1階はカフェやレストランなどの店舗が並ぶ。2010年に再整備し馬車道空間が開放された行幸通りは、首都東京の玄関口として象徴的な空間でありながらも、くつろいで散策を楽しめる空間として買い物客や観光客が多く訪れる。また近年は、大規模な国際会議の開催に合わせて、丸の内仲通りにオープンカフェや生演奏などでパーティ空間を演出するなど、都心型MICE [*]などに対応した都市環境づくりに取り組んでいる。

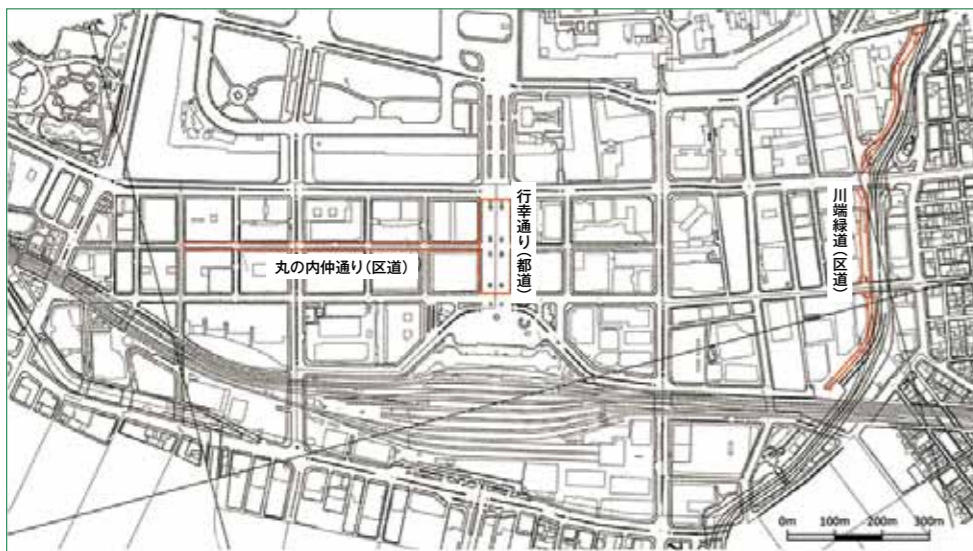
さらに2014年には、日本橋川の水辺空間に歩行者専用道・大手町川端緑道が開通。この公道ではキッチンカーが出店する催事が実施されており、ランチタイムには周辺のオフィスに勤める会社員が買い物にやってきて、ベンチで昼食をとる姿も見られる。区道である公道を民間の一般社団法人大手町歩専用道マネジメントが一体管理し、維持管理のほか賑わい環境形成事業としてイベントや広告設置などを実施。行幸通り、丸の内仲通りと連携したイベントも開催し、夏恒例の打ち水イベントなどを行っている。

地域一帯でのエリアマネジメントの取り組みが評価され、2015年3月、丸の内仲通り・行幸通り(地下空間を含む)・大手町川端緑道が国家戦略道路占用事業の特例区域に位置付けられた。2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向け国際的な都市空間を目指し、更なる賑わいを創出していく。(文責：編集室)



- 1 丸の内仲通りのオープンカフェ：2014年10月に開催された大規模国際会議「IBA（国際法書協会）年次総会」に合わせて実施。飲食路店が屋外にテラス席を拡大したほか、車道にイスやテーブル、パラソルを配置した。会議には約6,000人が参加し、オープンカフェは多くの外国人で賑わった
- 2 パーティ空間の創出：「IBA年次総会」期間中の平日夕方には、ライブパフォーマンスなどによる演出で、丸の内仲通りがパーティ空間となった
- 3 行幸通りで早朝にヨガを楽しむ風景：7月24日に「大手町・丸の内・有楽町 夏祭り2015」が開催された。行幸通りでのイベント「丸の内エリアで100人ヨガ&打ち水」には約100人が参加し、7時からヨガレッスン、8時から打ち水体験を行った【提供 1-3：大丸有エリアマネジメント協会】
- 4 洗練された道空間の丸の内仲通り：車道と歩道は自然石・アルゼンチン斑岩による共通の仕上げ。区有地・民地の境界にこだわらない一体的なつくりで、写真のようなオープンカフェは道路ではなく店舗前のビル敷地内に設けられたもの。快適な歩行者環境を整備し、“人が中心の空間”となっている
- 5 まち歩きが楽しめる行幸通り：2010年から行幸通りの馬車道空間は一般に開放され、歩行できるようになった。東京駅丸の内駅舎が正面から見られるため、観光客の姿も多く見られる

[*] Meeting・Incentive Travel・Convention・Exhibition/Event、ビジネスイベントなどの総称



国家戦略道路占用事業の適用区域(地上部分)
 都道404号皇居前東京停車場線(行幸通り)、特別区道第114.119号線(丸の内仲通り)、
 特別区道第847.848.849号線(川端緑道)

国家戦略道路占用事業を行う区域
 ※道路占用許可対象外の民間の
 公開空地を一部含む

6 大手町川端緑道: 大手町連鎖型都市再生プロジェクトの一環で開設された歩行者専用道。江戸の文化を取り入れたデザインとなっていて、写真は「小教広場」。また、各所にさまざまなデザインのベンチが設置されている

7 大手町川端緑道案内図: 現在の案内図の背景に、江戸時代の地図を重ねている

8 ランチタイムに出店するキッチンカー: 大手町川端緑道に日替わりで数台のキッチンカーが並ぶ

9 都心に誕生した憩いの通り: 大手町川端緑道沿いの大手町フィナンシャルシティ横には「エコミュージアム」もオープンした。エコの情報発信スペースで、豊かな植栽の通りにはさまざまな作品が点在し、歩きながら先進の環境技術を知ることができる。写真中央の東屋のような作品は、再生素材でつくられた「サロン」

10 国家戦略道路占用事業の適用区域(地上部分)図[出典: 首相官邸ホームページ・国家戦略特区特集ページ]

まちの賑わい創出のための道路占用許可の特例制度活用状況

2011年4月に都市再生特別措置法の一部を改正する法律が施行され、それを受け同年10月に道路法施行令が改正。まちの賑わい創出に資する施設の道路占用を許可する特例制度が創設された。道路空間利用のニーズは高まりを見せ、特に都市部の道路空間を有効に活用することで、人々の交流の場が創出され、新たなビジネスチャンスにつながると期待されている。この特例制度では、一定の基準に適合する場合という条件付きではあるが、主に食事施設や購買施設、自転車駐車器具、広告塔などを対象として道路占用を許可。オープンカフェやコミュニティサイクルが設置しやすくなった。

■ 道路占用許可の特例制度活用事例一覧

地区名	占用主体	開始年度	道路管理者	実施事業	経緯
新宿三丁目モア4番街	新宿駅前商店街振興組合	2012	新宿区	オープンカフェ(食事施設)の設置、地域ルールにのっとった広告の設置	深刻化していた違法駐輪や違法駐車等の環境問題を解決するためと、賑わい創出
うめきた先行開発地区	一般社団法人 グランフロント大阪TMO	2013	大阪市	オープンカフェ(食事施設)の設置、 広告板・バナー広告の設置、 自動車案内誘導サインの設置、 屋外ベンチの設置、 防犯カメラの設置等	2004年に策定されたまちづくり基本計画において民間主体で歩道上にオープンカフェ等を設置することを計画
札幌駅・大通駅周辺地区	札幌大通まちづくり株式会社	2013	北海道開発局	オープンカフェ(食事施設)の設置、 広告板の設置	長引く景気低迷の中、2009年、継続的にまちづくり活動を行う札幌大通まちづくり株式会社を設立。歩行者天国活用事業と併せてオープンカフェ事業を展開
高崎市中心市街地地区	高崎まちなかオープンカフェ 推進協議会、 高崎まちなかコミュニティサイクル 推進協議会	2013	群馬県、 高崎市	オープンカフェ(食事施設)の設置、 コミュニティサイクルの実施	広域交流拠点機能の充実を目的に、まちの回遊性を高めるコミュニティサイクルを実施し、賑わいを創出するオープンカフェを常設
岡山駅東口地区	岡山市	2013	中国地方整備局	コミュニティサイクルの実施	人と環境に優しい交通体系を構築することを目標に、公共交通と自転車主体の交通システムを実現するため、コミュニティサイクルを導入
鳥取駅周辺地区	新鳥取駅前地区商店街振興組合	2013	鳥取市	休憩施設の設置	2013年に市道駅前太平線の約150m区間に閉鎖式大屋根と芝生広場を持つ「パード・ハット」が完成。道路上の芝生広場にイス・テーブル等を設置し、憩いの空間とする
柏の葉 アーバンデザインセンター	一般社団法人 柏の葉アーバンデザインセンター	2014	柏市	休憩施設の設置、 バナー広告の設置	柏の葉キャンパス駅にある「柏の葉アーバンデザインセンター」は東京大学、千葉大学、柏市を中心に運営されるまちづくり参加の施設。地域住民の交流を図ろうと、自由に利用可能なラウンジやテラスが設置された
環状第2号線 新虎通り	新虎通り エリアマネジメント協議会	2014	東京都	オープンカフェ(食事施設)の設置	環状第2号線地上部道路の整備に伴い、新虎通りを魅力的なまちにするため、2014年よりオープンカフェを実施。都会的で洗練された通りを目指す
福井市中心市街地	まちづくり福井株式会社	2014	福井市	オープンカフェ(食事施設)の設置	2000年に設立された「まちづくり福井株式会社」では、まちあるきマップの作成、コミュニティバスの運営などさまざまな事業を展開。まちフェスでは道路にオープンカフェ等を設置して快適性を高める

※都市再生特別措置法の一部を改正する法律の施行に伴う道路占用許可の取扱い(国土交通省)(<http://www.mlit.go.jp/road/sisaku/senyo/senyo.html>)をもとに作成

制約のある材料の可能性を最大限に引き出す

坂 茂
Shigeru Ban

私は木に愛着がある。幼い頃、私の家では母の仕事の関係で頻繁に増改築を繰り返していた。木を切り、^{かん}鉋をかけ、継手や仕口をつくる大工の技を間近に眺め、そして木の香りの中で育った。そのためだろうか、いつしか大工になりたいと憧れるようになった。

木の魅力は何と言ってもエイジング、年を重ねていくごとに味わいが深まることにある。加えて鉄などに比べ加工が難しいこと。紙にも言えるが、私は制約のある材料に興味があり、その中で何ができるかを考えることに面白みを感じる。鉄は溶接さえすれば、どんな造形もほぼ可能だ。構造は概してアクロバティックな方へと向かい、構造美を越えてデコラティブになる危険性がある。どこまでが合理的な構造か。その境目を判断することが建築家としての倫理だと思っている。自分を抑制するためにも合理性や分かりやすさの枠の中で、材料の可能性を最大限に引き出してデザインする。そこに興味がある。

「ポンピドー・センター・メス」は、国際コンペによって設計者に選ばれた。展示・鑑賞がやすく、建築としても感動を与えられる美術館にしたい。同時に美術館という箱をつくるよりも、周囲の公園の延長として大屋根の下に空間をつくりたいと考えた。

コンペ時にはアラップに構造設計を依頼し、屋根は鉄と木のハイブリッド構造を提案された。設計者に選ばれた後に完全な木造屋根へと発展したが、アラップの最終案は後述する私の元案とは異なり、さらに予算に合わなかったため不採用にした。急ぎ、木造に強いドイツ、スイスにエンジニアを探しに行き、知人の建築家の紹介でスイスの木造専門のエンジニア、ハーマン・ブルーマー氏に出会うことができた。彼が私の案をもとに見直してくれたところ予算内に収めることができ、このプロジェクトは救われたのである。

美術館は幅15m、長さ90mのチューブ状のギャラリーを45度ずつ振って3つ重ね、クリエイティブ・スタジオとレストランが収まる円形のボリュームと、オーデトリウムやオフィスなどのバック機能を収容した四角いボリュームを配置し、それらを統合するように三次曲面の木造屋根を架けた。その上を膜で覆っている。屋根は中国の竹で編んだ伝統的な帽子をヒントに、曲がりやすい木をグリッド状に組むことによってシェル構造にできると考えた。

巨大な木造屋根の架構は金属のジョイントを使わずにそれぞれの線材を交差させ、六角形と正三角形のパターンで構成している。集成材で出来た上弦材と下弦材の間に木製の幅広の束材を挟んでフィーレンデール・トラス状(梯子状)に結び、うねるように組み上げる。

屋根はユニークな形をしているが、水平投影すると正六角形になる。それを上や下に引っ張って変形させただけである。こうしてメスの巨大な三次曲面の木造屋根は完成した。

一方、日本の木造建築が置かれている状況は、ヨーロッパ、特にドイツ、スイス、オーストリアに比べ格段に遅れている。エンジニアリングウッド(加工木材・集成材)の開発や高精度な三次元加工技術なども同様で、また木造のエンジニアの数も少ない。

加えて法規制が厳しい。木も燃え代設計をすることによって耐火できるが、そこにさらに燃え止まりという規制を掛け、木の中にプラスチックボードなどの不燃材を入れなくてはならない。こうなると純粋な木ではなく、コストも高くなる。私はこのような日本では使えない技術を、「木造のガラパゴス化」と呼んでいる。また2000年には建築基準法第38条がなくなった。以前はプロジェクトごとに個別認定を取ることができたが、現在では大掛かりな実験などによって材料認定を証明せねばならず、個人設計事務所レベルでは到底不可能になった。木造建築に限らないが、前例がないことは認められにくい。したがって新しい構造を開発するのは難しい状況にある。

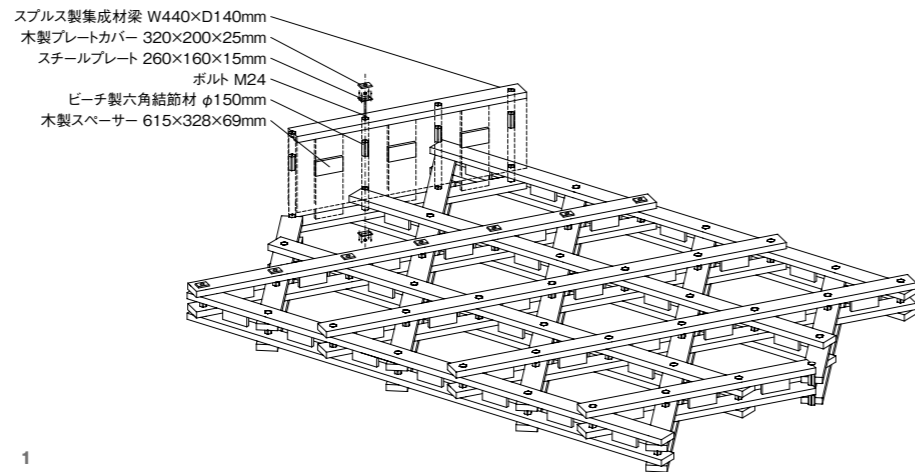
そのような中でも、近頃とみに木造は流行の一途を辿っている。しかし単に鉄骨造の部材を木に置き換えて金属のジョイントでつなぐ手法などは、私は木を使う意味がないように思える。強度を置き換えただけでは木に適した構造にはならない。考え方がまるで異なる木造の設計には、相当な経験が必要なのだ。メスでハーマン・ブルーマー氏と知り合えたおかげで、その後、さまざまな木造建築に取り組むことができた。これからも木だからできる造形、木でしかできない造形をつくり続けたいと考えている。



ポンピドー・センター・メス [2010]

1 屋根詳細アクトメ図：三角形で構成して面剛性を持たせたいが、すべてを三角形で分割すると交点に6本の材が集まり複雑になる。正三角形と六角形を組み合わせた構成にしたことで4本に収まり、ジョイントを簡潔にできた【提供：坂茂建築設計】
2 足元から屋根へとつながる木の架構：ドイツの木造施工会社がCNC（コンピュータ数値制御）工作機械で加工したヨーロッパ産のトウヒの集成材を、三次元的に組み上げた
3 正面全景：1977年に開館したパリのポンピドー・センターの分館。メインのギャラリーは幅15m、長さ90mのチューブ状で、45度ずつ振りながら3段に積み重ね、先端は断面いっぱいのピクチャア・ウィンドウになっている。建物と広場は開閉が容易なガラス・シャッターで仕切り、内外の空間を連続可能にしている
【写真2・3：Didier Boy de la Tour】

ばん・しげる——建築家／1957年生まれ。南カリフォルニア大学、クーパー・ユニオン建築学部（ニューヨーク）卒業。1982-83年、磯崎新アトリエ勤務。1985年、坂茂建築設計設立。1995-99年、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）コンサルタント。同時にNGOボランティア・アーキテツ・ネットワーク（VAN）設立。2001-08年、慶應義塾大学環境情報学部教授。2011年より京都造形芸術大学芸術学部環境デザイン学科特任教授。
主な作品：カーテンウォールの家[1995]、紙の家[1995]、ハノーバー国際博覧会日本館[2000]、成蹊大学情報図書館[2006]、ニコラス・G・ハイエクセンター[2007]、大分県立美術館[2014]など。





1945
↓
1973

【戦後復興～高度経済成長期】
焦土からの復興、
アメリカ文化への憧れ

戦後、日本は急速に復興を遂げます。1955年頃には戦前の水準にまで経済が回復し、1956年の経済白書に記された「もはや戦後ではない」という言葉を皮切りに高度経済成長が始まります。1964年の東京オリンピック、1968年の長崎が開港工、そして1970年の大阪万博に集結されるこの時期に、日本の住生活はアメリカ文化の影響を受けて大きく変わりました。

TOPICS

歴史に学び、未来へのあゆみに活かす「LIXIL 資料館」の取り組み

開館3周年を迎え「日本の住生活のあゆみとLIXILのものづくり」WEBサイトを開設

後藤泰男
Yasuo Goto
(株)LIXIL 広報部 文化企画G

LIXIL 資料館について

2012年10月にオープンしたLIXIL 資料館(東京都江東区)は、今年で開館3周年を迎えました。本館では、2011年4月にLIXILがスタートするまでに、統合した各社が歩んできた軌跡、技術や製品の歴史を、日本の住生活の変遷と併せて紹介しています。そこには各社それぞれの歴史に学び、見つめ直すことにより、未来へのあゆみに活かしたいという思いが込められており、社員の相互理解、コミュニケーションの場としても活発に利用されるとともに、お客さまにLIXILを深く知っ

ていただく場として運営しています。またLIXIL 資料館では、グループ各社で保管していた発行物などを“歴史の蓄積”として残し、未来につなげる活動も継続的に行っており、ここでは展示内容と併せてそれらの活動をご紹介します。

展示のご紹介

- ミュージアム 常設展示「住生活の変遷」

明治初期から2011年のLIXIL 誕生に至るまでを下記の5つの時代に区切り、日本の住生活の変遷を紹介しています。併せて窓、ドア、内装部品や外装

建材から、キッチン、浴室、トイレなどの水まわりまで、新たな時代を切り開いてきたLIXIL 製品の変遷を大年表で紹介しています。

- ・1868-1945年[明治-戦前期]: 近代化の進展
- ・1945-1973年[戦後復興-高度経済成長期]: 焦土からの復興、アメリカ文化への憧れ
- ・1973-1985年[安定成長期]: 心の豊かさへの芽生え
- ・1985-1991年[バブル期]: 住宅価格の高騰と余暇の拡大
- ・1991-2011年[少子高齢化・情報化社会]: 健康、環境、安全がキーワードに



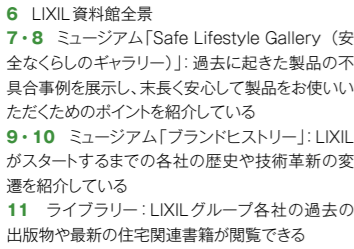
ここではLIXILにとってエポックとなる商品が多く誕生した、高度経済成長期の展示の一部を紹介します。

○1956年「ステンレス深絞り流し台」
サンウエーブ工業から日本で初めてのプレスによる「ステンレス深絞り流し台」が誕生しました。戦後の住宅不足解消のための日本住宅公団による団地の建設ラッシュを控え、高品質で安価なステンレス流し台が求められ、溶接に代わる深絞りの構想だけで1万台の契約を取り、技術者たちの不眠不休の努力の末、量産化に成功しました。当時、寝食分離論により登場した“ダイニングキッチン”は主婦の憧れの的で、ピカピカの「ステンレス深絞り流し台」はそれを象徴するように輝きを放ち、それまでの台所の暗いイメージを一新しました。

○1963年「スピード雨戸」
妙見屋(後のトヨーサッシ、トステム)から、日本で初めて工場生産した完成品雨戸である「スピード雨戸」が登場しました。1962年、東京都の火災予防条例が変更されたことで、家を新築する際は雨戸の表面にブリキ鋼板を張るなどの防火処理を施さなくてはなりませんでした。そのため、まず建具職人が木枠を現場で組み立ててカンナで削って歪みを調整した後、一度取り外して表面に板金職人が鋼板を張り付けて再び窓に取り付けるという、大変に時間と手間の掛かる方法をとっていました。工場



1 ミュージアム「住生活の変遷」: 日本の住生活の変遷を大年表で紹介し、各時代で誕生したLIXIL製品を展示している
2 ミュージアム「住生活の変遷」
3 日本初のプレス成型による「ステンレス深絞り流し台」
4 日本で初めて工場生産した完成品雨戸「スピード雨戸」
5 国産第1号のシャワートイレ「サニタリイナ61」



6 LIXIL 資料館全景
7・8 ミュージアム「Safe Lifestyle Gallery (安全なくらしのギャラリー)」: 過去に起きた製品の不具合事例を展示し、末長く安心して製品をお使いいただくためのポイントを紹介している
9・10 ミュージアム「ブランドストーリー」: LIXIL がスタートするまでの各社の歴史や技術革新の変遷を紹介している
11 ライブラリー: LIXIL グループ各社の過去の出版物や最新の住宅関連書籍が閲覧できる



にカラー鉄板を張った完成品である「スピード雨戸」は仕上がりが美しく、現場作業時間が従来の6分の1と大幅に短縮できたことで、建築業界に新しい利益をもたらしました。
○1967年「サニタリイナ61」
伊奈製陶(後のINAX)から、国産第1号のシャワートイレ「サニタリイナ61」が誕生しました。上下水道が整備され、洋風便器が急速に普及し始めた1964年に、スイスから医療用温水洗浄便座を輸入販売。その後、未経験の新しい機能のため、半信半疑の中、普及には紆余曲折を経て国産化が実現しました。発売当初は吐出する温水温度が不安定、かつ価格も高く市場への浸透

は進みませんでした。しかし、1980年代以降は日本人の清潔志向が高まり、一般家庭への普及が進みました。現在、国内一般世帯での普及率は70%を超え、日本が世界に誇る製品のひとつとなりました。
これらの他にも、ミュージアムには製品を多数展示しており、そこから時代の雰囲気を感じながら、その製品が開発された背景や当時の住生活に与えた影響をご覧ください。構成となっています。
開館以来、LIXILのお客さまはもちろん、建築を学ぶ学生の方や一般の方々にご利用いただき、「今では当たり前に使っている製品が、何十年も前に多くの人たちの努力と試行錯誤を経て開発さ



11

れたことを初めて知った」、「製品の“原点”を感じる事ができた」という声をいただいています。

常設展示「Safe Lifestyle Gallery (安全なくらしのギャラリー)」
お客さまに末長く安心して安全に製品をご愛用いただくため、正しい使い方と定期的な点検修理の大切さについてご理解いただき、暮らしの安心・安全に役立てていただくための場として開設しました。
「製品安全コーナー」では、焼損したシャワートイレを始め、製品事故の再現品を多数展示しています。「お手入れメンテナンスコーナー」では、末長く安心して安全に製品をお使いいただくためのポイントを紹介しています。また「キッズデザインコーナー」では、子どもの安全に配慮した製品としてキッズデザイン賞を受賞した製品を展示しています。さらに、製品安全・消費者教育に関する書籍もご覧いただけます。見学者からは、製品安全への取り組みと情報公開に対するLIXILの企業姿勢に対し高い評価をいただいています。

その他、各社の歴史と併せて創業の精神・企業理念・技術革新の変遷などを紹介する「ブランドストーリー」の展示、LIXILグループに関連するさまざまなテーマの企画展などを実施しています。

● ライブラリー

これまでLIXILが出版してきた書籍や、グループ各社で保管していた各種出版物を集約。また、建築・住宅関連を中心に専門図書も多数蔵書しています。最新の雑誌の閲覧コーナーや、ミュージアムの企画展示と連動した書籍コーナーも設け、社員の情報収集の場やコミュニティスペースとしても広く活用されています。

WEBサイト「日本の住生活のあゆみとLIXILのものづくり」について

LIXIL 資料館の活動の一環として、



2015年7月より公開したこのサイトは、LIXIL 資料館の常設展示「住生活の変遷」をベースとし、明治初期から2011年のLIXIL 誕生に至るまでを、社会の動き“一般史”、“住生活史”と対比させながら、LIXILの“製品史”を年表形式の一覧でご覧いただける構成としています。
LIXIL 資料館オープンの際に込められた思いと同じく、住生活の歴史を学ぶ学生や研究者、住宅業界の方々、開発者はもちろん、広く一般の方々にもご覧いただけるよう公開しています。

結び

「優れた製品とサービスを通じて、世界中の人々の豊かで快適な住生活の未来に貢献する」ことを企業理念に掲げたLIXILは、2011年に誕生した新しい会社ですが、統合した各社はいずれも、日本の住生活の発展と共に、その時代が必要とした製品や時代を先取りした製品を供給してきた会社でした。日本の住生活の発展と共に、その時代背景と併せてLIXIL製品の歴史を読み解くことで、未来の住生活の発展に寄与できると考えております。ぜひLIXIL 資料館とWEBサイト「日本の住生活のあゆみとLIXILのものづくり」をご活用ください。



12 WEBサイト「日本の住生活のあゆみとLIXILのものづくり」
13 同詳細画面

LIXIL 資料館
所在地: 東京都江東区大島2-1-1
LIXIL WINGビル
TEL: 03-3638-6276
開館時間: 10:00-17:00
休館日: 土・日・祝日および会社休日
※電話による事前予約制となっています。
アテンダントによる展示説明も可能です。
詳しくはLIXIL 資料館までお問い合わせください。

「日本の住生活のあゆみとLIXILのものづくり」WEBサイト
<http://www.lixil-history.com/>

「LIXIL ビジネス情報サイト」のご案内

<http://www.biz-lixil.com/>

LIXILのビジネスユーザー向けポータルサイト「LIXILビジネス情報サイト」がリニューアルしました。

トップページのデザインを一新し、LIXILの豊富な商品について、お探しの情報にスムーズにアクセスしていただきやすいメニュー構成としました。今までご利用いただいていた2次元・3次元CADデータ、商品画像データ、提案・見積書などの各種データ提供や、カタログの閲覧・請求の機能もトップページに集約しています。またLIXIL商品をご採用いただいた施工事例について、建築・施設別と商品別でお探しいただけるようになり、建築やまちづくりに関するコラムや「LIXIL eye」のバックナンバーもPDFデータでご覧いただけます。加えて、定期的にLIXILの新商品情報をお届けするメールマガジン「くつどりびんぐ」の登録もお申込みいただけます。より使いやすくなった「LIXILビジネス情報サイト」をぜひ活用ください。

<http://www.biz-lixil.com/>



施工事例 index

<http://archiscape.lixil.co.jp/pickup/>

愛育病院

「田町駅東口北地区街づくりビジョン」に基づく再開発事業に伴い、移転・新築されました。低層部の外観デザインは、古風でモダンな味わいのあるクラッチ面状の特注タイルをイギリス張りとし、旧病院（現・愛育クリニック）のデザインを踏襲。伝統と格式を継承した柔らかく落ち着いた表情は、周囲の景観に調和し、訪れる人を優しく出迎えています。



■建築概要■

所在地：東京都港区芝浦1-16-10 | 規模：地上10階、塔屋1階 | 構造：SRC造・RC造・S造 | 工期：2012.6-2014.10 | 設計：日建設計 | 施工：鹿島建設

愛育病院

愛育病院では、周産期医療・母子医療の専門病院として質の高い医療を提供し、地域に開かれた病院を目指しています。患者が心地良く過ごせることはもちろん、スタッフの働きやすさを追求した最新の設備機器が整えられています。



個室タイプの病室には、洗面台、トイレ、折りたたみベンチ付きシャワーユニットを設置。特別個室には、ミニキッチンやソファセットも完備され、くつろいで過ごすことができる設えとしています。

加東市役所

兵庫県加東市に建設された統合庁舎は、行政機能を集約し、質の高い市民サービスの継続した提供と、行政効率の向上を目的としています。アプローチ部分にヤードを設置し、来庁者の歩行をサポートしています。フラットでシャープなデザインが新庁舎の建物に調和しています。



■建築概要■

所在地：兵庫県加東市社50 | 施主：加東市役所

金町消防署

東京都葛飾区金町に建設された、防災機能を強化した消防庁舎です。大型の緊急車両が通行する出入り口には、ノンレールの引き戸が採用されています。引き込み代が確保できない場所には、ノンレールの両開きの大型扉で対応しています。



■建築概要■

所在地：東京都葛飾区金町4-15-20 | 施主：東京消防庁

LIXILからのご案内

「第9回キッズデザイン賞」を受賞

「第9回キッズデザイン賞」(主催：特定非営利活動法人キッズデザイン協議会、後援：経済産業省、消費者庁)の「子ども視点の安全安心デザイン 一般部門」において、子どもの安全安心に配慮した設計や機能が評価され、LIXILの下記4商品がキッズデザイン賞を受賞しました。今回で9年連続の受賞となります。今後も子どもの安全安心に配慮し、生活する上で、快適かつ機能的な商品開発に取り組んでいます。

■高性能ハイブリッド窓「サーモスX」

先進の高断熱技術を駆使し、フレームを極限までスリム化してガラス面積を最大化することで、アルミと樹脂のハイブリッド構造でありながら、従来の樹脂窓と同等以上の断熱性能(熱貫流率1.05W/(m²・K))を実現しています。外気温に左右されにくい健康で快適な室内環境の実現に貢献します。

■高性能樹脂窓「エルスターX」

従来の樹脂窓とは一線を画す、世界トップクラスの断熱性能(熱貫流率0.79W/(m²・K))を持つ、高性能樹脂窓です。「サーモスX」同様、健康で快適、安全安心な室内環境の実現に貢献します。

■住宅用シャッターシリーズ「イタリヤ」リモコン電動

無線リモコンのため、部屋のどこからでもシャッターの開け閉めができます。また、子どもが寝ている間でも静かに閉鎖することができます。挟まれ事故を防ぐ安全機能も搭載しています。

■採風ドアの開閉・ロック機構

採風ドアの窓上部・下部それぞれにある2つの錠が、1つの操作機構で施錠・解錠できます。子どもでも簡単に操作できます。



高性能ハイブリッド窓「サーモスX」



LIXIL出版 新刊案内

<http://www1.lixil.co.jp/publish/>



LIXIL BOOKLET

「鉄道遺構・再発見」

執筆：伊東孝、小野田滋ほか

定価：1,800円[税別、好評発売中]



「「シェア」の思想／または愛と制度と空間の関係」

執筆：門脇耕三ほか

定価：2,600円[税別、好評発売中]



「デッドエンド・モダニズム」

執筆：岸和郎

定価：2,200円[税別、好評発売中]

10+1 WEB SITE <http://10plus1.jp/>

建築・都市を巡るサイトです。建築写真アーカイブ、建築関連書籍、イベントの紹介、特集などを毎月更新しています。

ギャラリー＋イベント

<http://www1.lixil.co.jp/culture/>

LIXILギャラリー | 東京

巡回企画展

鉄道遺構・再発見

会期：開催中、11月21日[土]まで
廃線路になった後も新たな価値を付加された鉄道遺構14件を厳選し、豊富な写真で紹介いたします。



マカオポルトガル語学校 [撮影：益永研司]



中央本線・大日影トンネル [撮影：西山芳一]

建築・美術展

「クリエイションの未来展

——第5回清水敏男監修

未来食 食に関する3つのストーリー展

——謝琳+間島領一+品川明

会期：開催中、11月24日[火]まで
危険に満ちた現代世界で、軍事紛争、地球温暖化、環境汚染など人間の外部から作用する危険に比べ、内部からやってくる“食”の危険。食をテーマにした2人の現代美術作家(謝琳、間島領一)による2点の作品展示と、1名の食の研究家(品川明)によるトークイベントを通して、未来の食についてそれぞれのストーリーを語ります。



謝琳「Dune」
[450×320×80cm | 砂糖、卵、発泡スチロールなど | 2011年 | 撮影：Florian Clair]



間島領一「まな板に乗ってしまった深海魚 (A deep-sea fish on a chopping board)」
[21.5×42.5×16cm | Mixed Media | 1987年 | 個人蔵]

LIXILギャラリー | 大阪

巡回企画展

マカオのアズレージョ

——ポルトガル生まれのタイルと石畳

会期：開催中、11月17日[火]まで
マカオ独特の文化やまちの表情を、ポルトガルからもたらされた装飾タイル「アズレージョ」と石畳「カルサーダス」を通して紹介します。

INAXライブミュージアム

土・水・火、ものづくりと

生活文化をつなぐ企画展

I LOVE タイル

——タイルがつなぐ街かど展

会期：開催中、2016年3月20日[日]まで
会場：「世界のタイル博物館」企画展示室
入館料：共通入館料で企画展も観覧可
建築好き、タイル好きな女性が、全国各地をまち歩きして蒐集した建物とタイルの写真。彼女の視線に触れたのは、まちなかに佇む銭湯やタバコ屋、美容院などに使われているタイルたち。そんな建物やタイルを見ながらのまち歩きの楽しさを、ご自分の目で感じていただく企画展です。



福助のタバコ屋 [兵庫県赤穂市 | 撮影：岡崎紀子]

「LIXILギャラリー | 東京」

所在地：東京都中央区京橋3-6-18
東京建物京橋ビル LIXIL・GINZA 2階
Tel：03-5250-6530
開館時間：10:00-18:00
休館日：水曜日、11月22日、12月30日-1月4日

「LIXILギャラリー | 大阪」

所在地：大阪府大阪市北区大深町4-20
グランフロント大阪南館タワーA 12階
Tel：06-6733-1790
開館時間：10:00-17:00
休館日：水曜日、12月29日-1月6日

「INAXライブミュージアム」

所在地：愛知県常滑市奥栄町1-130
Tel：0569-34-8282
開館時間：10:00-17:00
(入館は16:30まで)
休館日：第3水曜日(祝日の場合は翌日)、12月26日-1月4日
共通入館料：一般：600円、高・大学生：400円、小・中学生：200円

くったことを知って頼みに来たというこ
とです。一年間かけて、まちの人たちと
ワークショップを繰り返しながらプログ
ラムをつくり、それを建築化していっ
た。一冊だけの絵本をつくる工房、紙や
竹細工の工房兼展示場、童話のオペレッ
タをつくるホール、多目的に利用できる
屋内のパフォーマンススペース、図書室
とカフェなどの場が、丘の上の大きな船
のようならんどりの空間に散在し、ス
ロープとブリッジでつながれています。
このネットワークは屋外ステージや風や
水や音の広場にもつづいていきます。プ
ログラムから始まって、大小の箱、開き
方の異なる場がある、ひとつの「カ
タ」に到達したのではないかと思ってい
ます。絵本館は小ぶりの建築だが、活発
に利用されていることが評価され、公共
建築賞をいただいた。

先日、NHK WORLD TVという番組

で私の仕事を紹介してくださったが、ど
の場面にも建築よりも利用者ばかりが映
されており、つくづく私は「人のいる建
築風景」をつくってきたのだと再確認す
る思いでした。民間であれ、公共であ
れ、ソフトとしてのプログラムとハード
としての建築がひとつのカタに到達して
いる時、その建築は快適で人がいる風景
をつくり出します。

金沢21世紀美術館も美術館と交流館を
合体させ、特に自由に入れる交流館の開
放性が人のいる建築風景をつくっていま
す。丸いガラスの領域に四角い展示室や
中庭を配置するカタと、関係者と共同し
て設計していったプログラムがうまく一
緒にあるのだろうと思っています。

金沢21世紀美術館は、四角いBOXを
並べて空間をつくるというカタをコンペ
時に立ち上げ、箱の配置や大きさ、それ
ぞれのディテールをプログラムと一緒に

長谷川逸子様

湘南台文化センターは訪れるたびに、
家族連れが楽しそうに内外で遊んでい
て、長谷川さんが指摘された「人のいる
建築風景」というものが建築の大きな魅

が走り回り、まるで小学校か公園のよう
で、西洋で想像できる美術館とあまりに
違う美術館のあり方に、というか美術館
を使う人々の風景に、彼は感心したのだ
と思います。

日本は建築だけでなく通りも街も、大
衆的だとよく言われます。西洋の街は訪
れるたびに、階級社会の厳しさを感じま
す。街は美しく厳粛で、人々を分ける厳
しさがありません。が、日本の街はゆるい
というか、普段着というか、みんなご
ちゃつと一緒に、まるで村のようです。
ヨーロッパ人はそういう日本文化、日本
の都市や社会全体に、非階級性や大衆性
を感じているのかもしれない。

みんなごちゃつと一緒にの社会で育った
我々が作る建築はやはり、みんなのため
の建築に自然になるのではないかと、
思ったりもします。

最近なぜ屋根の建築をやるのか？ の
ご質問ですが、理由はいくつもあります。

ひとつは、壁で建築を作ると中と外が
切れるのですが、屋根で建築を作ると中
と外がつながる、ということ。環境
と建築の連続が自然にやれる魅力を感じ
ています。軒下のような空間が自然にで
きるのも魅力のひとつです。軒先は、部
屋と道路の間、中と外の間とも言えま
す。「軒先を借りる」という言い方があ
るように、軒先は個人の所有ですが通り

力のひとつになっていると感じます。
「人のいる建築風景」は公共建築にとつ
て大きな課題のひとつですが、それが成
功しているように感じられます。

日本の現代建築は全般的に軽く透明
で、また大衆的によく言われます。ヨー
ロッパでレクチャータをするの大抵の場
合、「デモクラティックだ」と言われま
す。ヨーロッパでは建築は富と権威の象
徴に属する空間でもあって、僕は面白く感
じています。

屋根を架けると場ができる、というこ
ろは屋根の魅力のひとつだと思いま
す。現代の住宅は、浴室とか寝室とか、
機能が部屋名になっていますが、古民家
や町家、寺などの歴史的建築物は、縁側
とか広間とか、土間とか、空間名が機能
を示さない名前になっています。縁側や
土間、濡れ縁という空間名は、いわば場
の状態、場の様子を言っているだけで、
機能・用途は何でもよいのです。そうい
う名前のつけ方を見ても、古い建築に
は、使いたいように使っているよという
僕には感じられます。場だけがあつて、
その使い方は自由、それは人々に委ねら
れている、というところは実は、金沢21
世紀美術館の頃もやろうとはしていたの
ですが、当時は自由に使える建築とい
うものを、平面操作で作れ出そうとして
いました。結果としては、箱（部屋）を並
べるといどこか機能主義的発想の建築
になったように思います。屋根を架ける
だけでできる建築の単純さや原始性に比
べると、平面操作の建築はやはりどこか
知的というのでしょうか、説明的なこと
ろがあるような気がします。

というような意味で、最近屋根に挑戦
するようになってきました。複雑な操作



寺崎邸

西沢実樹

にしざわ・りゅうえー建築家・横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA教授/1966
年生まれ。1990年、横浜国立大学大学院修士課程修了、妹島和世建築設計事務所入所。
1995年、妹島和世とSANAA設立。1997年、西沢実樹建築設計事務所設立。
主な作品：金沢21世紀美術館[2004]、森山邸[2005]※、ROLEXラーニングセンター
[2009]、豊島美術館[2010]※、ルーヴル・ランス[2012]など(※以外はSANAA)。

詰めていったのではないかと楽しく想像
しています。カタをもつ建築は複雑さを
飛び越えた明快なあり様をつくる。プロ
グラムづくりの中で、モノではなく人々
のつくる時間風景をデザインしていき、
人のいる風景を実現させてきたのではな
いか。さらに外光の取り入れ方を考え、
光の美しさもプログラムしていくことに
も成功し、中庭の光は建築が風景とい
うより人がいる風景を美しくしている。
それにしてもこの頃の、屋根を分節さ
せてハイサイドライトを取り入れている
作品、日本キリスト教団生田教会や、屋
根をテーマにしたような元気な住宅作品
をみると、あの複雑さは何を目指してい
るのかぜひ教えていただきたいと思っ
ています。

二〇一五年八月一九日

長谷川逸子

はせがわ・いつこー建築家/菊竹清訓建築設計事務所勤務、東京工業大学篠原一男研究室
を経て、1979年、長谷川逸子・建築計画工房設立、主宰。早稲田大学、東京工業大学、九州
大学などの非常勤講師、米国ハーバード大学の客員教授などを務め、1997年、王立英国建築
協会名誉会員。2001年、ロンドン大学名誉学位。2006年、アメリカ建築家協会名誉会員。
主な作品：大島町絵本館[1994]、新潟市民芸術文化会館[1998]、珠洲市多目的ホール
[2006]、ふじのくに千本松フォーラム[2013]など。

「人のいる建築風景」は 公共建築にとって大きな課題のひとつですが…

西沢立衛様

私は中学、高校、大学と絵を描くことに夢中になっていて、静岡での新しい芸術活動に関わったりした。東京に来てからは倉俣史朗さんを通じて高松次郎さんを始め、当時、魅力的な活動をしていた芸術家たちの近くで過ごし、高松さんに徳丸小児科のまちに面したコンクリート壁に円弧を重ねた抽象的なドロインングを描いてもらったりもした。その後も海外に出かけると時間があれば美術館と植物園を訪ねている。いつか公共の美術館を設計したいと思って、青森県立美術館のコンペを始めいくつか挑戦してきましたが、未だにその機会がありません。

松山にあるミウラト・ヴィレッジ

は、クライアントの三浦保さんのコレクションと自作の陶器や陶板を展示する美術館である。展示スペース以外に陶芸工房やゲストハウスや屋外パフォーマンスホールなどが一体になっている。アーティスト・イン・レジデンスとして海外のアーティストに制作と滞在の場を提供して作品発表やレクチャーをしてみたり、三浦さんの素晴らしい茶器を使って屋外で茶会を開いたり、お花見をしたりする場もある。三浦さん自身が相当の能楽士であったことから、時には薪能を催すとか、いろいろなイベントを自由に組みながら運営されており、まちの人々にも親しまれています。

富山にある大島町絵本館の仕事は、まちの人々に、設計ではなく、プログラムづくりを頼まれたことから始まった。湘南台文化センターのことも館の展示と運営のプログラムを私たちの事務所がつ



青森県立美術館設計コンペ案

LIXIL
Link to Good Living

株式会社 LIXIL

私たちは、優れた製品とサービスを通じて、豊かで快適な住生活の未来を創造する住まいと暮らしの「総合住生活企業」です。